鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報 I

昭和46年度 ～ 52年度

鎌 倉 市 教 育 委 員 会

序　文

鎌倉市教育委員会
教育長　尾崎　実

鎌倉時代に政治・経済の中心地として栄えた鎌倉は、中世を中心とする多くの埋蔵文化財に恵まれています。四囲の山肌には木陰に隠れて、中世墳墓堂であるやぐらが彫り込まれ、深い谷戸にはお寺の跡が埋もれ、美しい自然と一体となって「鎌倉らしさ」を形造っています。埋蔵文化財は山や畑にあるだけではありません。若宮大路を中心とする市街地には幕府跡や何代も続いた屋敷跡などが、地下の至る所に埋まっています。

近年、ビル工事その他の開発事業が進む中で、埋蔵文化財の発掘調査件数が急速に増加してきました。そのため、今迄不明な点が多かった中世鎌倉の実際の姿が、少しづつ明らかにされてきました。これは単に鎌倉だけに止まらず、広く日本史全体の研究を進める上で大変貴重な成果であるといえます。

しかし、発掘調査で得られた資料を整理するのは大変手数のかかる困難な作業です。このため過去の発掘調査例の全てが整理され成果がまとめられている状態ではありませんでした。

そこで教育委員会では、各年度毎に調査の内容をまとめ、その成果を皆様にお知らせするために「鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報」を刊行することになりました。今回の年報に収録されたのは昭和46年度から52年度までの調査例です。この報告書が各方面に少しでもお役に立つよう、心から祈念する次第です。

最後になりますが、各発掘調査の実施に際してお世話になった多くの方々に、心より御礼申し上げます。

例　言

1　本書は鎌倉市内に於ける埋蔵文化財発掘調査概要の年度別報告書である。

2　本書に所収されたのは、昭和46年度から52年度までに実施された調査例である。

3　調査例は、発掘者の別なく鎌倉市内で実施された全ての事例を所収した。ただし既に調査報告書の刊行されたものについては、書題を紹介するに留めた。

4　各調査例の冒頭に現地調査期間、調査場所、調査者を順次記載した。また巻末に発掘調査個所位置図を掲載した。

5　調査報告書が刊行予定されている調査例については、その旨を記し大まかな概略の記述に留めた。

6　本書は主として文化財保護課学芸員松尾宣方が執筆し、No.46．円覚寺境内（明香池）は同学芸員玉林美男が執筆した。また調査団から概要報告書が提出されたものについては、これを引用しその旨を文中に明記した。

7　調査参加者の氏名は各報文の末尾に記載し、調査報告書刊行予定のものはこれを割愛した。

8　掲載した写真の多くは木村美代治、長谷川健雄両氏の撮影によるもので、一部は教育委員会所蔵写真を使用した。

9　図版作成は玉林美男、永井正憲が担当し、馬渕和雄、木村美代治、福田　誠、浜口　康、若林泰子の諸氏の協力を得た。

10　本書の作成に際しては多くの方々から指導、助言、そして協力を頂いた。特にNo.3．浄智寺境内、No.23．報恩寺跡については、鎌倉国宝館長貫　達人氏（青山学院大学副学長）、学芸担当主幹三浦勝男氏を始め鎌倉国宝館職員の方々、跡見学園女子大学教授三山　進氏らに多大な御指導と御教示を頂いた。

　また全般に亘って、鎌倉考古学研究所員大三輪龍彦、手塚直樹、河野真知郎、斎木秀雄、斎木明美の諸氏から多くの御助言を頂いた。記して謝意を表明する。

11　本書に所収された各調査については、事業者、施工者、そして土地所有者の方々に多くの物心両面に亘る御援助を得てなされたものである。改めて関係各位に深甚なる感謝の意を表明し本書を以って御礼の一端に替えたい。

目　次

昭和46年度の概観 …… 1
1　関谷東正院遺跡 …… 2
2　来迎寺北遺跡 …… 2
3　浄智寺下遺跡 …… 19
4　極楽寺旧境内北やぐら …… 31
5　名越石廓 …… 35
6　釈迦堂跡 …… 36

昭和47年度の概観 …… 37
7　瑞泉寺境内 …… 38
8　極楽寺馬場ヶ谷内遺跡 …… 40
9　極楽寺枡形遺構 …… 47
10　釈迦堂跡 …… 50
11　名越坂古墓 …… 51

昭和48年度の概観 …… 61
12　峰横穴群 …… 62
13　腰越日坂近世墓 …… 62
14　理智光寺橋遺跡 …… 63
15　山ノ内晴明井戸 …… 72
16　多宝律寺跡 …… 74

昭和49年度の概観 …… 75
17　報恩寺跡 …… 76
18　杉本寺境内 …… 80
19　東勝寺跡 …… 83
20　各種工事による出土遺物 …… 83

昭和50年度の概観 …… 105
21　長谷寺境内 …… 106
22　小町一丁目305番口、308番所在遺跡 …… 108

23 報恩寺跡……113
24 多宝律寺跡……128

昭和51年度の概観……129
25 長勝寺遺跡……130
26 報国寺境内……130
27 東勝寺跡……133
28 常盤字仲ノ坂947番所在遺跡……133
29 小町一丁目65番10～12所在遺跡……134
30 多宝律寺跡……137

昭和52年度の概観……139
31 浄妙寺境内……140
32 宇津宮辻子幕府跡……141
33 藤内定員邸跡……143
34 二ノ鳥居西遺跡……144
35 北条氏常盤亭跡……147
36 本覚寺境内……151
37 瑞泉寺境内……153
38 材木座中世集団墓地遺跡……153
39 若宮幕府跡……155
40 極楽寺旧境内……156
41 小町二丁目281番所在遺跡……156
42 光明寺境内……157
43 伝安達泰盛邸跡……160
44 藤内定員邸跡……162
45 安国論寺境内……164
46 円覚寺境内（明香池）……166
47 藤内定員邸跡……173
48 光明寺裏遺跡……175
発掘調査個所位置図……177

昭和46年度の概要

この年、本市の機構改革によって、

れた。これにより従前の不備を補い、調査体制を整備しつつ埋蔵文化財保護行政の促進を図る出発点が定められたのである。その成果は、来迎寺北遺跡、浄智寺境内等の緊急に発見された遺跡に対し曲がりなりにも即応し得た事にも表われている。また一方では、緊急発掘調査の受動性を排すべく、釈迦堂跡の如き目的意識を定めた学術調査も志向された。だが全般的にはまだまだ暗中摸索を繰り返し、ましてや50年代以降盛行する市街地遺跡の調査などは、検討の俎上にさえも上らぬ段階であった。この中で来迎寺北遺跡や釈迦堂跡の調査で得られた経験から、鎌倉地区を囲む山稜中腹の平場や山裾部に略々普遍的に遺跡が所在する可能性が確認された。そして以後の開発事業との調整協議に於いて、当該部分の取扱いが不可欠の課題として確立したのである。

浄智寺境内から出土した大量の古銭は学術的価値はさて置き、極めてセンセーショナルな「発見」として各方面の耳目を引いた。この事の是非はともかく「古銭発見」によって、再出発した本市の文化財保護行政が注目を浴びる結果となったのである。

なお、神奈川県教育委員会による独自の調査として、関谷東正院遺跡の発掘調査と名越に所在する石廟（市指定建造物）の調査及び再建事業が実施された。これには本市も職員の派遣など全面的に協力した。また釈迦堂跡の発掘調査は県・市共同の委託事業であり、現在に至る県市の文化財保護行政面での緊密な協力体制の具体的な礎は、この年度に確立したものである。

1　関谷東正院遺跡

昭和46年７月５日～47年３月31日

関谷字中道1257番

発掘調査団

「東正院遺跡調査報告書－神奈川県鎌倉市関谷所在の縄文時代遺跡について－」神奈川県教育委員会　東正院遺跡調査団　参照

2　来迎寺北遺跡

昭和46年11月１日～７日

材木座二丁目303番

鎌倉市教育委員会

日蓮宗石井山長勝寺の背後（南側）から、時宗随我山来迎寺、伝能蔵寺跡の東側を急峻な山稜が南北に走行する。その西側山裾、来迎寺北方約100ｍの個所で、土留工事中に大量の石塔類と人骨が出土したとの報を得、直ちに緊急調査が実施された。

調査は山裾部に沿った南北約20ｍ、幅約1.5ｍの工事施行範囲内で行われた。検出された遺構は、調査区北側の土壙墓群とその南側の凝灰岩砂岩（鎌倉石）切石で区画された墓域とに大別される。

土壙墓群側は既に掘削工事によって著しく攪乱され、人骨片が散乱した状態であった。辛じて埋葬状態を把握し得たのは、図示した小児骨と成人骨の２体である。何れも大量の火葬骨片を含む木炭、焼土の堆積面上に検出された。小児骨は頭部を北方に、面部を西方に向けた横臥屈葬体で埋葬されていた。掘削工事のため墓壙の範囲は判然としないが、僅かに埋葬骨周辺に段差が認められ、長円形プランと推察される。副葬品として胸骨近くにかわらけ皿、腹部辺りに六道銭として用いられたと思われる古銭が出土した。成人骨は小児骨の北東約３ｍの位置にあり、上半身を北に向けて俯伏状に葬られ、頭骨と手骨部を完全に欠失する。また膝蓋骨以下の足骨も欠くが、これは掘削工事の際に消失したと思われる。埋葬骨を囲むようにして凝灰岩切石が匚状に配され下半身左側にも配石されていた痕跡が認められた。工事による攪乱と右（東）側切石が調査区外に延びるため全容は不明だが、恐らく埋葬骨全体を囲み長方形に配石されたものであろう。北端の切石は70×20cmと他に比し一段と大型であるが、頭骨に該当する部分は内側部分が方形に切除

されていた。頭部と両手を欠く遺骨に対する石囲葬法は市内でも他に例もなく、特殊な埋葬例といえる。

この他調査区東側の山裾壁にも頭蓋骨が露呈し、掘削時の人骨片散乱状態から推しても尚数体の埋葬骨の所在が予想される。

発掘区南側の石列遺構は、主体部の大部分が山裾側に埋没し未調査であるが、確認し得た範囲内に於て概ね三区画に分れるようである。まず発掘区中央部辺りの東側山裾部に半ば埋れた形で石列が南北方向に 2.7m 走行する。石列北端石は宝篋印塔基台部を用い、他の４石は凝灰岩切石を使用する。基台部には「為道上□□逆修□応永□□」との刻銘が認められた。これを第１石列と呼称する。次に第１石列南端石に接して第２石列が検出された。第２石列は第１石列よりも約40cm程西に位置し、その北端石は長軸を東西方向に定め他石と軸を交叉させていた。石材は全て凝灰岩切石で 2.1m に亘って５石並ぶ。第２石列南端側には安山岩製五輪塔地輪、火輪それに安山岩自然石で構成された⊏形の区画が検出された。区画内には特段の施設は認められない。同区画の西側には五輪塔、宝篋印塔の各部の集積個所が発見された。時間的制約のため十分な調査はできなかったが、同集積個所の下には成人骨一体分が検出された。山稜中腹部から押し流された墓葬施設の一部と思われるが、明確ではない。

⊏形区画の南側には凝灰岩切石による石囲状の第３石列が発見された。同遺構上には崩落土が約 130cm程堆積し、各種の石塔類、土葬人骨、火葬人骨片が混在していた。この崩落土を除去し精査した結果、石囲内は木炭と土丹小塊を混入した粘性暗褐色土による版築地形面で構成されていた。同面上の石囲北西隅近くで、約70×40cm、厚さ15cmを計る２枚の凝灰岩製平石が東西に並列して検出された。平石の周辺に限って版築面が青灰色に変色していた。西側の平石をまず除去してみると、その直下に埋設された常滑大甕が検出された。甕は口縁部を欠き、器内には地下水と共に流入したヘドロ状の粘性褐色土が肩部辺まで堆積している。粘質褐色土を除去した結果、甕内に被葬成人骨一体が略々完全な形状で発見された。人骨は体の正面を北西に向け、両膝を抱えた座位屈葬体で埋納されている。また他に甕内からは14枚の古銭とかわらけが伴出した。

第３石列による石囲遺構の西側で、石列に直交する形で宝篋印塔基台部が直列して２個据えられていた。石囲施設の倒壊を防ぐために為された所業と思われる。

なお、第１石列の西側に90×90cm程の範囲に土丹平石を並べた区域が検出されたが、下層からは特段の遺構は確認されない。祭壇状の施設と考えるべきであろうか。

発掘区南側に於ては以上のように３区画に亘る石列遺構の所在が確認され、未調査ではあるが第１、２石列遺構も恐らく第３石列同様に石囲施設による墓域と考えられる。

出土遺物は、かわらけ、常滑焼などの国産品と共に青磁、白磁の舶載磁器も出土した。

かわらけ

第Ⅰ類

発掘区北側土壙墓群周辺出土かわらけである。

PL－1　石囲葬法による埋葬人骨大腿骨付近から出土。口径11.1cm、器高3cm。器壁は厚くやや外に開き、口縁部は外反する。底部にスノコ痕あり。色調赤褐色。

PL－2　小児骨副葬品。口径 8.3cm、器高 2.3cm。器壁はやや厚く僅かに外に開く。色調赤褐色。

PL－3　口径 7.5cm、器高 1.9cm。器壁は薄く下半部に段差をもって外に開く。小型ながらも整形は比較的丁寧で、本遺跡出土かわらけの中では上質の部に属す。色調赤褐色。

PL－4　口径13.3cm、器高 3.5cm。器壁は薄く外に開く。内底面に指圧整形痕が残るが、全体的に丁寧なナデ整形が施される。底部にスノコ痕あり。色調赤褐色。

PL－5　口径10.1cm、器高 3.9cm。器壁はやや厚く中半に段差をもって口縁部は直立に近い。底部にスノコ痕あり。色調赤褐色。

PL－6　口径12.5cm、器高 4.8cm。器壁は厚く口縁部は外反する。内底面中央部は僅かに盛り上り、底部にスノコ痕がある。色調赤褐色。

PL－7　口径16cm、器高 4.6cm。器壁は厚く浅鉢状に外に開き、口縁部は外反する。器壁内面の一部に煤が付着する。内底面に円形状の段差がつき、底部中央部がやや凹む。底部に糸切痕、スノコ痕の無いのは本例のみである。色調茶褐色。

第Ⅱ類

発掘区南側の切石列区画による墓域周辺から出土のかわらけである。

PL－8　常滑大甕内の人骨に伴出。口径 6.4cm、器高2cm。器壁はぼってりと厚く、直立する。口唇部の厚さは一定しない。内底面中央部が若干盛り上り底は厚い。全体に粗雑な整形である。色調茶褐色。

PL－9　第3石列による石囲墓域内から出土。口径 9.5cm、器高 2.7cm。器壁は厚く直立に近い。内底面に円形段差がつき底は厚い。これも全体に粗雑な整形が施される。色調茶褐色。

PL－10　第3石列内出土。口径 5.8cm、器高 1.6cm。器壁厚くやや外に開く。内底面に僅かな円形段差あり。底は厚い。底部に若干のスノコ痕あり。色調赤褐色。

PL－11　五輪塔各部による⊏形区画内出土。口径 6.3cm、器高 1.6cm。器壁は厚く口縁部外反する。内底面に円形段差がつき、底は極めて厚い。底部に僅かなスノコ痕がつく。色調茶褐色。

PL－12　⊏形区画内出土。口径11.6cm、器高 3.4cm。器壁厚くやや外に開く。器壁内側と内底面との境が明瞭ではなく、粗い手捏ね的整形が施されている。色調茶褐色。

PL－13　第2石列内出土。口径 5.8cm、器高 1.8cm。器壁厚く直立する。内底面中央部が若干盛り上る。底は厚い。このタイプのかわらけとしては比較的丁寧な整形が施されている。色調

薄い赤褐色。

PL－14　口径10cm、器高 2.6cm。器壁は厚く直立に近い。内底面中央部はマウンド状に盛上る。底部にスノコ痕あり。色調茶褐色。

PL－15　第3石列外西側木炭面上からの出土。口径 8.2cm、器高 2.5cm。器壁は厚く下段に段差を有し、直立に近い。内底面中央部は盛り上り太い指圧痕が認められる。色調茶褐色。

第Ⅲ類

⊏形区画西側の石塔集積個所から出土かわらけ。

PL－16　口径6cm、器高 1.7cm。器壁はやや厚く中段に段差をもって外に開き、口縁部は外反する。底部外周は高台状に突出し中央部がスノコ圧痕のため大きく凹む。このため内底面中央部が不整形な凸状を呈する。全体としては整形、焼成共に良好といえる。色調赤褐色。

PL－17　口径6cm、器高 1.7cm。器壁やや厚く下段に段差を有し外に開き、口縁部は外反する。器壁内側から内底面に掛けて一様にナデ形整形が施され、境は明瞭ではない。底部にスノコ痕あり。全体的な整形、焼成共に良好。色調赤褐色。

PL－18　口径 6.3cm、器高 1.9cm。器壁やや厚く外に開く。器壁内側から内底面に掛けて、一様にナデ形整形が施され境は明瞭ではない。底部にスノコ痕あり。整形、焼成良好。色調赤褐色。

PL－19　口径 6.7cm、器高 2.4cm。器壁やや厚く外に開き、口縁外反する。器壁内側がややいびつで、内底面に僅かな凸凹がみられる。底部に若干のスノコ痕あり。焼成良好。色調赤褐色。

PL－20　口径10.2cm、器高 3.2cm。器壁やや厚く外に開き、口縁外反する。器壁内側中段辺りに段差を有し丁寧なナデ形整形が施される。整形、焼成共に良好。

出土したかわらけの主なものを概観した結果、第Ⅰ類の土壙墓側出土例と第Ⅱ類石列区画墓域側出土例との間の明確な差異が判明した。即ち、第Ⅰ類は全般的に器壁がそれ程厚くなく且つ外傾し、底部にスノコ痕を残し色調は赤褐色を呈する。これに対し第Ⅱ類、特に石列墓域に関わる例は、器壁が厚く直立ないしはそれに近く、スノコ痕を欠き茶褐色を呈するのが多い。どちらかといえば、Ⅱ類のこの種のかわらけは粗雑な造りが目立ち、従来のからけの概念にⅠ類の方が近い。更にⅢ類の石塔集積個所からの出土かわらけは、整形、焼成共にⅠ類かわらけに比して遜色がないが、これは山腹からの土砂流下の結果とも思え、平面的な対比は避けたい。

ところでかわらけ編年論はまだ十分に確立したとは言難いが、現在までの調査例からみて、当遺跡出土かわらけは15世紀以降の所産とみて大禍なしと思われる。(註1)

第Ⅰ類かわらけを伴出する発掘区北側の墓葬施設に比べ、整形、焼成共に劣る第Ⅱ類かわらけを伴出する石囲墓域の方が、調査し得た範囲に於て遙かに精緻な構造を保持するのは明確である。

この現象を解明するには余りにも調査範囲が狭小であったことと、内容の不十分さが悔まれる

が、かわらけの器形上の差異のみで考えれば第II類群を第I類よりも降る時期に比定せざるを得ない。

白磁皿（図－5　PL－21　）

石囲葬法による埋葬人骨上の山裾断面から出土。出土層は木炭、火葬骨片混りの粘質黒色土層で、人骨とは間層を挟み山腹側からの流下層と思われる。口径12.9cm、器高 3.7cm、高台径 4.0cm。高台脇から口縁部に掛けて内弯気味に一気に立上る。左回転高台削り出し。高台畳付は幅広く良く擦られており滑らかである。高台削りは略々直角。見込み中央部が僅かに盛り上る。素地は灰白色を呈し気泡少なく粘り気は弱い。長石を僅かに含む。釉薬はやや緑色気味の灰白色で、釉調は不安定である。気泡少なく全面に貫入が走る。焼成良好。15世紀中半、明代の所産と思われる。

常滑大甕（図－4　PL－22　）

座棺として用いられたもの。肩部径94.9cm、底径23.8cm、残存高84.8cmを計る大型甕で口縁部は欠失する。

底部は砂底で、底部脇は箆によりナデ仕上げを施す。胴部も略々全面に亘り縦にナデて仕上げ、肩部下と頸部下方に押印文の押捺が部分的に弱まりながらも略々全周する。内面仕上げは胴下半部で横ナデ、中半部から肩部までは従横に粗く箆によるナデ仕上痕が認められる。色調は外面が濃茶褐色、内面は灰褐色を呈し、外面に部分的な降灰釉が認められる。胎土は黒褐色で長石を含有する。頸部から肩部に掛けてのカーブはゆるやかで、肩部先端も円やかである。焼成堅緻。

古銭

小児骨剛葬古銭は現存するものが1点で「嘉泰通宝」。石囲人骨付近からは2枚出土したが「熙寧元宝」のみ判読し得た。常滑大甕内からは14枚検出された。その内訳は下記の種類である。

「開元通宝（2枚）、祥符元宝、天聖元宝、皇宋通宝（2枚）、熙寧元宝、元豊通宝、淳熙元宝、洪武通宝」で4枚は判読不能。この他「天聖元宝、洪武通宝」が排土中から採集されている。

以上の様に当遺跡では15世紀中半から16世紀に掛けての時期に構築されたと思われる墓城群が検出された訳だが、土砂崩落の危険が迫るなど諸々の事由によって一部の確認調査に止めざるを得なかった。確認遺構は山裾部に露呈したものに限られたが、石列材に石塔類を転用したり、崩落土中に大量の人骨、石塔類が包含されたりする現象から推して現山裾部から東側、更には山稜中腹に掛けて墓城の範囲はなお広がるものと考えられる。当遺跡付近の埋葬施設調査例としては長勝寺遺跡が挙げられる。
（註2）

なお、この調査に際しては施工者の方に多大なる御協力を頂いた。また調査期間終盤では深夜に及ぶ作業が連日続き、また最終日には止むことなく流れ出す地下水の中での文字通り夜を徹しての作業であった。改めて関係各位に謝意を表したい。

調査指導者

赤星直忠、大三輪龍彦

調査協力者

手塚直樹、吉井　宏、玉林美男、笹岡範雄、神戸登志子、馬場治子、杉森和子、吉井和代

註１．「鎌倉出土のかわらけ編年試案　斎木秀雄―鎌倉考古No.１」鎌倉考古学研究所　昭和55年５月

「玉縄城本丸跡出土のかわらけ　斎木秀雄―鎌倉考古No.14」鎌倉考古学研究所　昭和57年７月

註２．「長勝寺遺跡」長勝寺遺跡発掘調査団編　昭和53年10月

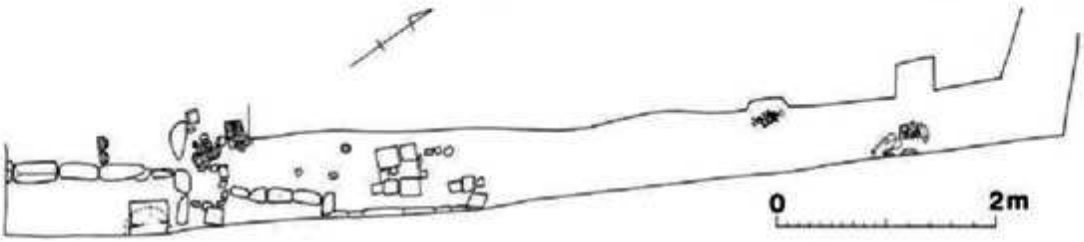


図１　発掘区平面図

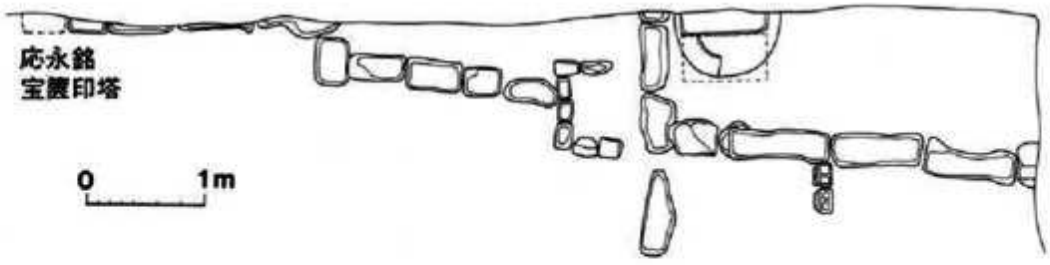


図2　石列遺構平面図

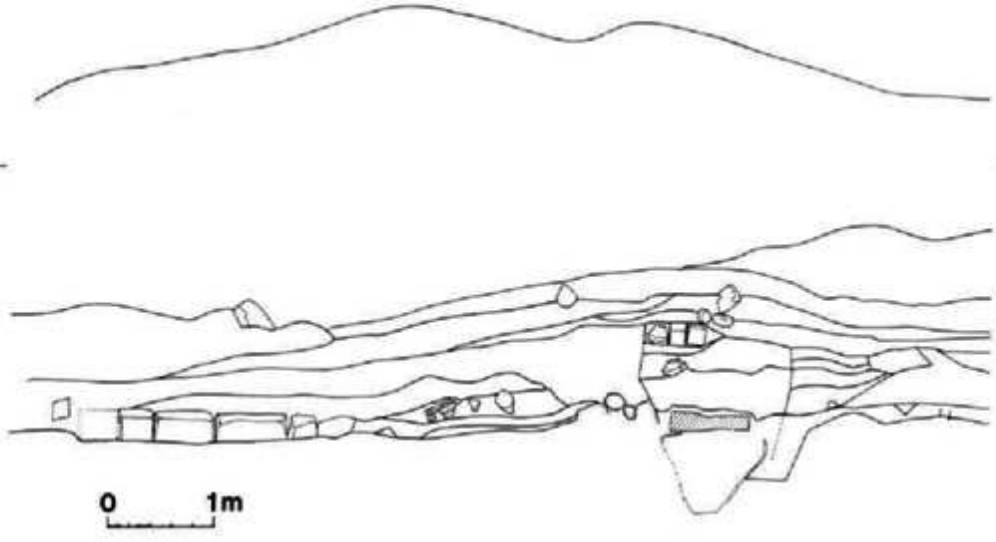


図3　石列遺構東壁断面図

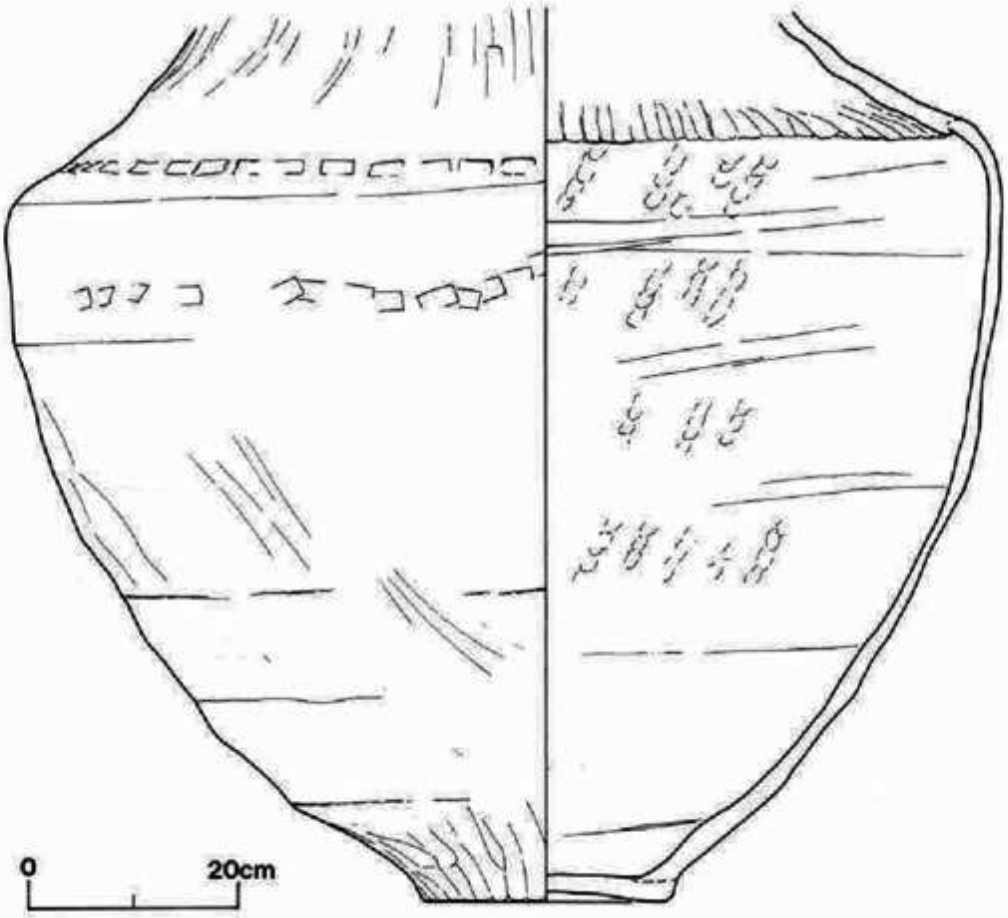


図4　常滑大甕

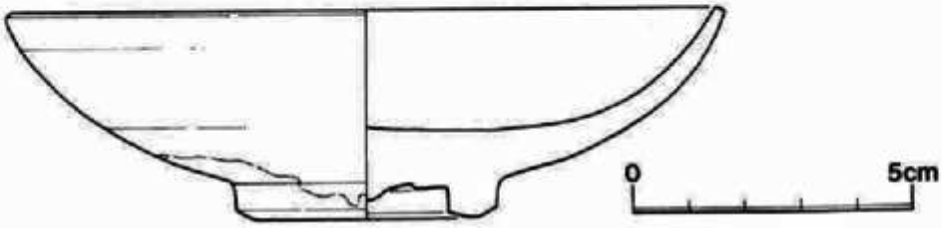
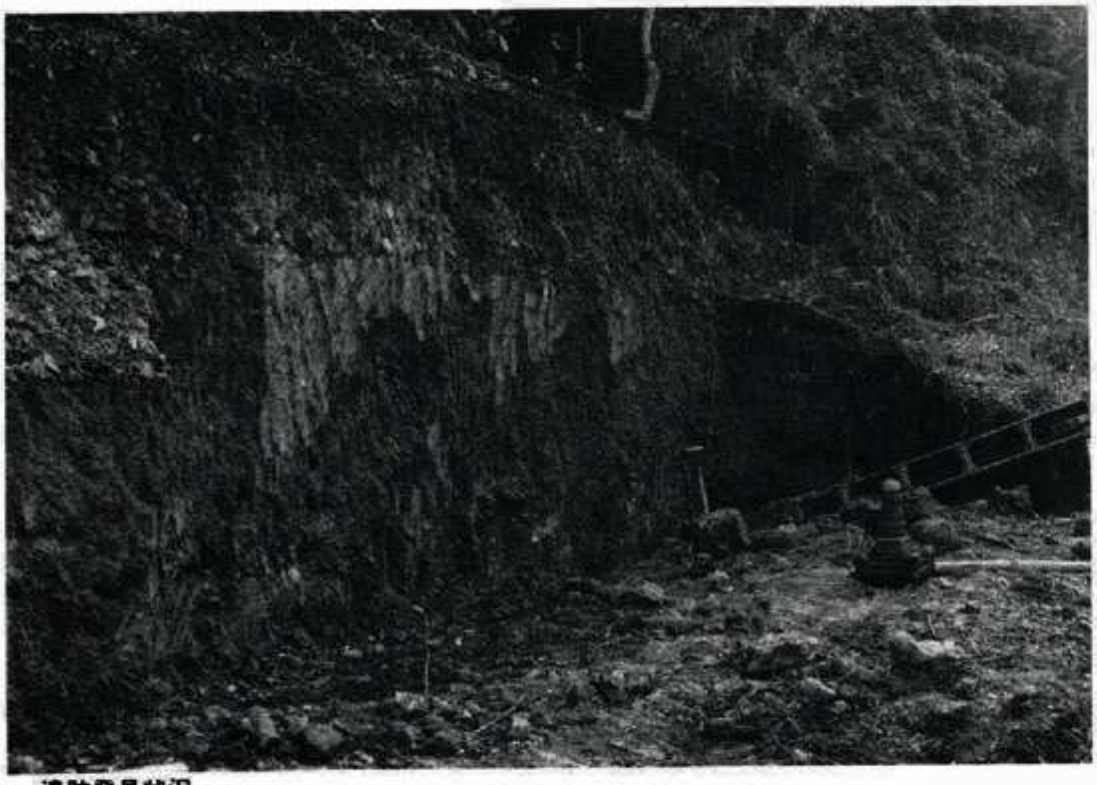


図5　白磁皿



遺跡発見状況

崩落土堆積状況

小児骨

成人骨

第２石列

第３石列を支える宝篋印塔基台

大塊蓋石

大塊発見状況

木板出土状況

人骨埋納状況

夜間作業状況

第Ⅰ類

1

2

3

4

5

6

7

第Ⅱ類

8

9

10

11

12

PL 1～12 ½

第III類

13

14

15

16

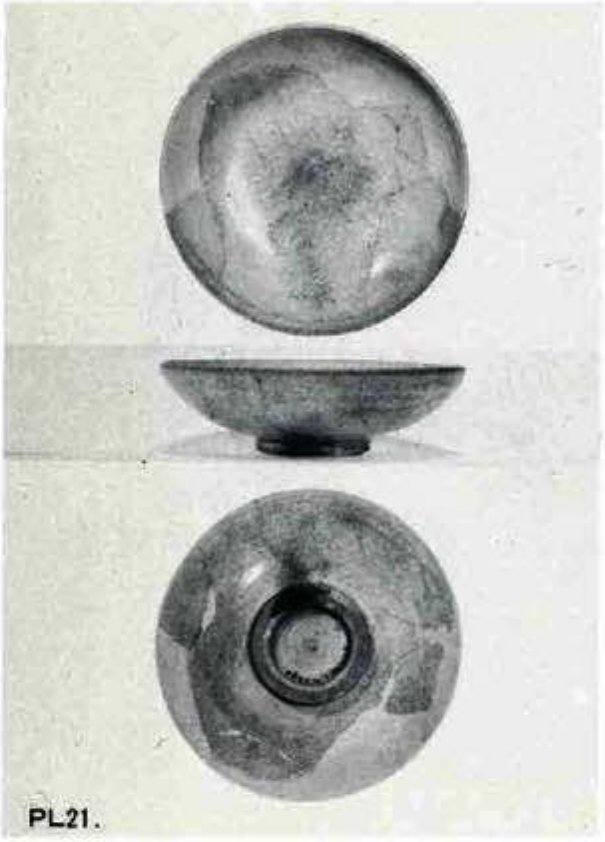
17

18

19

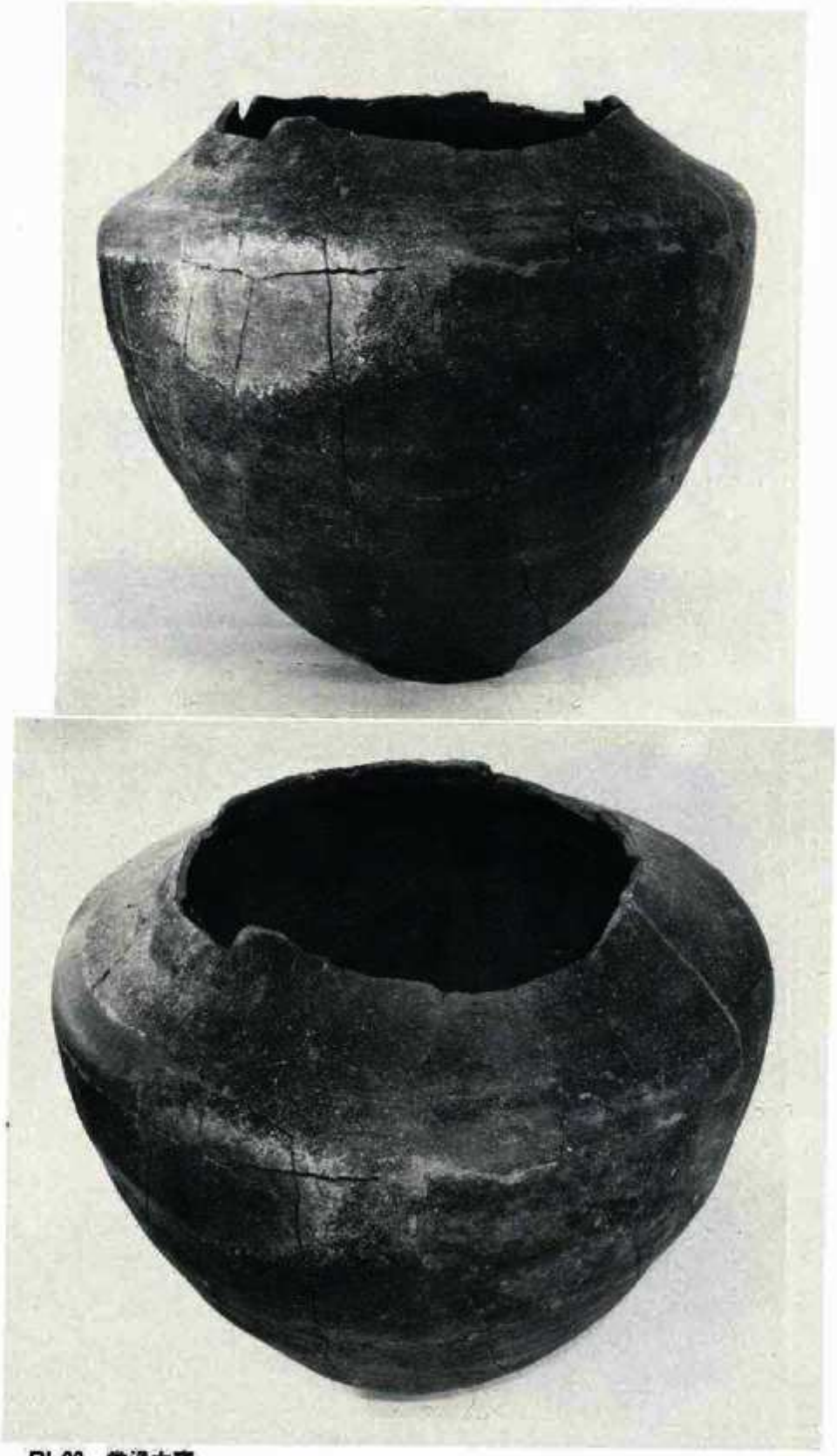
20

PL13～20 ½



PL21.

白磁皿



PL22. 常滑大甕

3　浄智寺下遺跡

昭和46年11月７日、24～28日

山ノ内字金宝山1429番

鎌倉市教育委員会

防火貯水槽設置工事に伴う緊急発掘調査である。調査地は、臨済宗金峰山浄智寺総門手前の石橋から東方約18mの個所。背後の山稜山腹部には数段の階段状平場が所在する。

昭和47年11月６日、掘削工事が着手されて間もなく常滑の大甕と、それに収納された大量の古銭が発見された。直ちに工事は中止され、翌７日に出土遺物の採集作業、続いて24日から状況確認等の緊急調査が実施された。

出土状況記録は写真に依るしかないが、常滑大甕は土圧のためか肩部から割れて収納銭の上に押し付けられていた。収納銭は穿部に植物繊維質の紐を通し連繋された形で一分の隙間もなく詰め込まれた状態であった。地下水の侵透による錆化と重圧のため、甕内下半部の収納銭は固く密着し残存状態は良好とはいえない。

常滑大甕の出土状況は、掘削工事の過程で発見されたため周辺が攪乱されていて正確な層位関係等を把握するのが困難であった。このため、出土地点を含めて2.2×0.5mトレンチを設定し、可能な限りの層位観察を試みた（図２参照）。その結果、図示したように大甕はⅢ層中に掘り込まれた埋納用穴内に納置されたことが判明した。

Ⅲ層は部厚い土丹地形層で火を受けた為か赤く変色した土丹が多く、またかわらけ、常滑焼等の遺物を包含する。同層の下には４枚の木炭層がみられ、各々何らかの遺構層と思われる土丹版築地形層上に堆積する。トレンチ北壁の第一木炭層下には小ピットが検出された。またこの北壁断面で、最上層の遺物包含層であるⅡ層から掘り込まれた方形状の大型ピットが検出された。ピット底面には礎板と思われる木片が密着する。

古銭（PL－１～３）

大甕内に収納された古銭の量は、一括資料として現在に於ても市内最大量である。今回、無作為に抽出した資料の分類と、総重量から全体枚数の推定を試みた。古銭の種別分類結果は表のとおりである。また古銭全体の総重量は678.5kgで、種別の判明した14942枚に58枚加算した15000枚の重量は54.5kgであった。これを比率計算すれば総数は186743枚と算出される。誤差等を勘案しても18万台の中程を動かない枚数と推察されるが、今後の本格的な整理を期したい。

浄智寺下出土古銭一覧表（抽出分）

番号	銭貨名	枚数(枚)
1	開元通宝	1,136
2	乾元重宝	23
3	唐国通宝	8
4	宋通元宝	32
5	太平通宝	156
6	淳化元宝	109
7	至道元宝	260
8	咸平元宝	266
9	景徳元宝	344
10	祥符元宝	337
11	祥符通宝	195
12	天禧通宝	354
13	天聖元宝	679
14	明道元宝	40
15	景祐元宝	244
16	皇宋通宝	1,693
17	至和元宝	133
18	至和通宝	21
19	嘉祐元宝	129
20	嘉祐通宝	246
21	治平元宝	321
22	治平通宝	9
23	熙寧元宝	1,341
24	元豊通宝	1,994
25	元祐通宝	1,262
26	紹聖元宝	619

番号	銭貨名	枚数(枚)
27	元符通宝	205
28	聖宋元宝	569
29	大観通宝	197
30	政和通宝	618
31	宣和通宝	22
32	建炎通宝	1
33	紹興元宝	1
34	紹興通宝	1
35	正隆元宝	9
36	淳熙元宝	21
37	大定通宝	1
38	紹熙元宝	3
39	慶元通宝	6
40	嘉泰通宝	1
41	開禧通宝	4
42	嘉定通宝	16
43	大宋元宝	1
44	紹定通宝	1
45	嘉熙通宝	1
46	淳祐元宝	1
47	皇宋元宝	2
48	景定元宝	2
49	至大通宝	1
50	洪武通宝	526
51	永楽通宝	780
合計	合計	14,942

かわらけ（PL－1）

大甕を据えた埋納用穴覆土中から出土したもの。口径7.9cm、器高1.7cm。器壁は薄く底部から内弯気味に口縁に至る。内底面は盛り上り、底部にスノコ痕なし。全体にナデ仕上による整形が施される。胎土の色調は黄褐色で気泡が多い。色調黄褐色。焼成良好。

常滑大甕（図－4、PL－2）

口径58.2cm、肩部径97.8cm、底径29.5cm、高さ88.8cmを計り、市内出土遺品としては前掲の来迎寺北遺跡出土の常滑大甕を上回る最大の甕である。

口縁部はやや小振りの縁帯を巡らし、横ナデ調整仕上げを施す。頸部から下に掛けて縦方向に箆によるナデ仕上げが認められる。頸部下段と肩部直下に押印文の押捺が略々全周する。胴部は左から右に掛けて斜行する箆ナデ調整痕が認められる。底部は砂底で、底部脇から上に箆による仕上げ痕が僅かに残るが重圧のためか一部不整形となる。内面仕上げは頸部に箆による粗い整形痕が顕著で、胴部は大まかな横ナデ整形が施される。色調は橙茶褐色で、部分的に降灰による自然釉が認められる。胎土灰褐色。焼成堅緻。底部から肩部にかけて、そして肩部から口縁にかけての立上りカーブは、来迎寺北遺跡出土大甕に比べ、やや鋭角に近い。

調査協力者

手塚直樹、玉林美男、神戸登志子

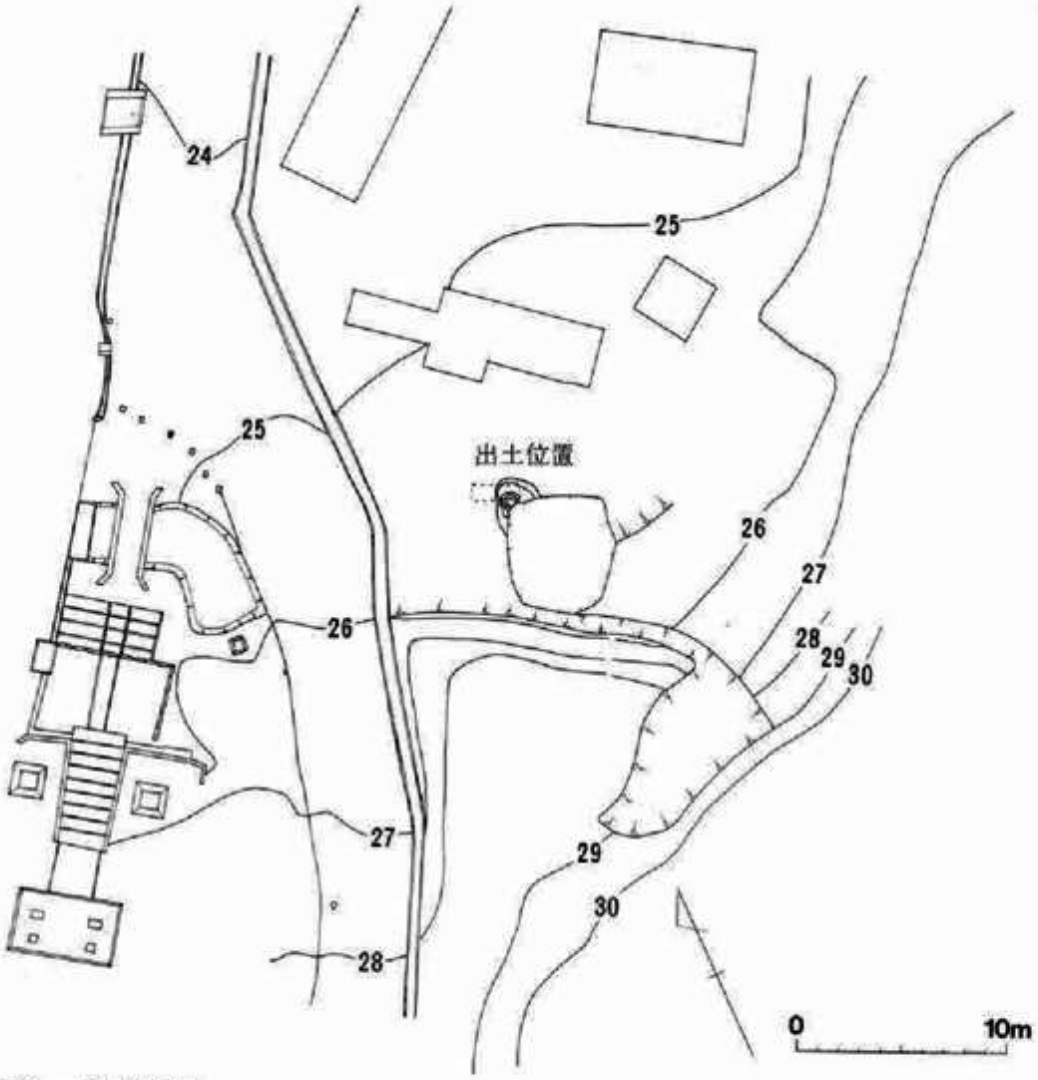


図1　周辺地形図

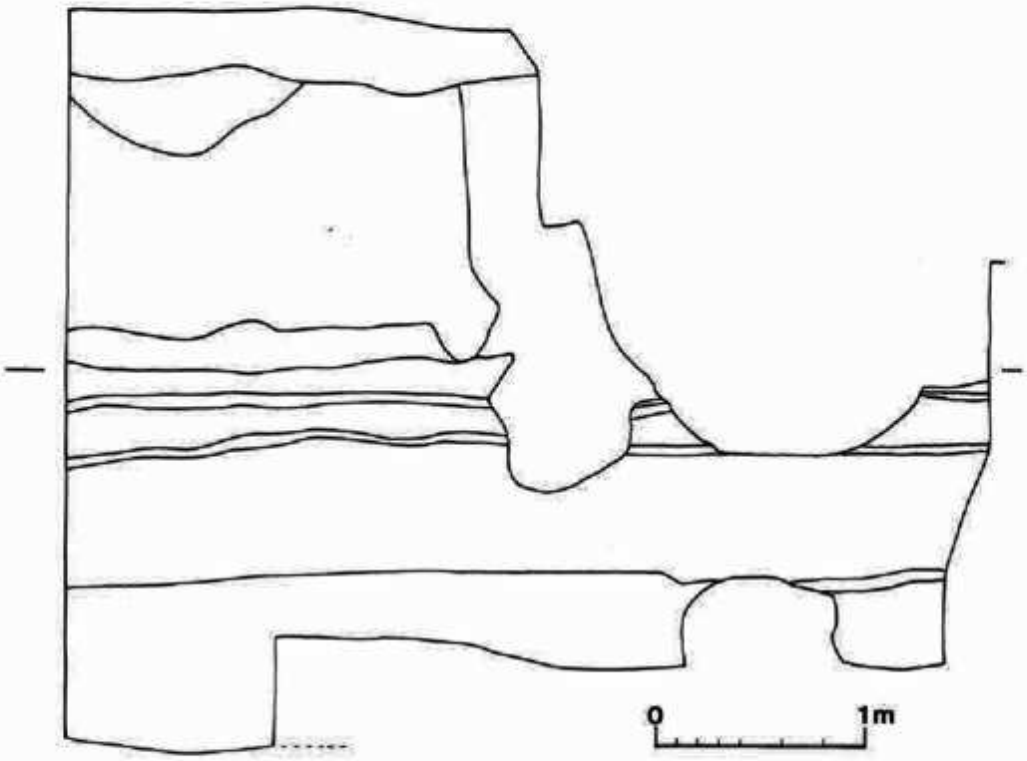


図2　トレンチ南壁断面図

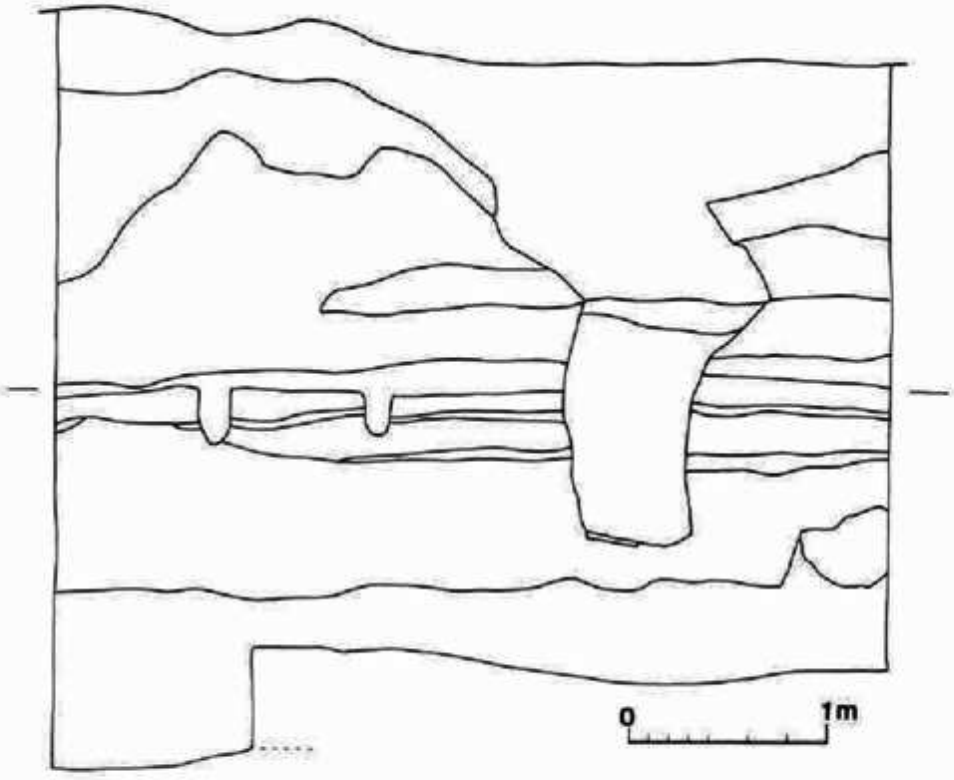


図3　トレンチ北壁断面図

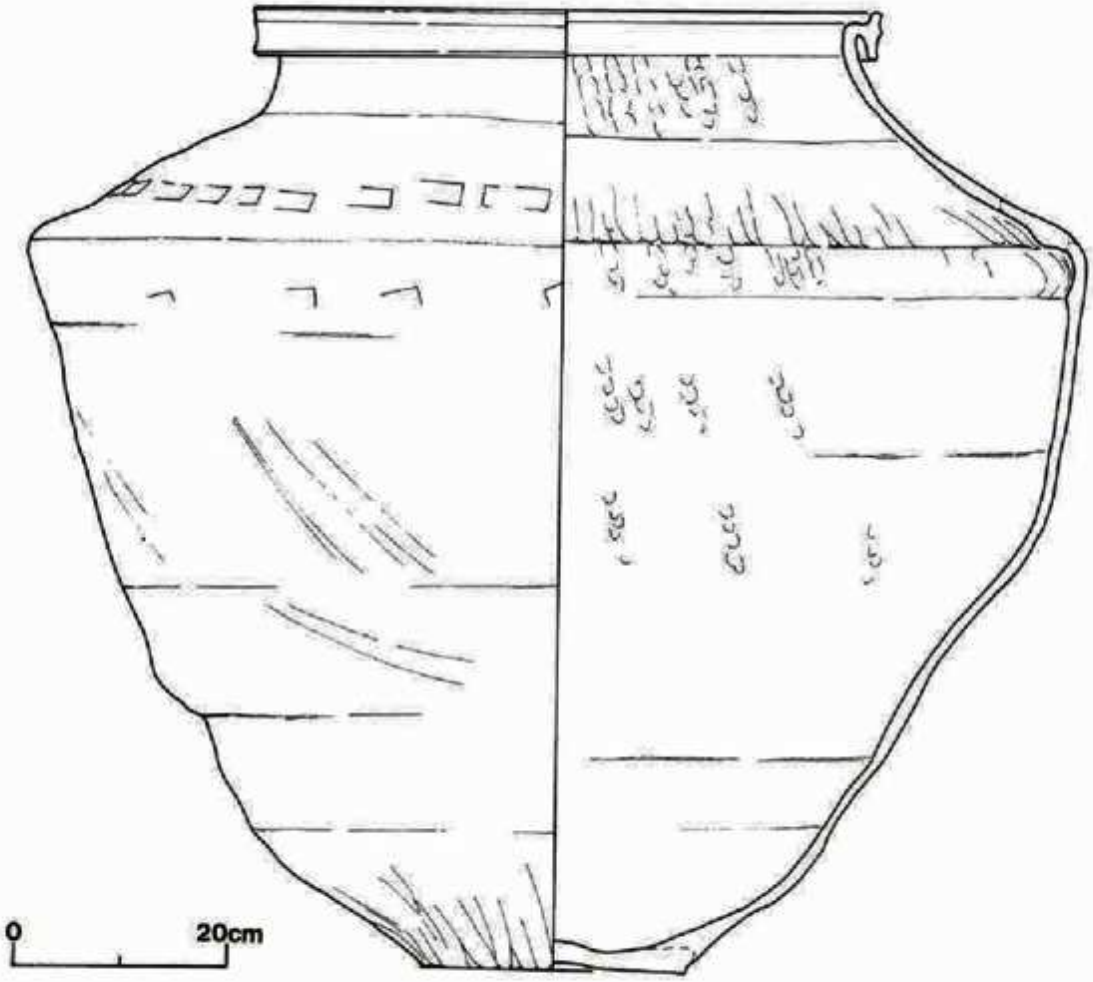


図4　常滑大甕

常滑大甕発見状況

古銭収納状況

紐餞状況

方形ピット

PL 1．かわらけ½

PL 2．常滑大甕

開元通宝
乾元重宝
唐国通宝
宋通元宝
太平通宝
淳化元宝
至道元宝
咸平元宝
景德元宝
祥符元宝
祥符通宝
天禧通宝
天聖元宝
明道元宝
景祐元宝
皇宋通宝
至和元宝
至和通宝
嘉祐元宝
嘉祐通宝

出土古銭例（1） ½

治平元宝

治平通宝

熙寧元宝

元豊通宝

元祐通宝

紹聖元宝

元符通宝

聖宋元宝

大觀通宝

政和通宝

宣和通宝

建炎通宝

紹興元宝

紹興通宝

正隆元宝

淳熙元宝

大定通宝

紹熙元宝

慶元通宝

嘉泰通宝

出土古銭例（2） ½

出土古銭例（3） 1/1

4　極楽寺旧境内北やぐら

昭和47年２月１日～３日

極楽寺四丁目986番１先市道

鎌倉市教育委員会

市立稲村ヶ崎小学校前から月影地蔵堂方面に至る道路は、真言律宗霊鷲山感応院極楽寺の境内絵図に描れた、旧境内主要伽藍の脇を東西に走行する路の名残りと推定されている。この道路が北へ大きく迂回するコーナー付近の北側山裾部で、道路拡張工事中にやぐらが１穴発見された。(註１)このため、直ちに緊急調査が実施されたのである。

やぐらは玄室部の一部と羨道部が掘削工事によって著しく破壊されていたため、全容は不明であるが、残存数値は奥行140cm、玄室部最大幅120cm、高さ75cmを計り全体的に小規模なものと推察される。

玄室平面の形状は半円形に近く、東西両壁際に納骨穴が各々２穴、また床面中央部付近に長方形の溝状遺構が検出された。羨道部には、階段状段差が２段認められた。図示した番号に従って各施設と出土遺物の概要を次に記す。

（表）

No.	遺　構	床面下レベル	形　状	出土遺物
1	納骨穴	31　cm	方　　形	火葬骨、銅製煙管
2	納骨穴	2.4cm	方　　形	火葬骨
3	納骨穴	24　cm	不整円形	火葬骨
4	納骨穴	16　cm	円　　形	火葬骨(断片のみ)
5	溝状遺構	5　cm	長方形	な　し

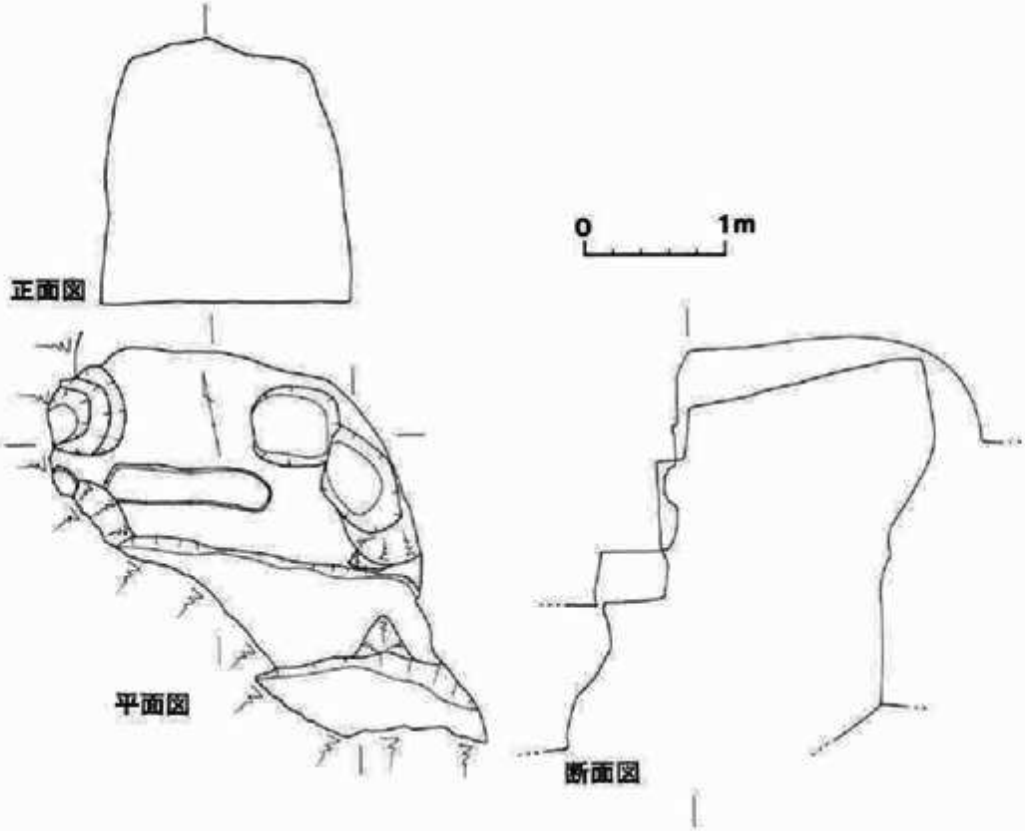
この他No.１、２納骨穴の境界付近にかわらけ２個体が重複状態で検出された。また羨道部の掘削による出土と思われるが、崩落残土中から安山岩製一石五輪塔と地蔵菩薩立像を浮彫にした墓碑が各１基、そして緑泥片岩製板碑断欠が採集された。一石五輪塔は空風輪を欠く。現在高は51cm、幅約22cm、奥行16cmを計る。墓碑は光背船形型式と思われるが、地蔵菩薩首部と共に光背先端部を欠失する。現在高は34.5cm、台座幅21cm、同奥行11cmであった。

玄室床面上出土のかわらけ及び納骨穴内出土の銅製煙管は、実は現存しない。取上後、その所在が不明なのである。調査者として不徳の至りと銘記する。

煙管の伝来史に鑑みた場合、当やぐらの上限年代を17世紀前半頃と一応推定したい。なお調査実施に際しては、極楽寺住持田中密隆氏と田中敏子氏に格段の御協力を頂いた。記して謝意を表

す。

註1．「鎌倉の古絵図（1）ー鎌倉国宝館図録（15）ー」鎌倉市教育委員会鎌倉国宝館　昭和43年3月



発見状況

やぐら全景

No. 1 納骨穴

5　名越石廟

昭和47年３月３日～７日

大町七丁目1655番１

神奈川県教育委員会

「名越石廟について　赤星直忠」埋蔵文化財発掘調査報告８集　神奈川県教育委員会　昭和50年３月　参照

6　釈迦堂跡

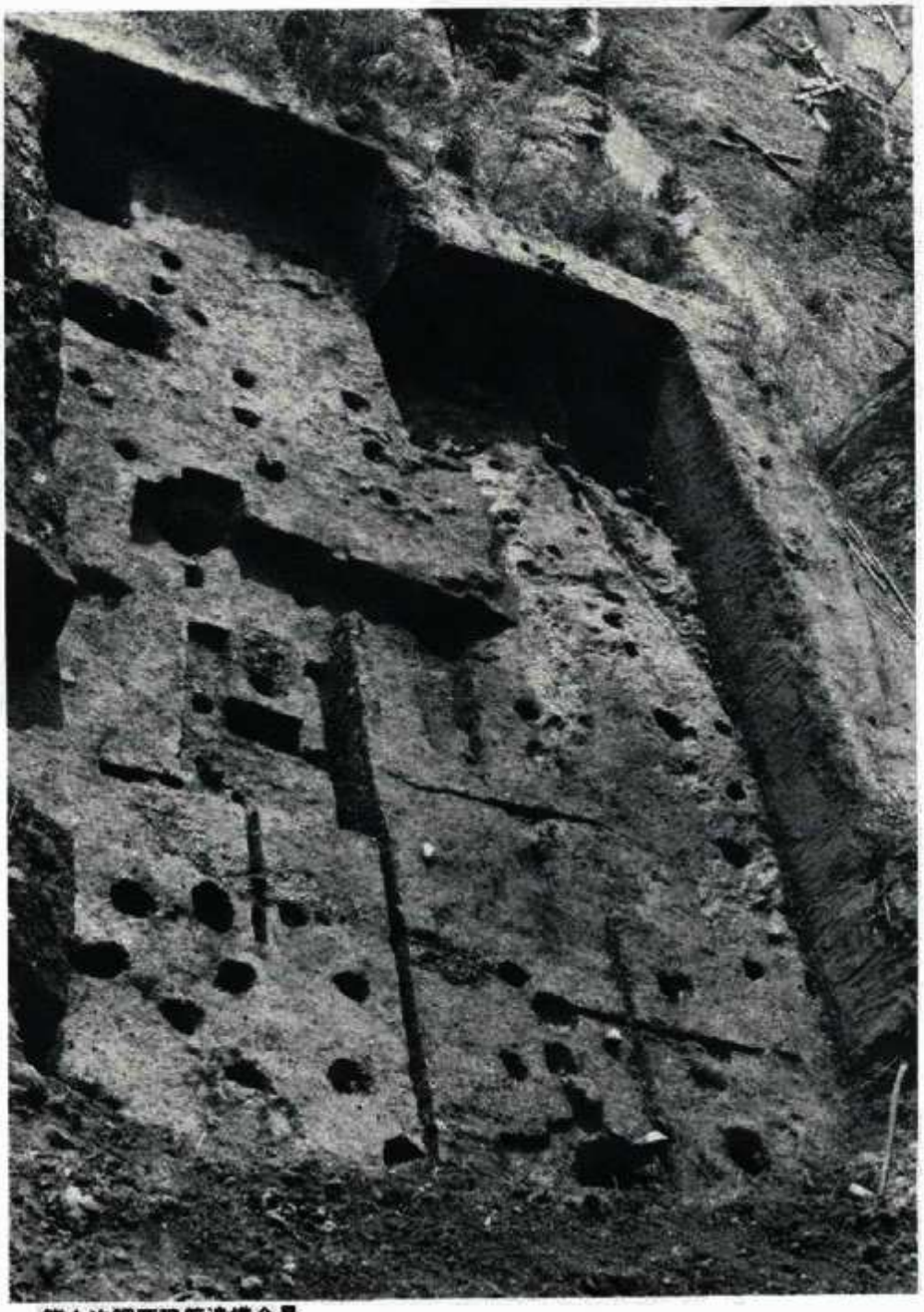
昭和47年３月10日～４月６日

浄明寺字釈迦堂ヶ谷642番

発掘調査団

釈迦堂は北条泰時が亡父義時の追善供養のために建立されたと伝えられ、大御堂ヶ谷（勝長寿院跡）の東側谷戸内に所在する。谷戸奥には唐糸やぐら、日月やぐら、普川国師入定窟など多数のやぐらが分布し、東西山稜上には、切岸、堀切、曲輪等の山城施設遺構が認められた。調査は谷戸西側山腹内の一支谷を対象にして、県市の共同委託事業として奥田直栄氏を団長とする調査団によって実施された。調査目的は市内山稜部の随所にみられる山腹内支谷の考古学的性格を把握する為である。調査によって、鎌倉期～室町期の建築遺構を検出し、また多種多様に亘る出土遺物も得られた。調査成果の一部は既に紹介されているが、(註１)詳細については発掘調査団の報告書刊行を待ちたい。

註１．「鎌倉武士の生活遺跡の考察―谷とやぐら―大三輪龍彦、松尾宣方」歴史手帖４月号　名著出版　昭和52年４月



第１次調査建築遺構全景

昭和47年度の概観

47年度は、前年度に比べ調査件数が減少するが、内容的には極楽寺枡形遺構や釈迦堂跡のように本市が目的意識的に実施した調査があり、資料をより蓄積させることができた。工事に伴う緊急調査例は、瑞泉寺と名越坂古墓の２例であるが、名越坂古墓は前年の来迎寺北遺跡に次いで行われた墳墓遺跡である。中世墓制研究にとって貴重な資料が得られたといえよう。

なお、本書では直接触れないが前年度末から鎌倉市文化財総合調査が開始され、基本資料の収集整備作業が進展した。考古学に関する資料も逐次収集されたことは言う迄もない。

7．瑞泉寺境内

昭和47年11月5日～10日

二階堂字紅葉ヶ谷710番

鎌倉市教育委員会

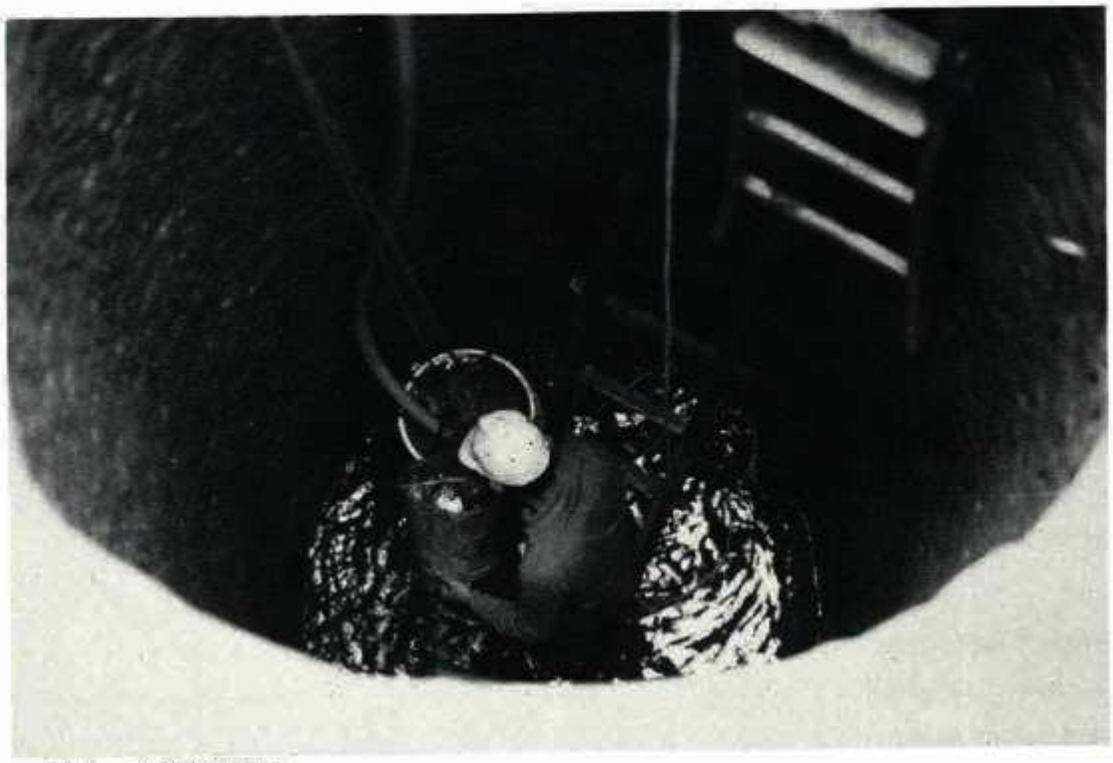
臨済宗錦屏山瑞泉寺の墓地拡張工事の際に発見された井戸の緊急確認調査である。調査地は本堂北側の、墓地として使用される谷戸東側山裾部で、この辺りは地表下20cm程で削平岩盤面が表出する。井戸はその削平岩盤面上に検出された。径約1.5m、深さ約8.5mの円形素掘り井戸で、側面壁は上端部から螺旋状の弧を描くようにして削り出されている。井戸に伴う出土遺物は、底面近くでかわらけ破片、木片、葉、そして桶と思われる木製曲物容器の破片などが若干量検出されたのみである。

井戸上端部近くの削平岩盤面上には、円形ピットが数ヶ所検出されたが、規格、配列共に不安定で、井戸に伴うものかどうかは不明である。井戸底から採集されたかわらけ片は何れも器壁が厚く、胴部が直立するタイプであり、室町期の所産と思われる。

なお、岩盤素掘井戸の類例としては、大町四丁目1906番付近の造成工事現場の断面に発見されたものがある。推定径約1.4m、高さ約7m。（PL－2）

調査協力者

玉林美男



PL1　井土発掘風景

PL 2
大町四丁目1906番付近井戸跡（参考）

8．極楽寺馬場ヶ谷内遺跡

昭和48年1月20～23日

極楽寺二丁目994番

発掘調査団

昭和47年11月30日、極楽寺馬場ヶ谷奥の東側山裾部近くで、土替工事中にかわらけが出土したとの報が寄せられた。これを受けて市教育委員会は、遺跡の性格及び周辺の状況を確認するために赤星直忠博士に発掘調査を委託した。その内容については調査団から提出された概要報告書を引用する。

極楽寺馬場ヶ谷内、宅地北東隅に於いて、土取の為約1m掘り下げたら、数個のかわらけ皿とその断欠、並に古瀬戸灰釉小壺を発掘した。市教育委員会に於いては、その隣接地を掘り広げ、遺跡の性格を把握しようとしたものである。

発掘経過

遺跡は極楽寺の北側、南西から北東に深く入り込んだ谷の奥に近い東南側山裾にある。山田一義氏がかわらけ皿等を発見した地の西北側隣接地3m×2mを発掘区とした。上部45～50cmは埋土で、陶片、ガラス片その他のごみ層。その下約50cmは淡黄褐色粘質土で無遺物。この層の下は泥岩塊を敷きつめてあり、部分的に10～15cm凹み、青味淡褐色粘質土がつまる。岩塊敷の凹所にたまったこの土中から岩塊直上にかけて、かわらけ皿、小皿が群在し、多くは破損しているが、完形品もある。うすく灰釉をかけた鉢形陶器断欠、古瀬戸おろし皿断欠を混在した。かわらけ皿中には三個が入子になったものもあり、これらが何らかの意図で岩塊敷の凹みに群在したものと思われるが、何らの遺構もない。かわらけ皿及びその断欠の埋没は水平とは限らず、その群は南北方向に分布する。岩塊敷の高い部分も南北方向になっているようだが、それらが遺構であるかどうかは分からない。発掘区の南西部に隣接して3m×1.5m程の拡張区を作ったが、前記かわらけ群の南に続いている数個のかわらけ小皿の埋没を明らかにしたに留まる。岩塊敷の厚さは70～75cmに及び、稀にかわらけ小片を混在した。その下は黒味青粘土層となり湧水があった。

発掘結果

自然の谷は、両側山腹からの崩壊土や岩塊で山裾が高く、谷中央が低くなっていたものと考えられる。谷間を平地として利用する為には、この崩壊土や岩塊を以て谷を埋め、平らめたものと考えられ、70～75cmの岩塊は、山裾の崩壊岩塊及び山裾を削り取ったものを削平したあとであり、

部分的に凹部があったらしい。建物跡は発見しなかったが、付近に何らかの建物があり、使用済又は破損物を凹部へ投棄したものと考えられ、今回発掘されたのはその一部であろう。古瀬戸小壺やかわらけ皿の破損せぬものが出たのは、不用品として捨てられたものか、何らかの意図で埋められたものかは不明である。

それらのかわらけ皿は何れもやや薄手、焼成もやや良好であり、日用品としての素焼皿である。口縁に黒く焦げ跡のあるものが多いのは、それらの大部分が灯明皿の用途にあった為と考えられる。古瀬戸おろし皿片や灰釉浅鉢断欠は日用品の破損品であり、それが混在したことから、これをごみ捨て場跡と判断することも可能である。これら出土品は鎌倉期のものであるから、この遺跡が作られた時期も鎌倉期である。

（赤星直忠）

調査団長

赤星直忠

調査員

塚田明治、大三輪龍彦

調査補助員

吉井　宏、玉林美男

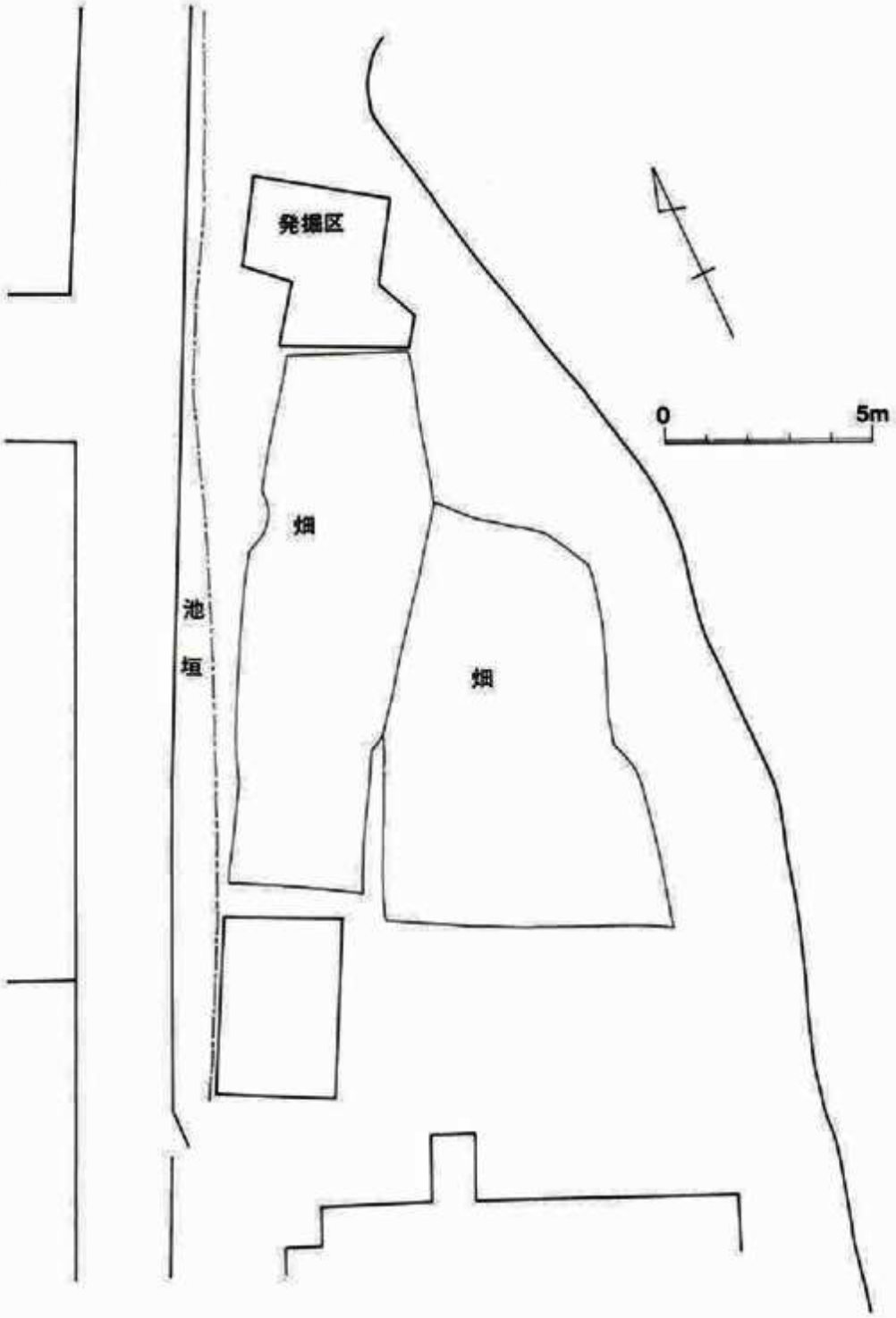


図1　発掘区周辺図

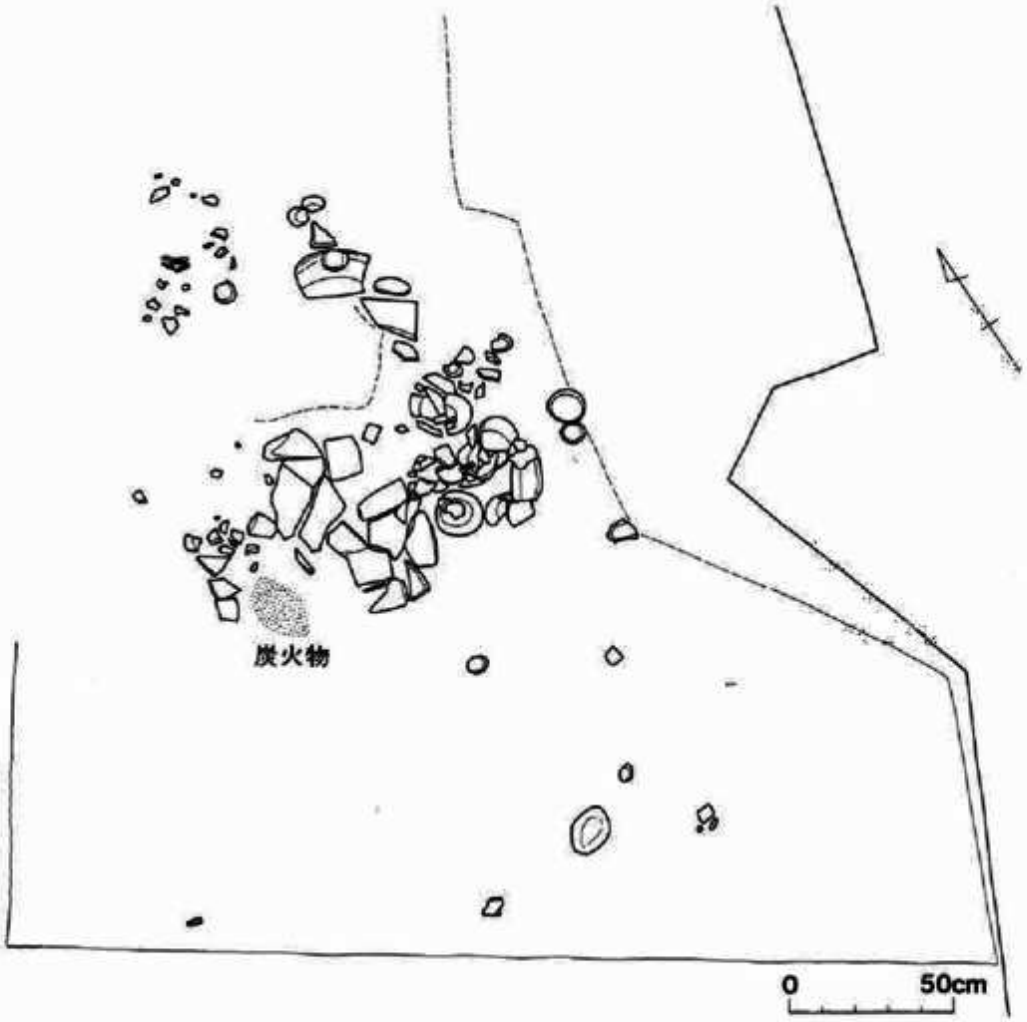


図2　遺物出土状況図

遺物出土状況

常滑甕

瀬戸平鉢　　½

9．極楽寺枡形遺構

昭和48年1月24日～2月4日

極楽寺四丁目855番1付近

鎌倉市教育委員会

馬場ヶ谷は極楽寺北方に延びる奥行きの長い谷戸であるが、西方の西ヶ谷との境を為す山稜上に通称「一升枡」と呼称される枡形遺構の所在が古くから知られている。鎌倉市教育委員会では、山稜上山城遺跡の具体例としてこの枡形遺構の概要把握を企画し、馬場ヶ谷発掘調査終了後、直ちに同遺構に対する地形測量調査を実施した。

枡形遺構は約800㎡の山稜頂部の平場から略々40m南下した地点の、稜線上削平平場内に在る。山稜頂部の平場からは、北東に大仏坂、化粧坂、亀ヶ谷方面、北に北野神社を祠る山崎天神城跡、洲崎方面、北西に玉縄城跡方面の各要衝が一望され、更に南に目を転ずれば、極楽寺切通し、稲村ヶ崎及び極楽寺切通し上の真言宗普明山法立寺成就院背後の山稜上に所在する枡形遺構（通称五合枡）などが間近に見える、格好の眺望地である。

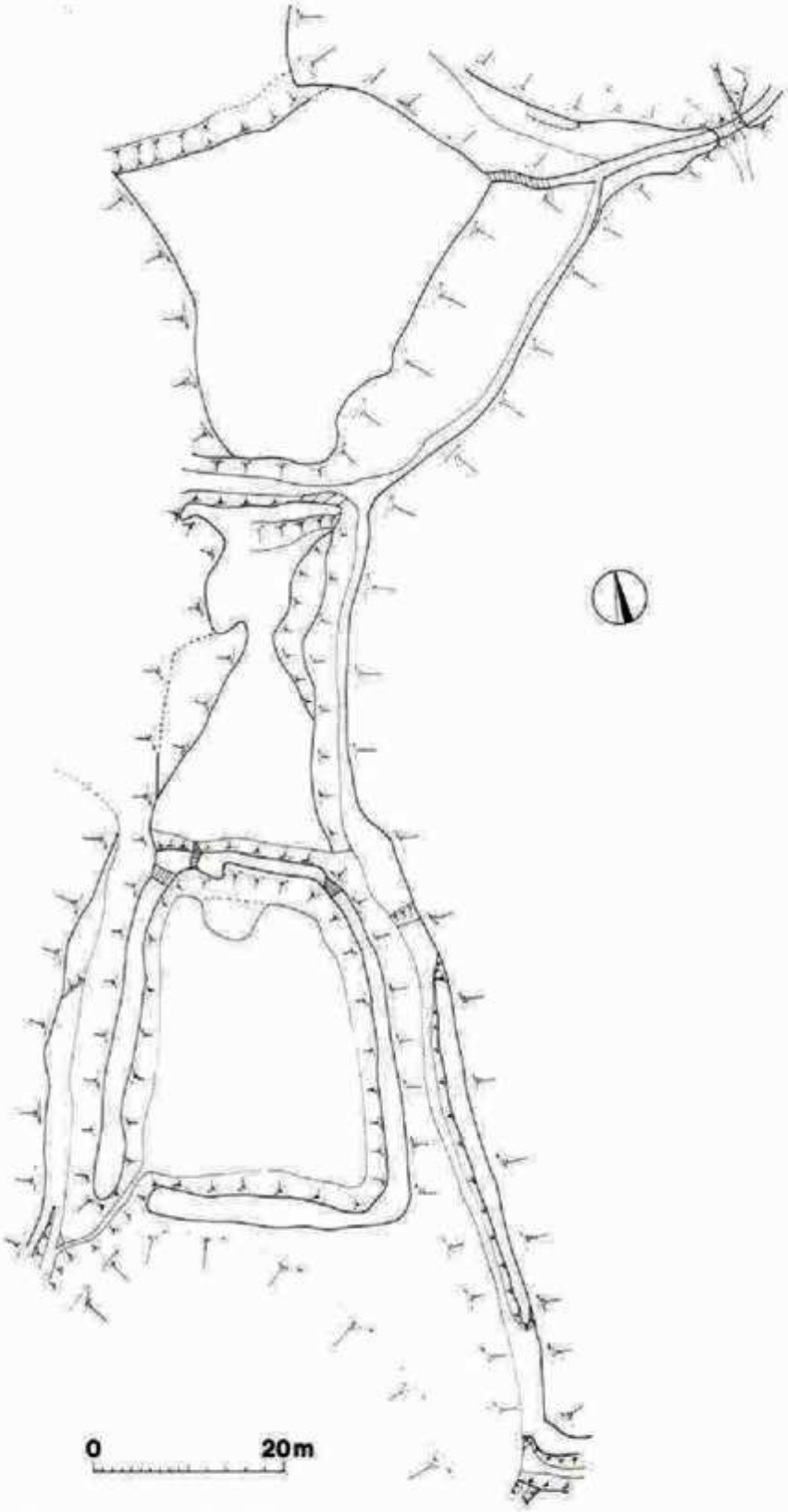
さて一升枡と呼ばれる枡形遺構は高さ約1.5mの土塁を、北辺18m、南辺27.5m、東辺32.5m、西辺35mの規模で巡らした、台形状の区画形状を呈する。その南西コーナー部分では土塁が接合せず、幅3.5mの出入口施設と思われる間隙部となり、その外側に道状の凹みが南下する。枡形内部は平担で、全体的な残存状態は極めて良好である。

周辺遺構としては、まず枡形の東西両側に3～4m程の段差を挟んで袖曲輪状の平場が山腹に沿って南北に走行する。枡形北側には長軸約35mの中央部が縊れた平場が存し、東西に稜線を切断する堀割状の溝を頂部平場との境とする。頂部平場東方斜面上には、小規模ながらも土橋、及び堀割状の遺構が確認された。

以上が、枡形遺構及びその周辺の概況であるが、極く限られた範囲内の調査にも拘ず確認された種々の遺構は、築造年代は不明ながらも相当規模の堅固な山城跡の所在を推定するに十分であった。

調査協力者

大三輪龍彦、手塚直樹、吉井　宏、玉林美男



枡形遺構及び周辺地形実測図

枡形遺構南西隅部付近

10．釈迦堂跡

昭和48年３月１日～22日

浄明寺字釈迦堂谷642番

発掘調査団

前年度に引き続き県市の委託事業として、奥田直栄氏を団長とする調査団によって実施された第二次発掘調査である。調査内容の詳細は刊行予定の調査報告書に委ねたい。

第２次調査建築遺構全景

11．名越坂古墓

昭和48年３月27日～４月10日

大町五丁目2036番

鎌倉市教育委員会

鎌倉七口の一つ、三浦半島に通じる名越坂の鎌倉側登り口は、横須賀線トンネル北側の山腹中に古道の名残りを留めている。その西端近くの山腹面で宅造工事中に五輪塔等の石塔類や大量の火葬骨片が出土したとの報が寄せられた。直ちに関係各方面と協議の上、緊急確認調査が実施され、削平岩盤上に構築された室町期の墓域が検出されたのである。

調査に着手した時点では、既に造成工事のため凝灰岩製五輪塔、緑泥片岩製板碑等の石塔類や火葬骨、かわらけ等が散乱した状態であった。五輪塔は梵字が薬研彫に刻され、黒漆を下地にして金粉を塗色したものが多い。宅造予定地中央部から南東側に掛けては、造成工事面下40～50cm程で削平岩盤面に達し山裾部に至る。時間的制約で全面調査はできなかったが、削平岩盤面上で２ヶ所の墓域を検出し得た。これを１号、２号墓域と呼ぶ。

第１号墓域は北側山裾奥に入り込む形で発見されたため全容は不明だが、床面上に凝灰岩製五輪塔が４基据えられていた。各地輪の間からは、かわらけの破片が出土している。４基の五輪塔の下には、床面を穿った長方形の納骨穴が検出された。納骨穴は90×50cm、深さ約30cmを計り、火葬骨が充塡されている。

第１号墓域の北西側に台形竪穴状の第２号墓域が検出された。１号墓域との床面上比高は差約50cmで、床面上には火葬骨を充塡した方形及び長円形の納骨穴が穿れ、この２穴の納骨穴の間を柱穴状ピットが３穴並列する。墓域の周辺には凝灰岩製五輪塔が工事による掘削のために多数散乱しており、相当数が床面上に据えられていたものと思われる。前面の岩盤面は階段状の段差をもって下降するが、未調査の為その性格は不明である。

１、２号墓域の北西側はなだらかな傾斜面となる。遺構確認のため２号墓域北方約５ｍの地点に、山裾部に掛るトレンチを設定して掘り下げた。大型土丹による土丹層を60cmばかり掘り下げると黒色土層が約10cm計り堆積する。同層下には隙間なく火葬骨が堆積していた。火葬骨の中には半焼状態の骨片も多くあり、僅かなかわらけ片以外には混入物もなく正に「人骨層」とも呼ぶべき状況であった。人骨層は約50～60cm計り堆積し、これを除去すると常滑、かわらけ破片等を混入する木炭層が10cm程堆積する。時間的制約の為、同層下の岩盤上遺構については山裾側しか調査し得なかったが、若干オーバーハング気味に山裾に向って傾斜した奥壁部と、削平岩盤面上にピット２穴を検出した。ピット内には火葬骨は認められず、柱穴様のものと考えられる。全容は不明だが、或いは２号墓域に類似した遺構が存在した可能性も否定できない。岩盤面上からは

若干のかわらけ、常滑の破片が出土した。

かわらけ

PL－1　1号墓域床面上出土。口径7.9cm、器高1.9cm。左回転糸切技法。器壁は底部からゆるやかなふくらみをもって立上る。内底面中央部がやや突出し、底部にスノコ痕なし。色調赤褐色。焼成、整形共に良好。

PL－2　2号墓域内出土。口径7.8cm、器高2.2cm。左回転糸切技法。器壁やや厚く底部から内湾気味に立上りゆるやかに口縁に至る。器壁内側から内底面に掛けて指圧整形痕が残る。底部スノコ痕あり。色調赤褐色。焼成、整形共に良好。

PL－3　2号墓域床面上出土。左回転糸切技法。口径7.5cm、器高2.1cm。器壁薄く、底部からやや直線的に外傾し口縁部に立上る。器壁内外面共に砂質粒が付着しザラついている。内底面に指圧整形痕あり。底やや厚く底部にスノコ痕が認められる。色調茶褐色。焼成不良。

PL－4　2号墓域床面上出土。左回転糸切技法。器壁薄く、底部から殆ど直線的に外傾する。内底面に指圧痕が残る。底部にスノコ痕あり。色調赤褐色。焼成良好。

PL－5　2号墓域床面上出土。左回転糸切技法。器壁やや厚く、口縁部外反する。内底面に若干の指圧痕が残る。底部スノコ痕なし。色調赤褐色。焼成、整形共に良好。

PL－6　トレンチ人骨層中出土。器壁厚く、直線的に外傾する。色調赤茶褐色。焼成不良。

PL－7　トレンチ奥削平岩盤面上出土。左回転糸切技法。口径8.0cm、器高2.1cm。器壁やや厚く、底部から胴中半部にかけて内弯気味に立上り、口縁に向けて直線的にやや外傾する。内底面に指圧による整形痕が認められる。底厚く、底部にスノコ痕あり。色調薄地の赤茶褐色。焼成、整形共に良好。

PL－8　トレンチ奥削平岩盤面上出土。口径12.9cm、器高3.1cm。右回転糸切技法。器壁薄く、ゆるやかなカーブで一気に口縁部まで立上る。器壁内側は横ナデ整形が施され、内底面に指圧整形痕が認められる。底部にスノコ痕あり。色調赤褐色。焼成良好。

常滑甕

PL－9　トレンチ内木炭層上面出土。大甕で口縁部に幅の広い縁帯を巡らし、横ナデ仕上げを施す。胎土は灰黒色で石英粒を多く含有する。色調は茶褐色を呈し、縁帯部と頸部に降灰による自然釉がみられる。焼成堅緻。

出土遺物を概観する限り、その所産時期は14世紀後半～15世紀初めに掛けてに比定し得ると考えられる。石塔類の調査が極めて不十分なのが気に掛るが、全体的な形態等を概括しても同時期に相当すると思われる。削平岩盤上に検出された墓域遺構は、いわば「天井の無いやぐら」とも

表現できる形状で、鎌倉後期以降に始まるやぐらの盛行の中で、立地条件の制約や岩盤質の優劣等の理由によって南北朝期から室町期に掛けての時期に発生したタイプかとも想像される。同形態の墓域としては、後掲の長谷寺阿弥陀堂裏やぐらや宮ノ前遺跡(註1)の例が挙げられるが、更に資料の増大を期待したい。

註1．昭和54年7月に大船字宮ノ前2144番において実施された調査である。

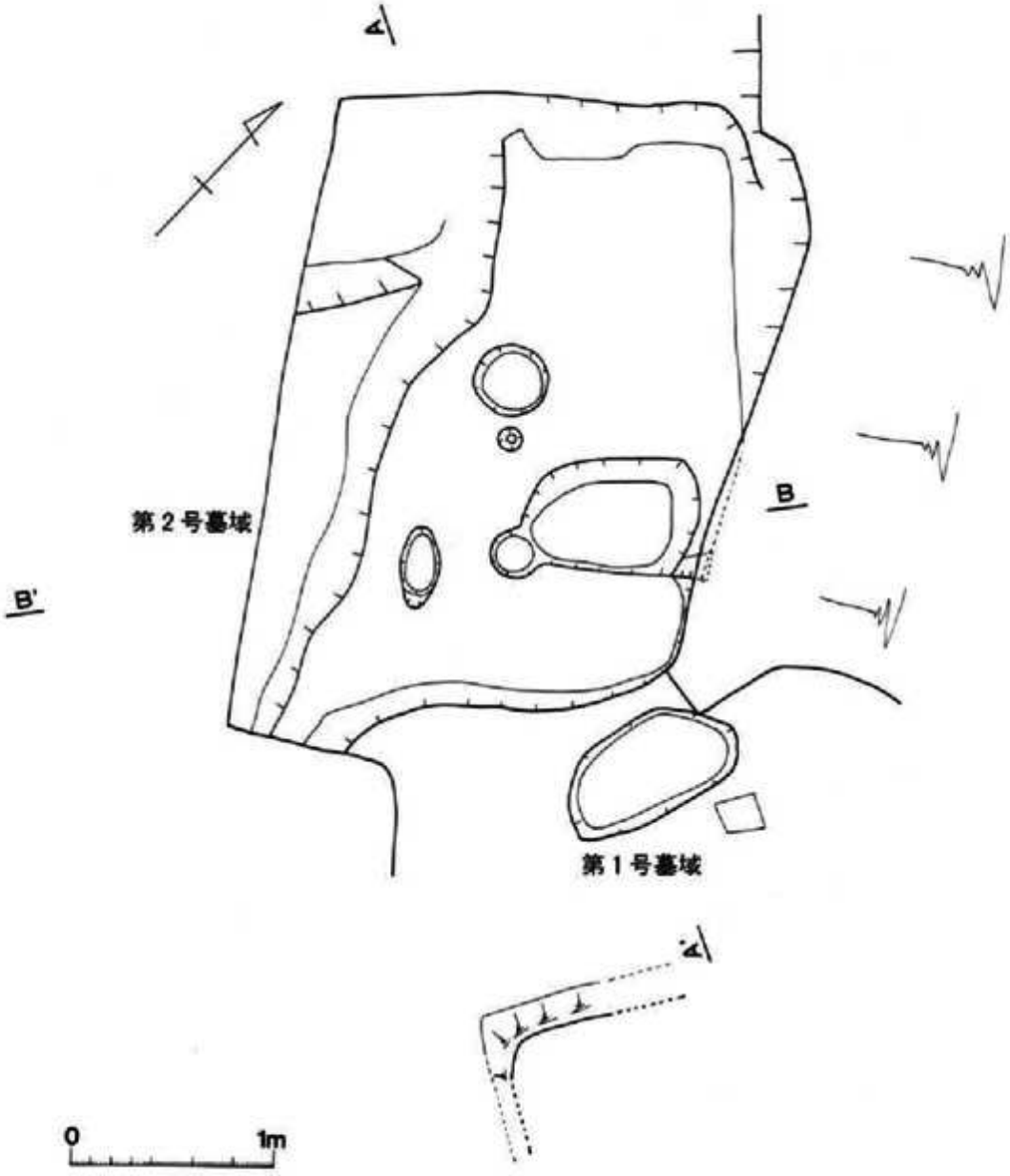


図1　第1，2号墓域平面図

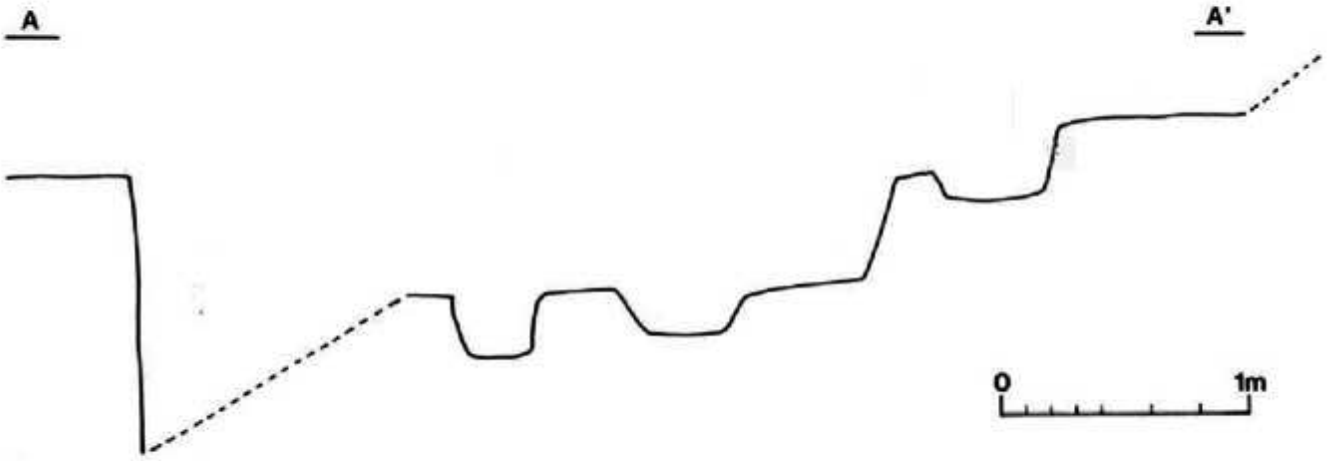


図2　A-A'エレベーション図

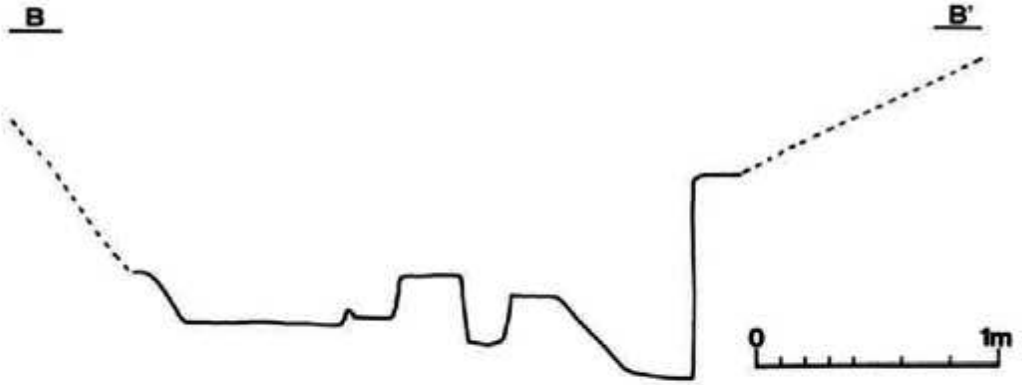


図3　B-B'エレベーション図

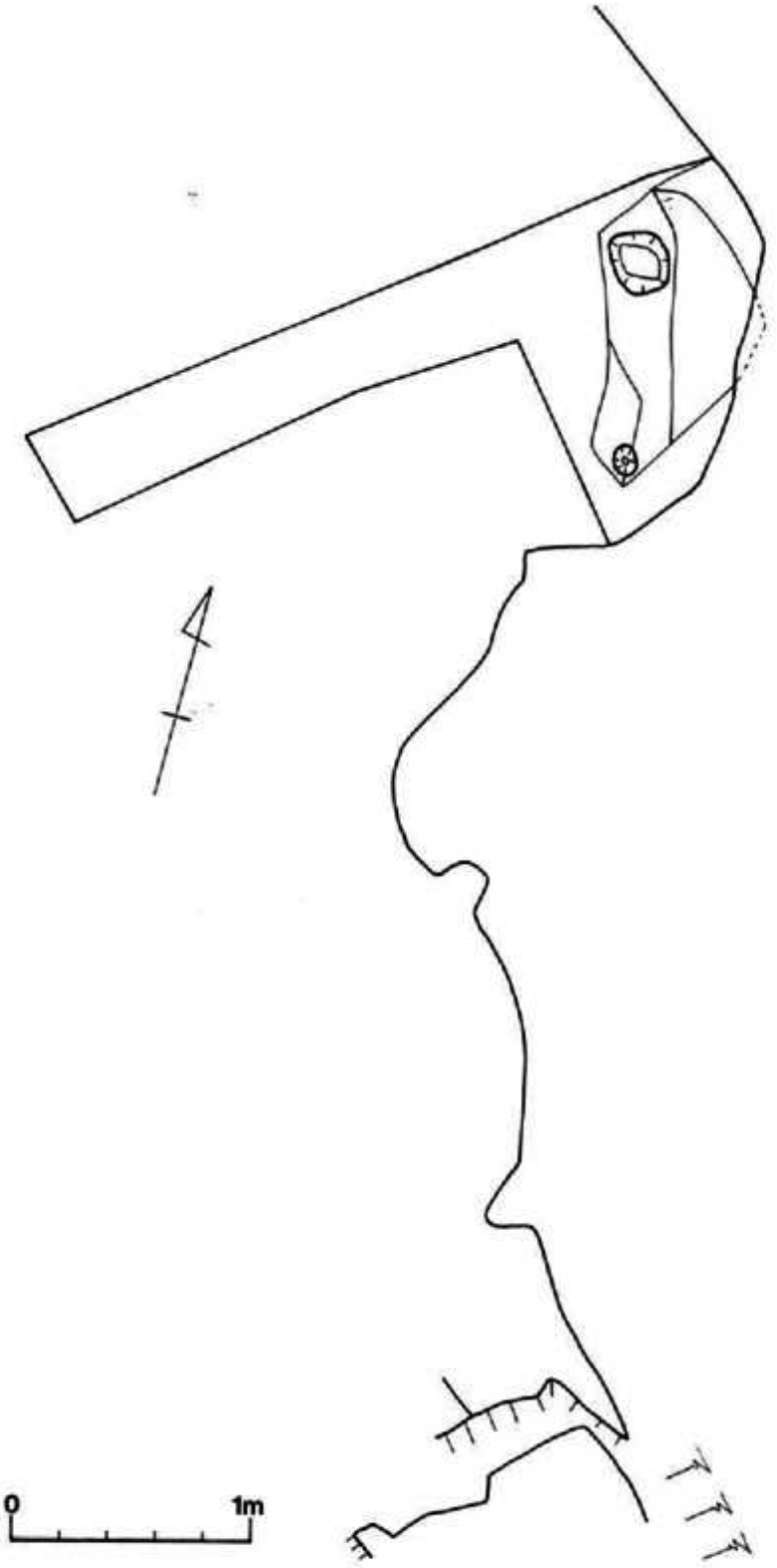
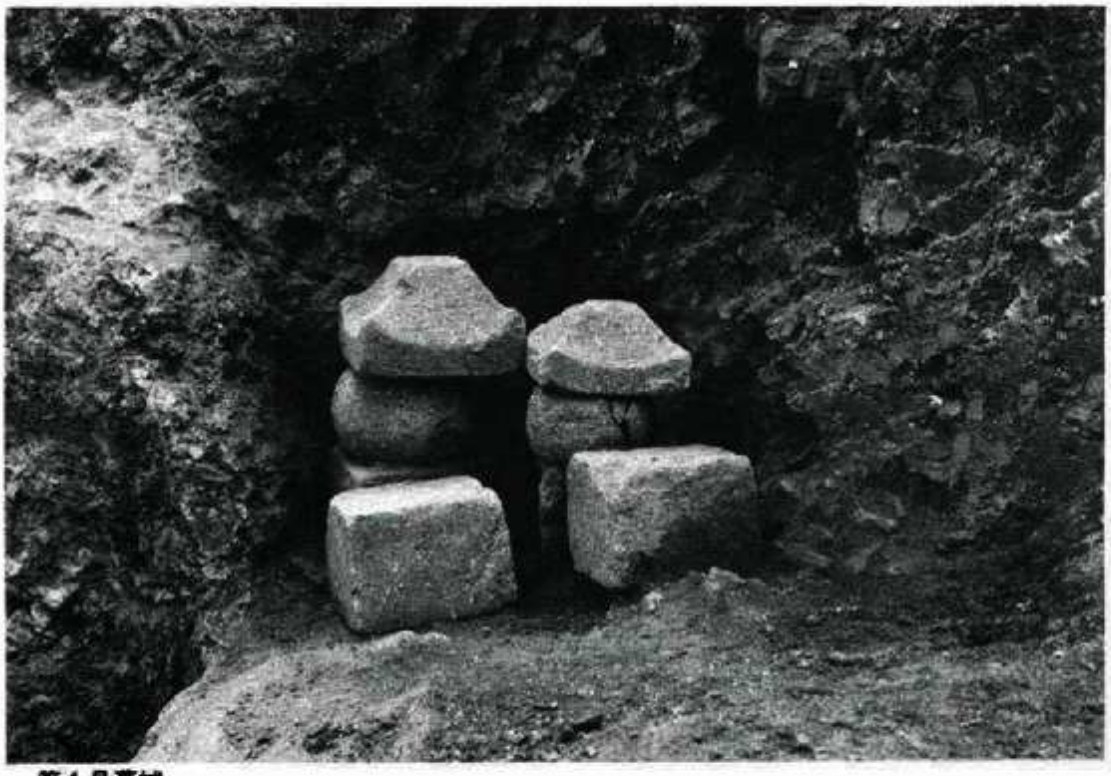


図4　第2号墓域北トレンチ

遺跡発見状況



第1号墓域

第２号墓域

第２号墓域納骨穴

トレンチ奥壁「人骨層」上面

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

11（滑石製温石）

PL 1～11　½

昭和48年度の概観

48年度は、工事中に発見された遺跡に対する緊急調査例が比較的僅少といえよう。これは、理智光寺橋遺跡、山ノ内晴明井戸のように開発計画に先行して調査を実施したことにも因る。同方式は翌49年度に於ける東勝寺跡で始めて行われ、以後定着してきた「試掘調査先行方式」のいわば先駆けとなる発想であった。

また峯横穴古墳群の調査は、本市の公共事業との調整の中で実施されたもので、これを契機に公共事業関係の調査がその数を増して行く。多宝寺跡の調査は日蓮宗妙傳寺の墓地造成計画に対応し、県市の共同委託事業として行われたが、検出遺構の特異性と学術的価値が高く評価された。調査結果に基き文化庁の指導を得ながら幾多の協議を経た結果、妙傳寺の英断により墓地造成計画は変更され主要遺構部分は保存されることとなったのである。更に同所の国指定史跡指定を前提とした国庫補助事業による継続調査が、50、51年度に実施されるに至る。

また、浄明寺釈迦堂ヶ谷内に計画された開発計画に対する本市の行政指導の基本資料の一つとして、前年度行われた釈迦堂跡発掘調査結果が参考にされた。

以上のように、48年度は埋蔵文化財の本来的価値が改めて評価されると共に、開発事業計画との協議調整の必要性が急速に萌芽し広く認識され始めた時期といえよう。

12．峯横穴群

昭和48年４月３日～７日

手広字西ヶ谷708番１

発掘調査団

市立西鎌倉小学校建設工事に伴う緊急発掘調査である。山稜頂部近くの南側に面した斜面上にあり、通称「七ツやぐら」と呼ばれた横穴群で９穴の所在が確認された。横穴群は何れも７世紀末～８世紀初頭に掛けての末期横穴の形態を呈する。(註１) 調査内容の詳細については、現在資料整理中であるので別稿に譲りたい。

註１．「鎌倉市史、考古編」昭和34年３月

13．腰越日坂近世墓

昭和48年６月20日

腰越一丁目731番他

鎌倉市教育委員会

江ノ電鎌倉高校前駅の北側は墓地となるが、その墓域西端近くで宅造工事中に人骨が大量に出土したとの報を得た。直ちに緊急調査が実施されたが、既に宅造のための基礎打工事に着手していた為、海砂層中に発見された人骨の採集作業に止まざるを得なかった。

取り上げられた人骨は成人骨３～４体分と小児骨１体分である。その他寛永通宝が数枚伴出した。墓域内の墓碑銘から推して、これらの人骨は18世紀中半から19世紀前半にかけて埋葬されたものと考えられる。

頭骨出土状況

14．理智光寺橋遺跡

昭和48年11月15日～22日

二階堂字理智光寺谷749番1

発掘調査団

本調査は住宅建設計画に対応した事前調査である。調査対象地は国指定史跡永福寺跡の南端付近、二階堂川に架かる理智光寺橋に接した地域である。調査は鎌倉市の委託事業として、大三輪龍彦氏を団長とする発掘調査団によって実施された。

調査地の南側一帯には理智光寺ヶ谷と呼称される谷戸が広がり、理智光寺跡推定地と目されている。当初、調査対象地は理智光寺の寺域内に含まれ、それに関係した遺構の検出が予想されていた。(註1) 調査地地表面は左側が平坦で中央部辺りから二階堂川に向って西に傾斜する。地表下30～40cm堆積する表土耕作土層を除去すると、土丹塊を含む黒褐色土層となるが、版築層といえる状態ではない。同層下の木炭、焼土を混入した黒色土層を挟んだ地表下約70cm程の深度で、土丹塊による版築地形面が表出した。同面上には大量の焼け爛れた瓦が厚く堆積していた。更に、その瓦に埋れるようにして据えられた安山岩製礎石が検出された。

礎石は原位置を保つものが3個、根石のみを残すものが2個である。各礎石及び根石間の芯々距離は約215cm。礎石列北東コーナーに位置する根石の西側には、耕作の為か横転状態の礎石が

存した。全景写真では原位置に復旧してある。礎石列遺構の南北両側の版築地形面はなだらかな傾斜状態をとるが、各々の傾斜面基部には平瓦を主として用いた瓦列が東西に走行していた。土留施設の一種と考えられる。北側瓦列の外（北）側に不整円形状に瓦が集積された個所が検出されたが、被覆土の層位が不安定であり近年の所業とも考えられる。

ところで、西側に検出された根石部は南西部分を欠失している。またこの根石部と南東隅礎石との交点にテストピットを設け、礎石を求めたが、根石どころか土丹版築地形層すら確認し得なかった。全面調査を実施した訳ではないが、この現象については発掘区西側を流れる二階堂川の氾濫によって遺構が損壊を蒙った結果と推定したい。地表面レベルが西に傾斜するのもその為であろうか。

従って礎石列全体の様相は不明だが、南北瓦列の間は約９ｍで狭隘な地形から推して、遺構の東西幅がこれを上回るとは考え難い。このため、礎石列の規模を２間四方と推定する。

検出された礎石は径約60～70cmの大型安山岩を用いているが、火を受けたのか柱根設置面と思われる面を残す他は表面の剝離が著しい。設置面の平均径は約25～30cmを計り、相当規模の立柱が推察される。これ程の規模を有する礎石の発見例は、永福寺、勝長寿院、大慈寺等の、鎌倉初期に建立された「大寺院」に限られている。また出土瓦は鎌倉中～後期の所産と考えられ、南北朝以後に降るものはない。更に他に重複遺構のない単一遺構である点などから推して、火災等の何らかの理由によって建物が焼亡してから後は、再びこの地を使用することはなかったのだろう。或いは二階堂川の氾濫等による地形の変質も一因かも知れない。

以上の遺構的特長を鑑みた場合、当初予想していた理智光寺との関連は、従来理智光寺の寺域と考えられる区域内の造成工事等（註２）によっても大型礎石、或いは鎌倉期の瓦を用いた遺構の発見例がない等の否定的諸点からみて再考せざるを得ない。

調査団の見解によれば、当遺構については理智光寺よりも、北面する永福寺の一院、それも二間四方の規模から考えて鐘楼跡（註３）と推定されるとのことである。また、調査区南側の土塁状の土堤を、永福寺総門跡から続く土塁の一端とも推察している。

調査団長

大三輪龍彦

調査員

小松大秀、板井久能

調査補助員

玉林美男、小松みどり

註１．「鎌倉廃寺事典」有隣堂　昭和55年12月

註２．昭和30年頃に理智光寺ヶ谷に於て大規模造成工事が行われた。

註３．調査団長大三輪龍彦氏の御教示による。

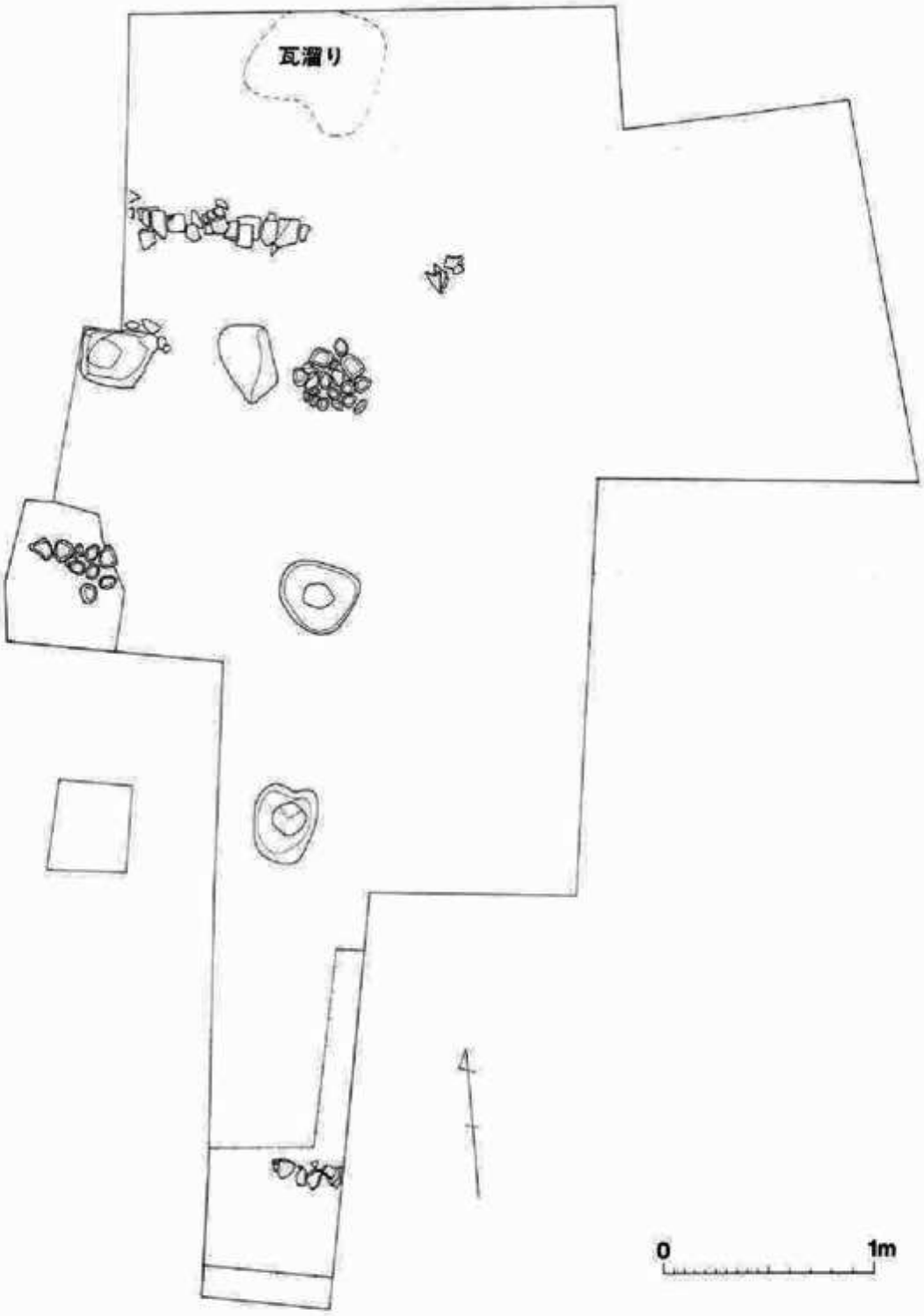
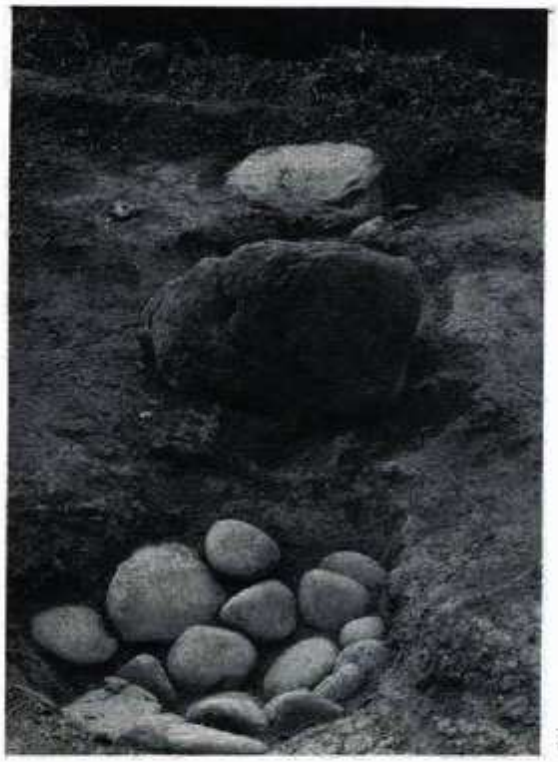


図１　遺構平面図

図2　横石列周辺から出土の瓦当類

調査区全景

堆積瓦と礎石

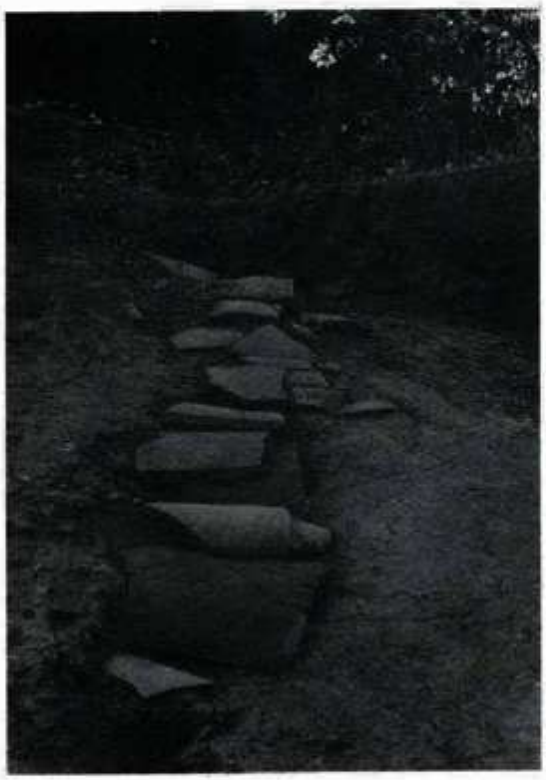


転倒礫石と根石部

西側根石部

礎石列全景

礎石上面柱根部



北側瓦列

南側瓦列

北側瓦列外の瓦溜り

土壁残存遺構（？）

15. 山ノ内晴明井戸

昭和49年1月9日～12日

山ノ内字宮下小路523番

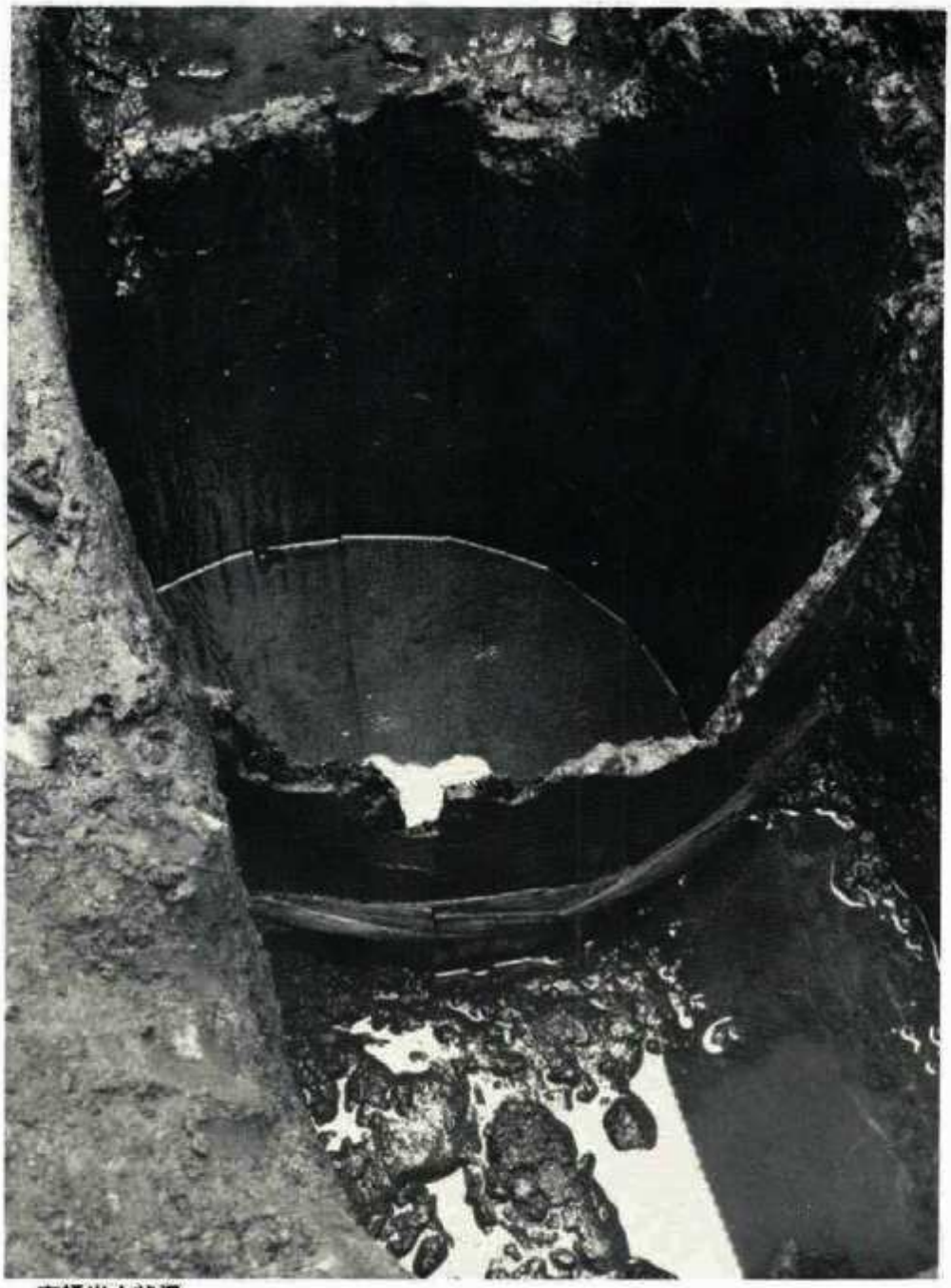
鎌倉市教育委員会

「新編相模国風土記」巻九十一、鎌倉郡十三山之内庄に『晴明石　往還中に二所あり。各大二三尺許。　石の傍に各井あり。安倍晴明が加持水にして火難を防ぐ奇特ありと云傳ふ。大船村多聞院持。』と記される。晴明井戸伝承地ととして現存する井戸は、国鉄北鎌倉駅改札口北方に所在する。偶々当該地一帯に排水施設改良工事が計画されたため、緊急事前調査が実施されたものである。

同井戸は近年迄実際に使用されていたもので、地上に土管が露呈していた。土管組は地表下50cm程で検出される木桶内に収まり、2段積されていた。桶は幅約12cmの杉板材を20枚巡らし、竹製箍を外嵌させる形状で径73cmである。

著しい出水のため、桶の残存頂部から約90cmの深さまでしか掘り下げられなかったが、木片以外の出土遺物は得られなかった。桶の作風からみて、明治～大正期の所産と思われる。

調査前風景



木桶出土状況

16. 多宝律寺跡

昭和49年３月10日～31日

扇ヶ谷二丁目268番3

発掘調査団

「多宝律寺遺跡発掘調査報告書」鎌倉市教育委員会　昭和51年３月　参照

昭和49年度の概観

49年度で特筆すべき事象としてまず東勝寺跡発掘調査例が挙げられる。調査は東勝寺跡に市立の肢体不自由児通園訓練施設建設が計画された為、緊急事前発掘調査として実施された。まず12月に試掘調査が行われ、建築遺構の一部などが発見されたため、翌50年２月に本調査へと移行した。なお、計画的な試掘調査は今回が最初の実施例であり。50年度以降開発計画との協議調整時に於る具体的な資料確認方法として試掘調査が従いに普遍化したのである。

さて東勝寺跡の本調査の結果、元弘三年（1333）鎌倉幕府滅亡の舞台となった東勝寺の存在とその遺構が明らかになり、俄かに遺跡保存問題がクローズアップされてきた。様々な論議を経て、また文化庁の指導も得た結果、最終的に訓練施設予定地は変更され（現あおぞら園）東勝寺跡は現状で保存されることとなったのである。

この問題は前年度に多宝律寺跡や釈迦堂跡で発生した、開発計画と埋蔵文化財保護施策との調整課題が「開発か文化財保護か」と、いわば二者択一の問題として取扱われた点に大きな特徴がある。同時にこれ以降開発事業計画、とりわけ本市の公共事業との関係については埋蔵文化財の取扱いに関する事前協議制が除々に定着して行くのであった。

この他、49年度は市内各所の下水道管、ガス管、電話線等の敷設工事に際して積極的に立会調査を実施し、多くの出土遺物が採集された。その主なものを本年度末稿に写真掲載して紹介した。

17．報恩寺跡

昭和49年６月３日～16日

西御門一丁目91番３他

鎌倉市教育委員会

報恩寺跡は西御門の現鎌倉第二中学校の建つ南東に開く谷戸内に所在すると伝えられる。谷戸内には最深部から数えて５段の階段状平場が認められるが、第４段平場に建つ第二校舎北側で生物実験用の池を築造しようとした際に、凝灰岩切石列が発見された。このため緊急調査が実施されたのである。(註１)

褐色土の表土層及び褐鉄分を含む第２層を除去すると第３層の土丹塊混り褐色粘質土層に至る。同層下、地表下50cm程で褐色土中に土丹塊を混入した版築地形面に相当し、その地形面上に凝灰岩製切石列と溝状遺構が検出された。切石列は一部未掘であるが、東西15ｍ70cmを計り、北方に面を揃え両端で南に直角に曲る。東コーナーでは東面切石を、西コーナーでは北面切石を各々隅に置く。未掘部分についてはボーリング探査で石列の所在を確認した。

溝状遺構は東西両石列に沿って検出された。東側溝は幅約50cm、深さ約25cmで、東壁部分は素掘り状になる。西側溝は幅約25cm、深さ約20cmで、西壁側に凝灰岩切石列が並行する。この切石列の南端部分に西へ直交する切石が配されている。更に西斜面上には土留めの為か土丹が切石列に沿って集積されていた。

さて、今回検出された凝灰岩切石列は、建物基壇の外縁を廻る施設と考えられ、その内側にはやや軟弱ながらも暗褐色土層中に土丹塊を混入した版築地形面が認められる。しかし、礎石、柱穴等の遺構は調査範囲内に於ては検出し得なかった。本遺構の性格についての考察等は、50年度に実施された第２、３次調査結果と併せて行いたい。

出土遺物はかわらけ（PL－１～６）、常滑（PL－12、13）、手焙り（PL－17、18）、摺鉢（PL－14、16）、卸皿（PL－８）などが主なもので、その他古瀬戸、青磁などの破片も若干出土した。国産品の多くは室町期に属するものである。なお遺物写真は50年度調査報文中に併掲した。

調査協力者

伊藤正義、長谷川健雄

註１．「鎌倉廃寺事典」有隣堂　昭和55年12月

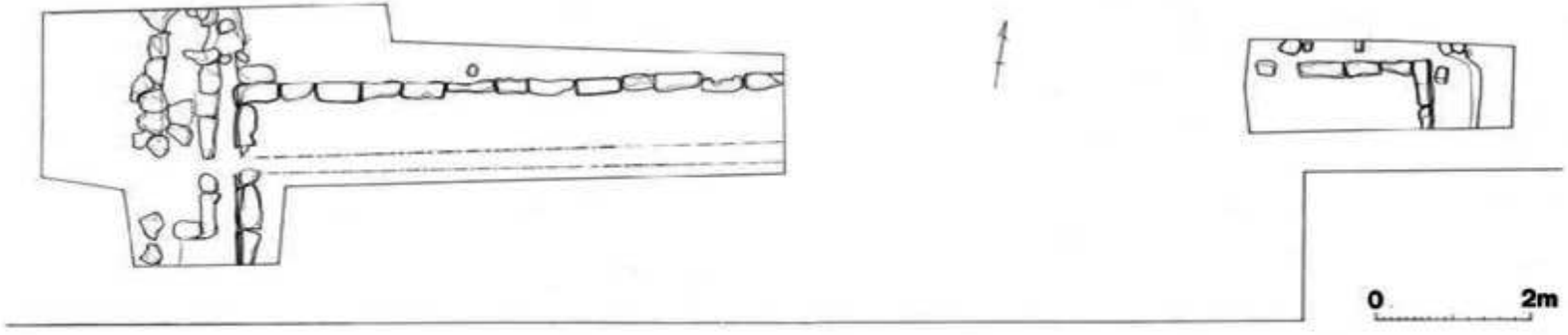


図1　石列遺構平面図

発掘区西側全景

石列北西隅と西側溝遺構

石列北東隅と東側溝遺構

石列上土層断面

18．杉本寺境内

昭和49年６月17日～７月15日

二階堂字杉本903番

鎌倉市教育委員会

天台宗大蔵山杉本寺本堂前整地工事の際に五輪塔水輪を用いた石列が発見され、緊急調査が実施された。水輪列は本堂南面に略々並行して東西に走行する。使用石材は安山岩でその数22個。列の西端部周辺には五輪塔、宝篋印塔等の各部や凝灰岩切石などが集積されていた。これらの石材出土面は地表下約30cmの土丹塊混り粘質土面上で、特に版築地形された形跡はない。石材中、或いは水輪列周辺からは、かわらけ、常滑焼等の中世遺物に混在して近世陶器なども出土する。寺伝には定かではないが、江戸期のいつの頃にか本堂前を整備した際の名残りと思われる。

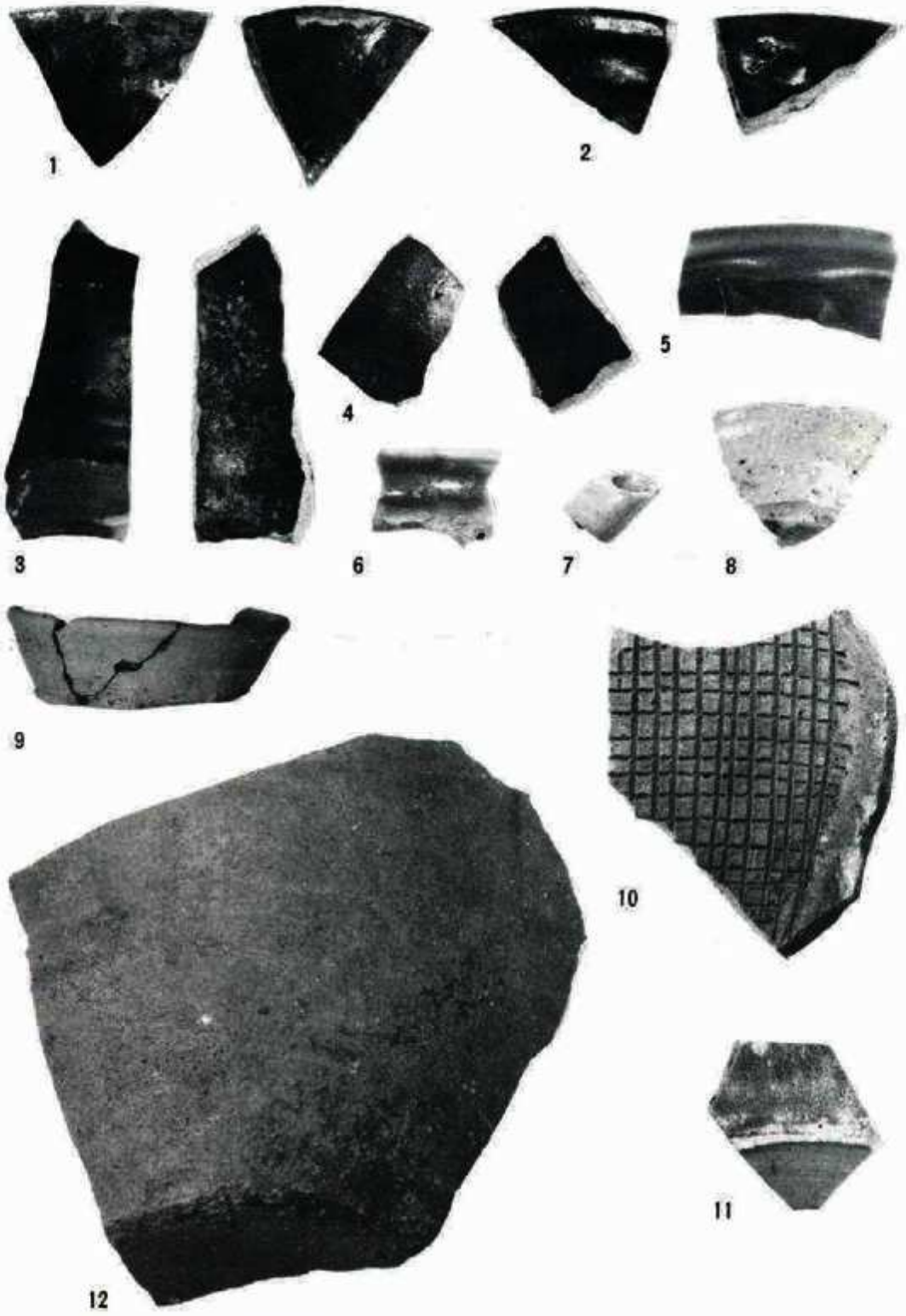
水輪列中央部南面にテストピットを設け、列検出面から更に40cm程掘り下げたところ木炭、焼土が濃密に堆積する土丹版築地形面が表出した。同面上に50×20cmを計る礎石様の安山岩自然石が検出された。配列を確認する暇はなかったが、同面上からは室町期の遺物が出土し他の攪乱的要素は認められない。或いは現本堂の前身建物に関わる施設の一部である可能性もある。今後の調査の機会を待ちたい。

調査協力者

伊藤正義、長谷川健雄

発掘区全景

礎石様安山岩出土状況



1～4瀬戸天目　7青白磁水注　9かわらけ　11瀬戸碗　½
5，6青磁　8白磁碗　10瀬戸おろし皿　12褐釉甕

19．東勝寺跡

昭和49年12月９日～16日（試掘）

昭和50年２月10日～３月25日（本調査）

小町三丁目497番他

鎌倉市教育委員会（試掘）

発掘調査団（本調査）

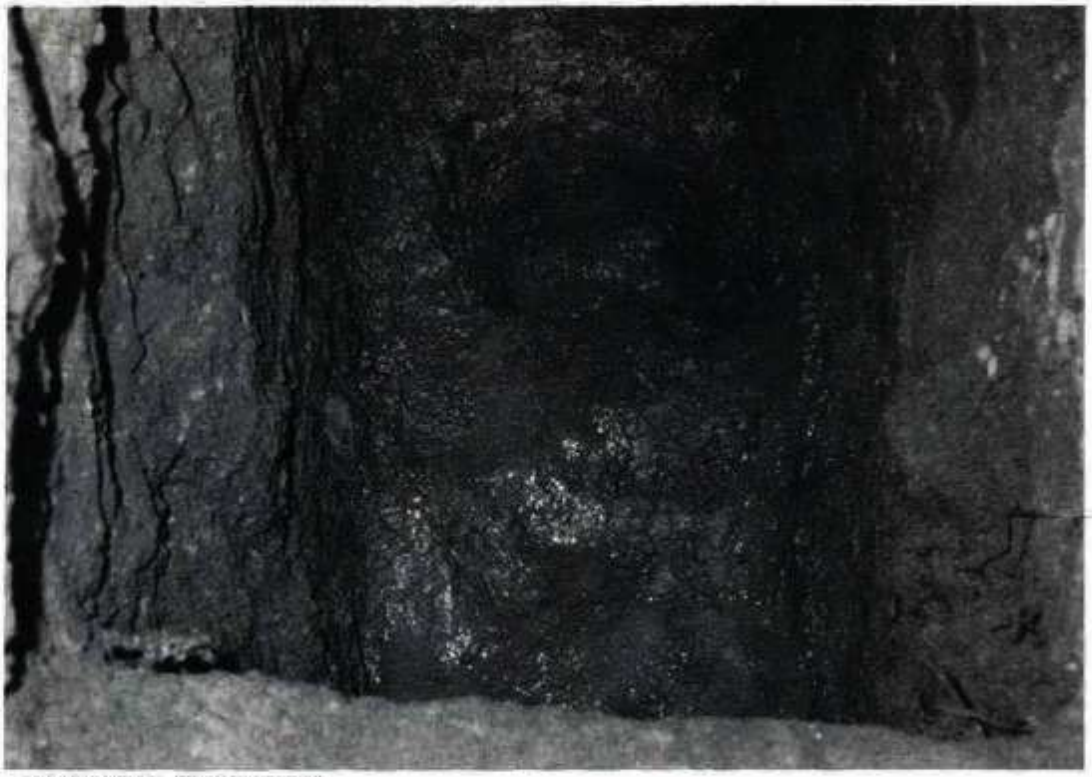
「東勝寺遺跡発掘調査報告書」鎌倉市教育委員会　昭和52年３月　参照

20．各種工事による出土遺物

市内各所の下水道管、ガス管、電話線等の敷設工事に際しての立会調査で採集された主な出土遺物を、写真により紹介する。

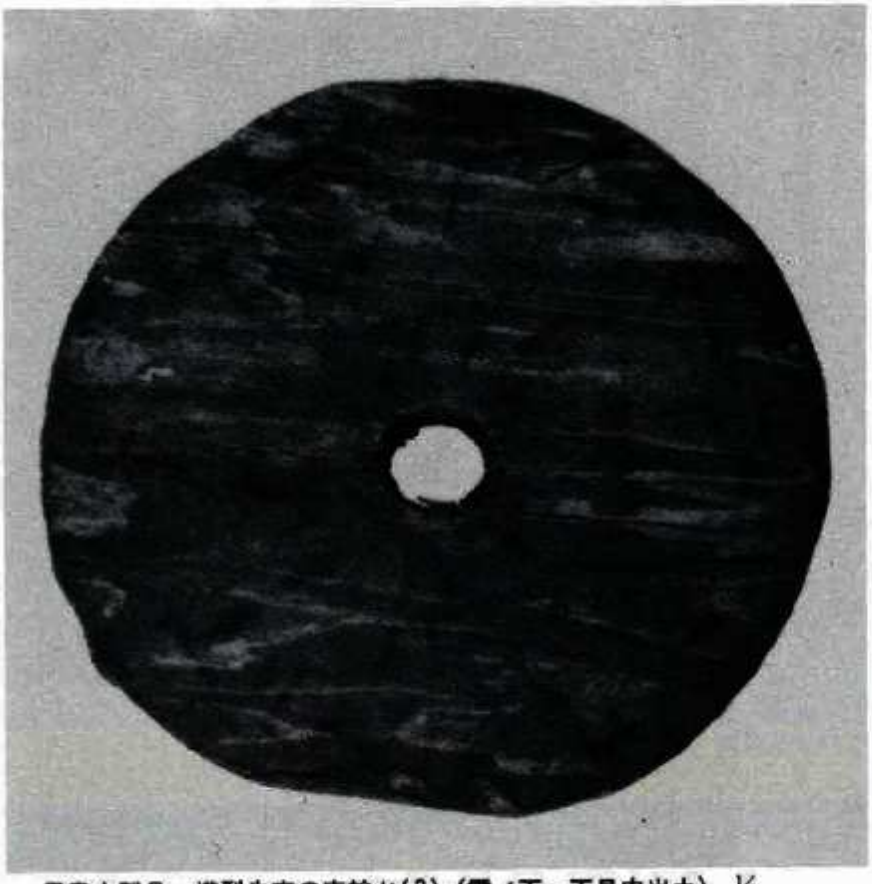
木造建築遺構（若宮幕府内）

段差状削平岩盤（多宝律寺跡）

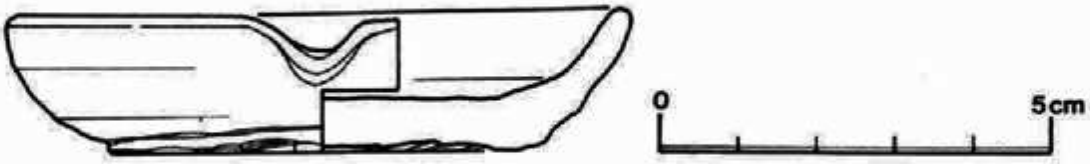


柱穴状遺構（多宝律寺跡）

遺物採集風景



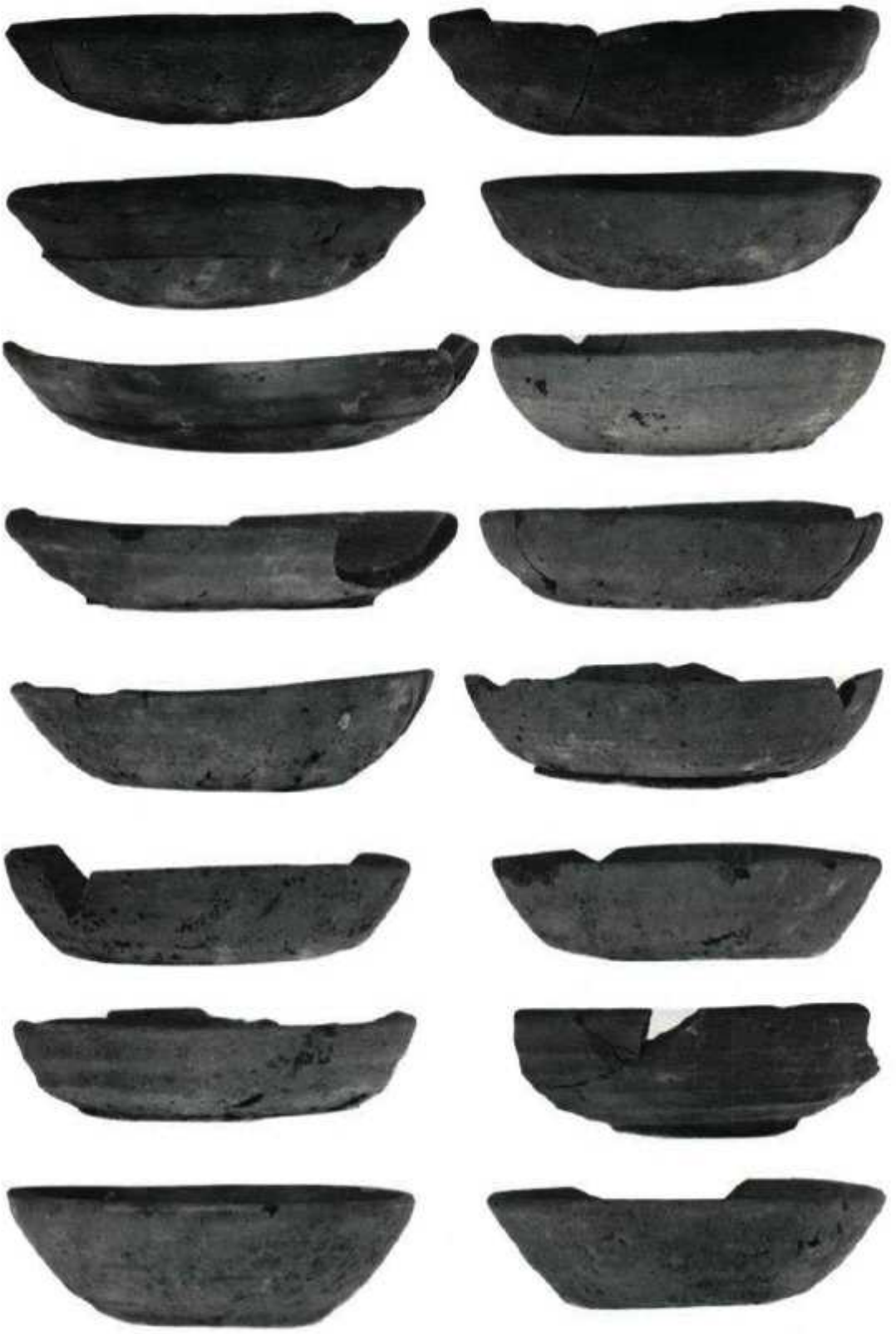
墨書木製品―模型牛車の車輪か(?)（雪ノ下一丁目内出土） ⅓



片口かわらけ（大倉幕府跡出土）

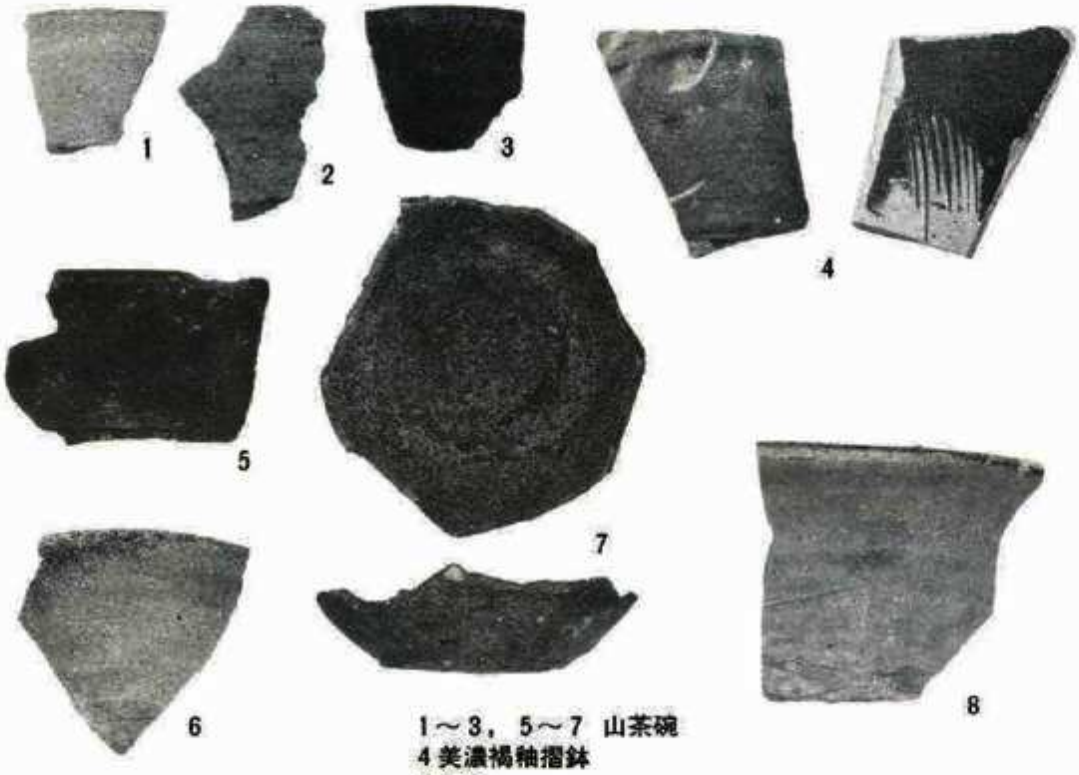
かわらけ　　片口かわらけ（実測図参照）

雪ノ下三丁目大倉幕府内出土遺物（I）　½

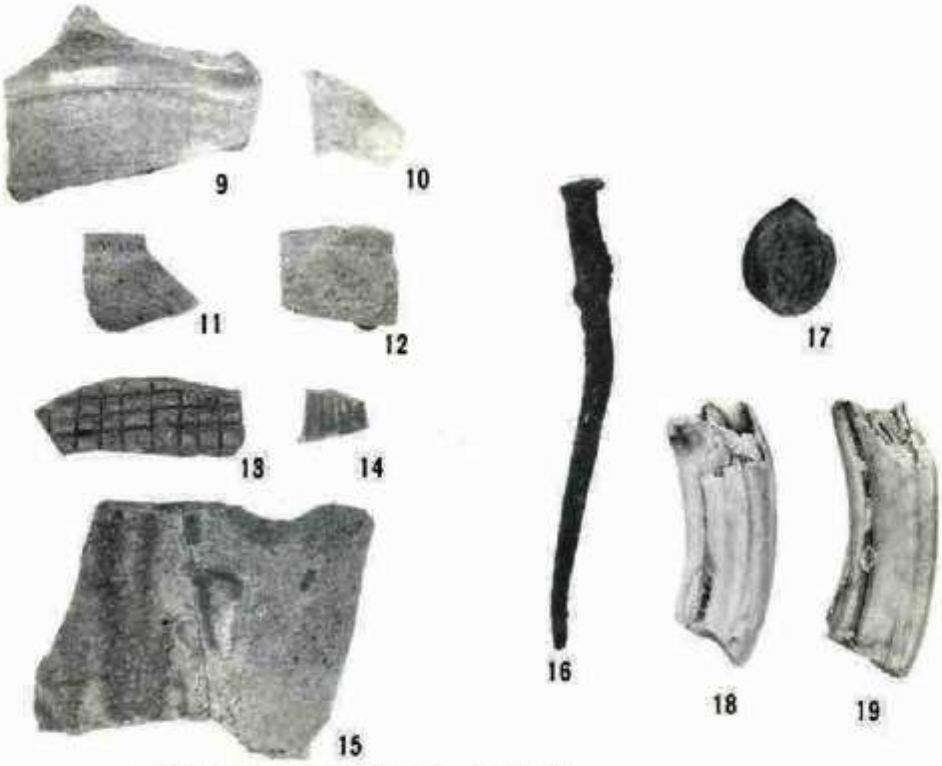


かわらけ

雪ノ下三丁目大倉幕府内出土遺物 (II) ½



1～3，5～7 山茶碗
4 美濃褐釉摺鉢
8 捏鉢



9～15古瀬戸 16角釘 17種子 18，19馬の歯

雪ノ下三丁目大倉幕府内出土遺物（III） ½

1

2

3

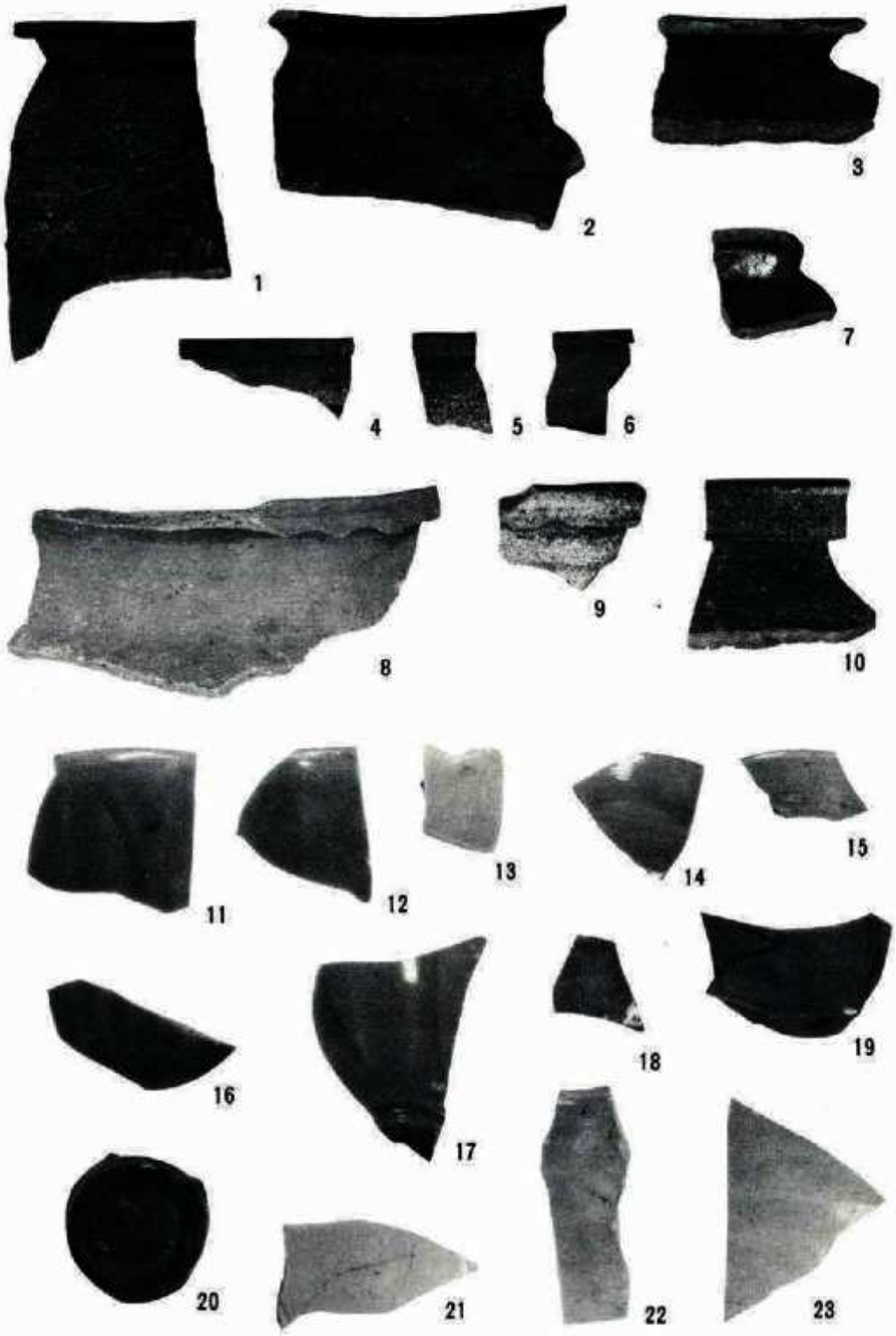
4

5

6

1 温石　3 平瓦
2，4 火鉢　4，5 片口のかわらけ　6 漆砂硯

雪ノ下三丁目大倉幕府内出土遺物（Ⅳ）　½

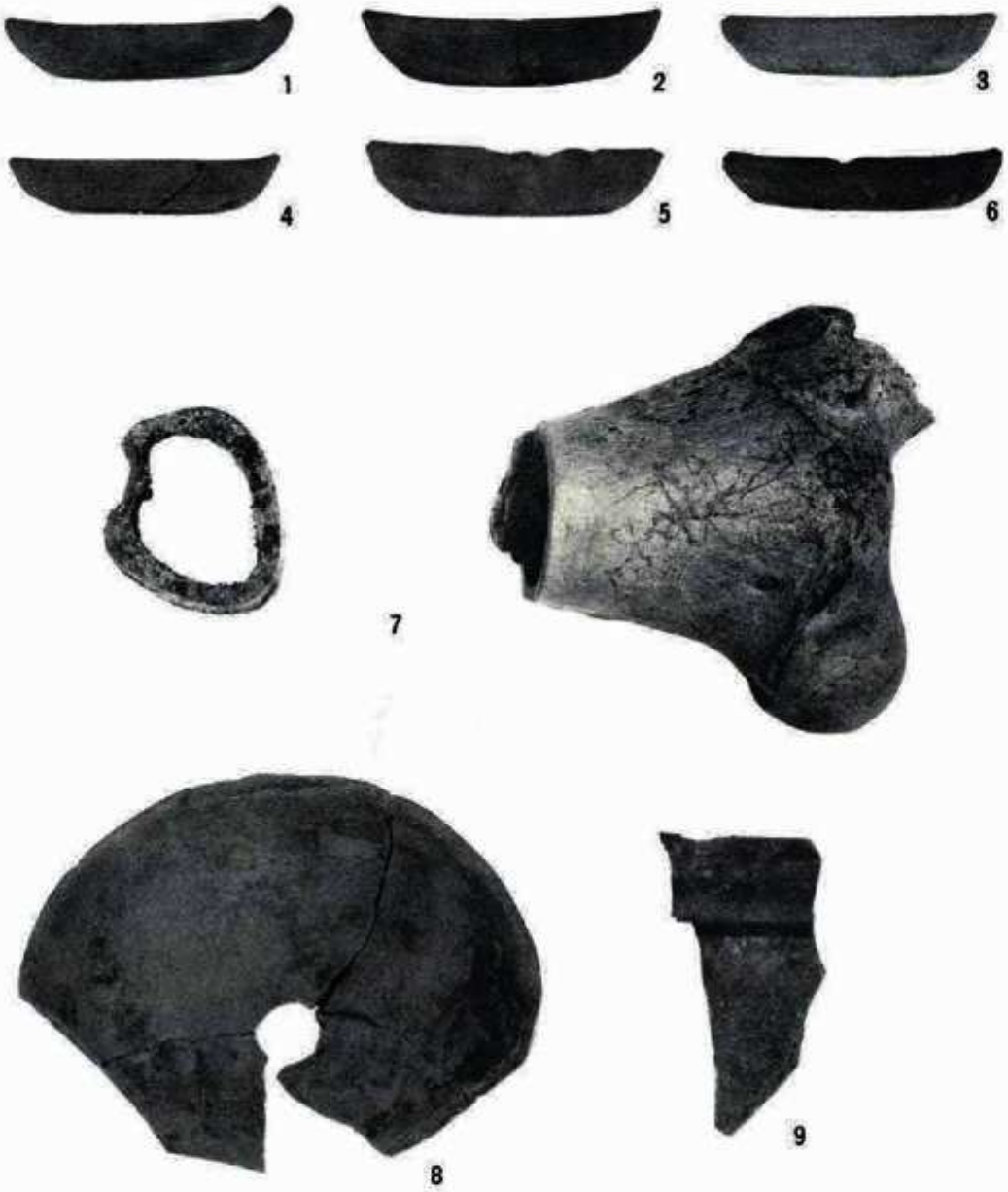


1～6，8～10常滑甕 11～20青磁
7常滑壺 21～23白磁

雪ノ下三丁目大倉幕府内出土遺物（V） ½

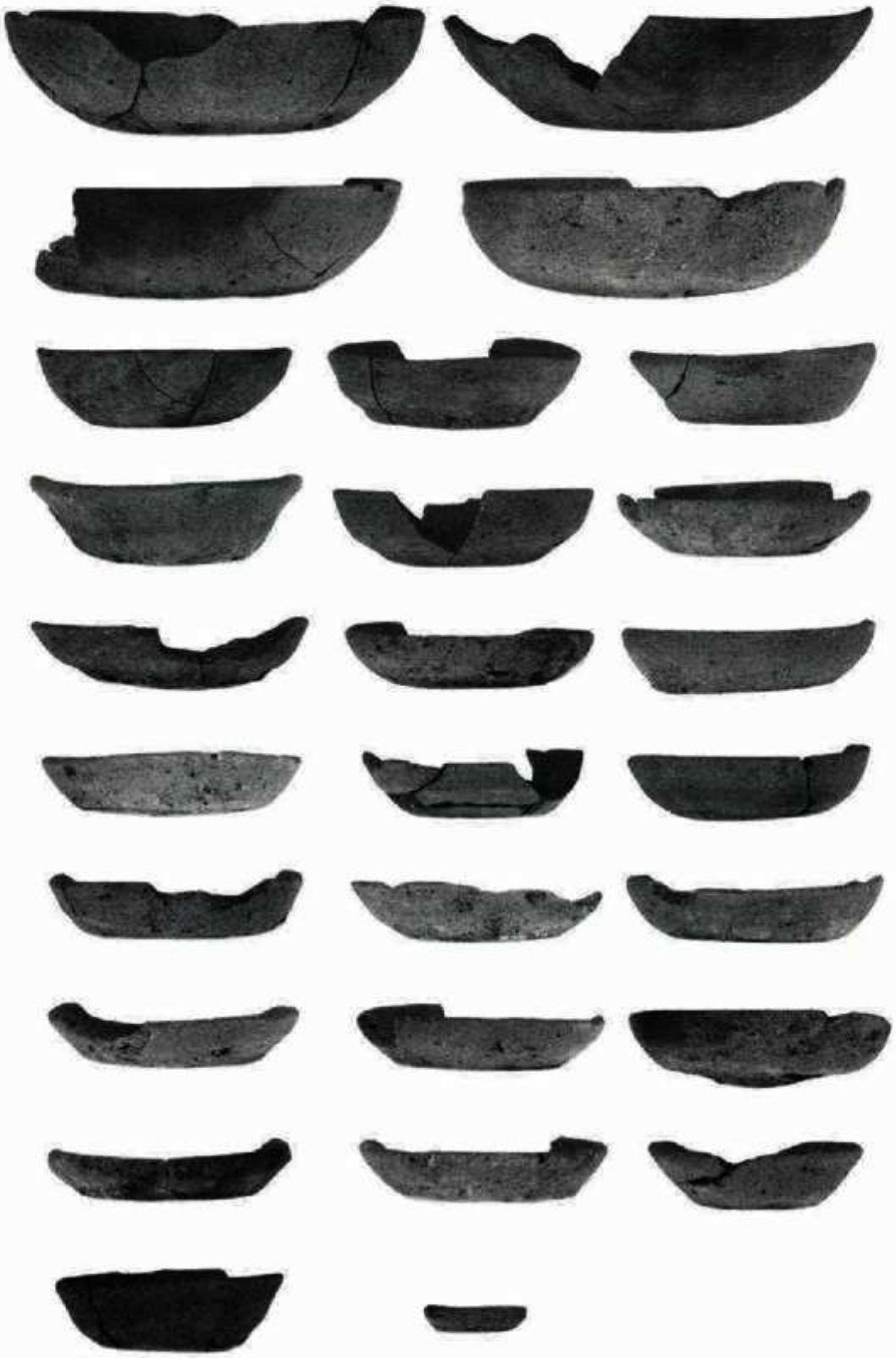
かわらけ

雪ノ下一丁目若宮幕府内出土遺物（I）　½



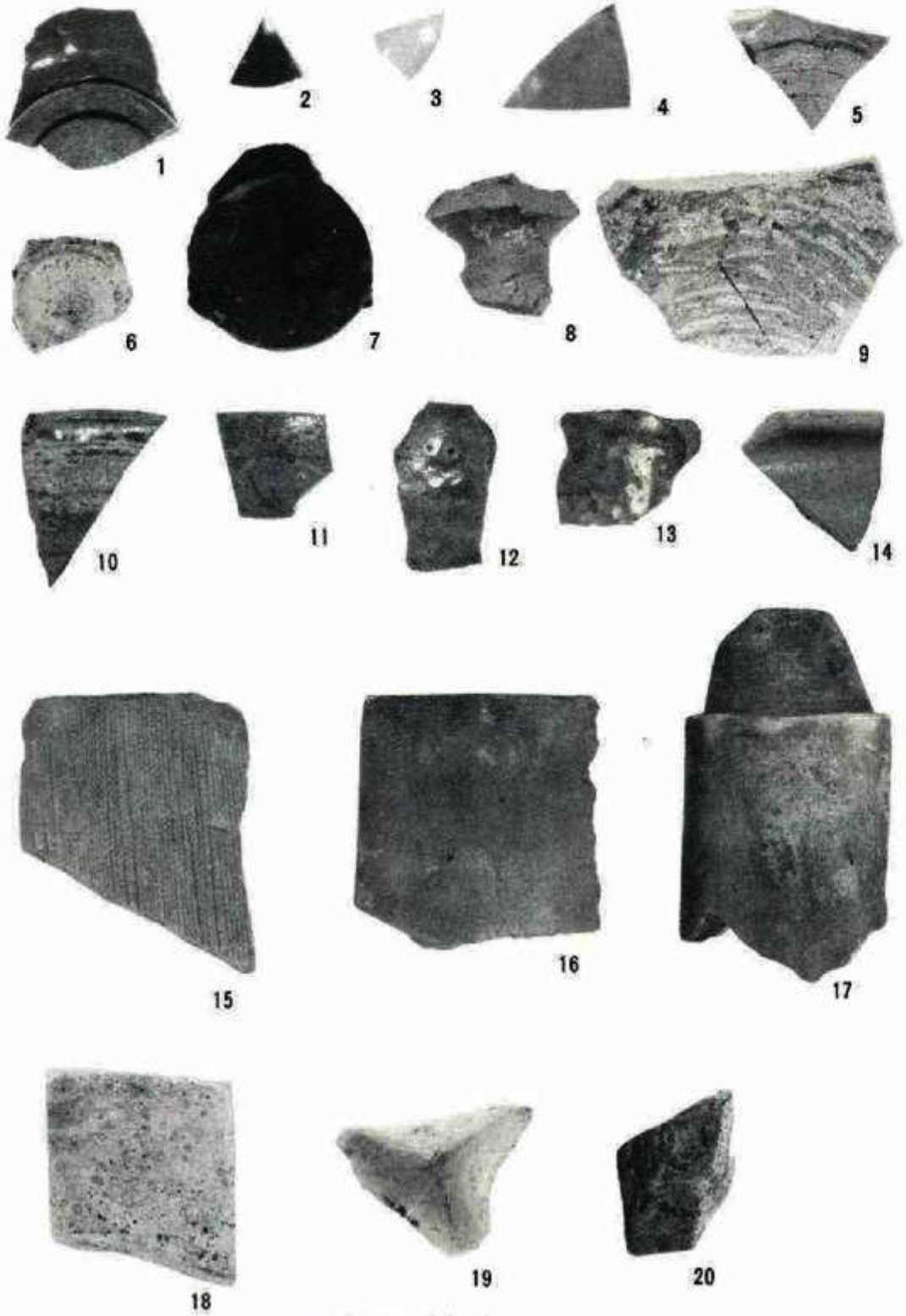
1～6かわらけ　8穿孔のあるかわらけ
7切断痕のある骨　9常滑甕

雪ノ下一丁目若宮幕府内出土遺物（II）　½



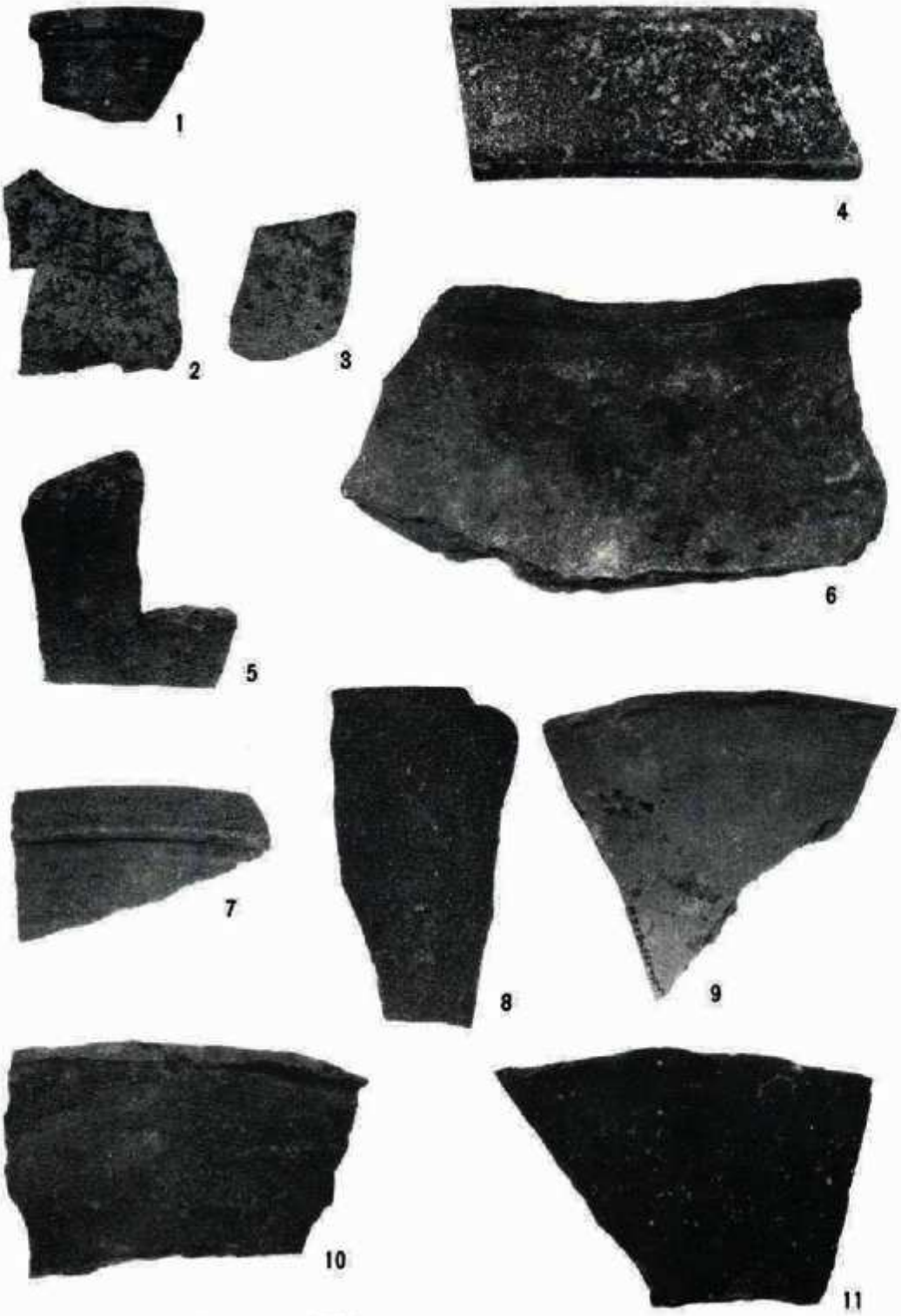
かわらけ

鼎ヶ谷二丁目多宝律寺跡出土遺物（I）　½



1，2青磁　6～14古瀬戸　17丸瓦　19火打石
3～5白磁　15，16平瓦　18砥石　20滑石製スタンプ

扇ヶ谷二丁目多宝律寺跡出土遺物（II）　½



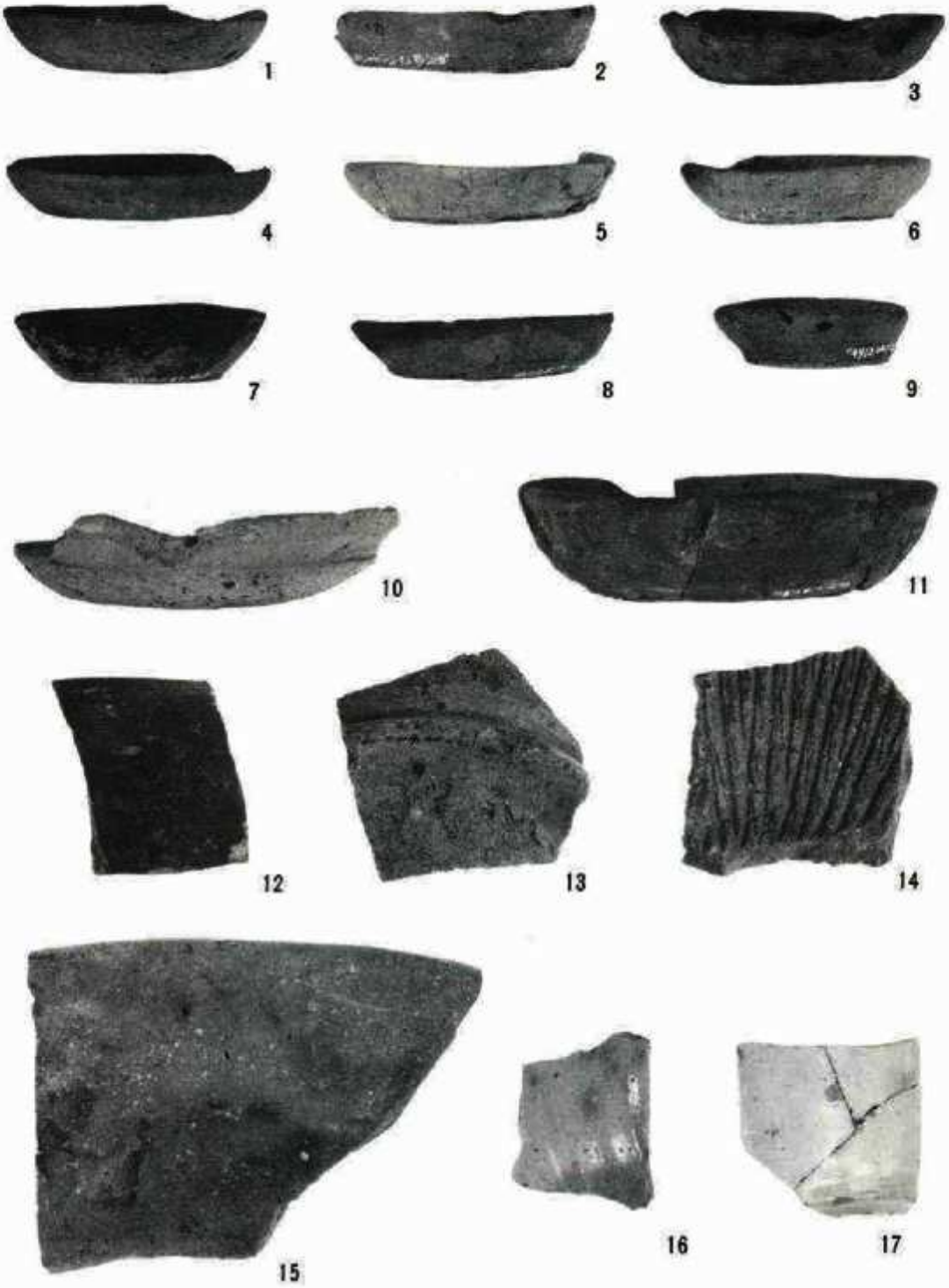
1～3，5常滑壺 7魚住系捏鉢
4，6常滑壺　　8～11常滑系捏鉢

扇ヶ谷二丁目多宝律寺跡出土遺物 (III)　½

火鉢

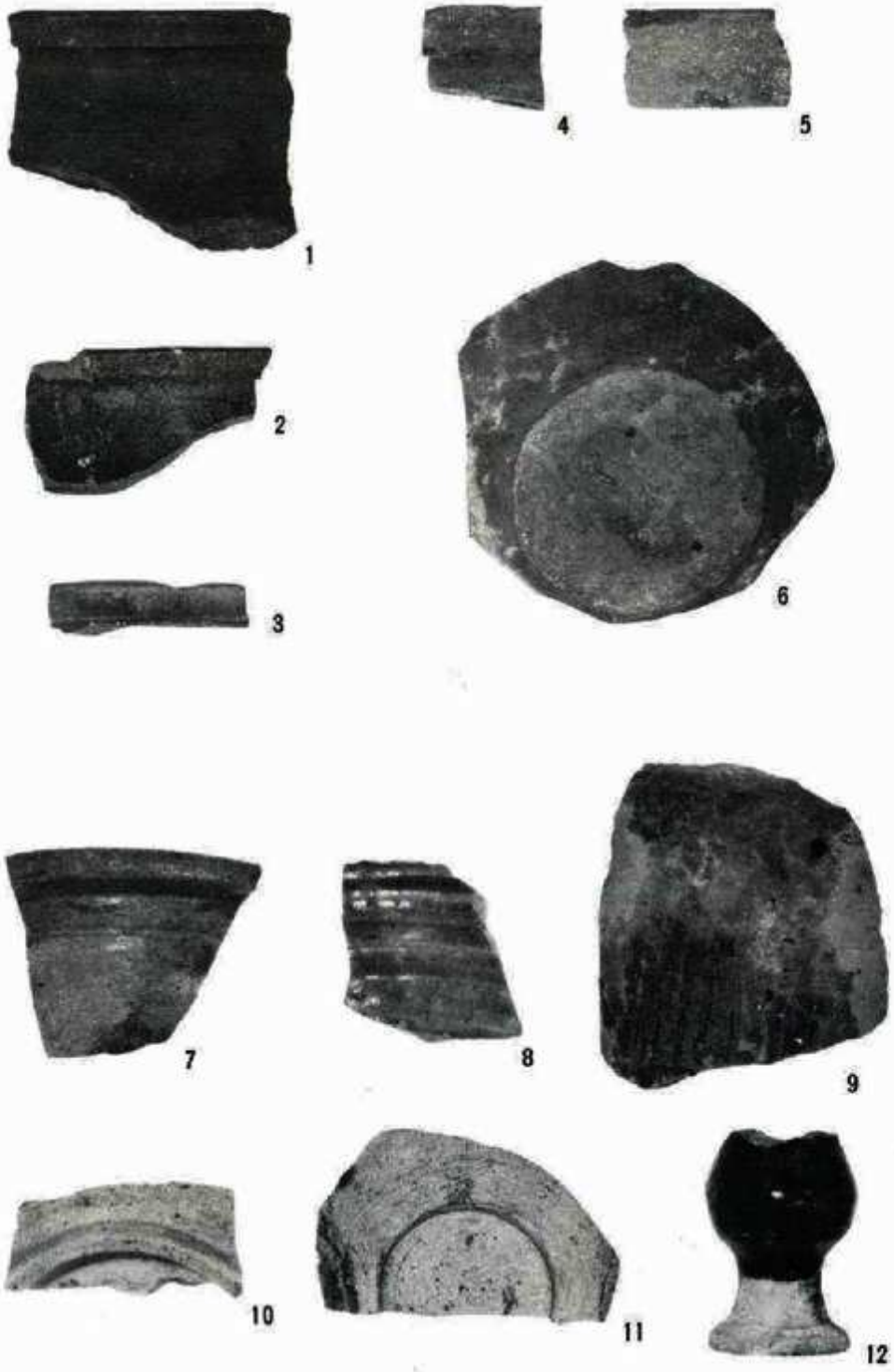
金銅製釘隱

扇ヶ谷二丁目多宝律寺跡出土遺物（Ⅳ） ½



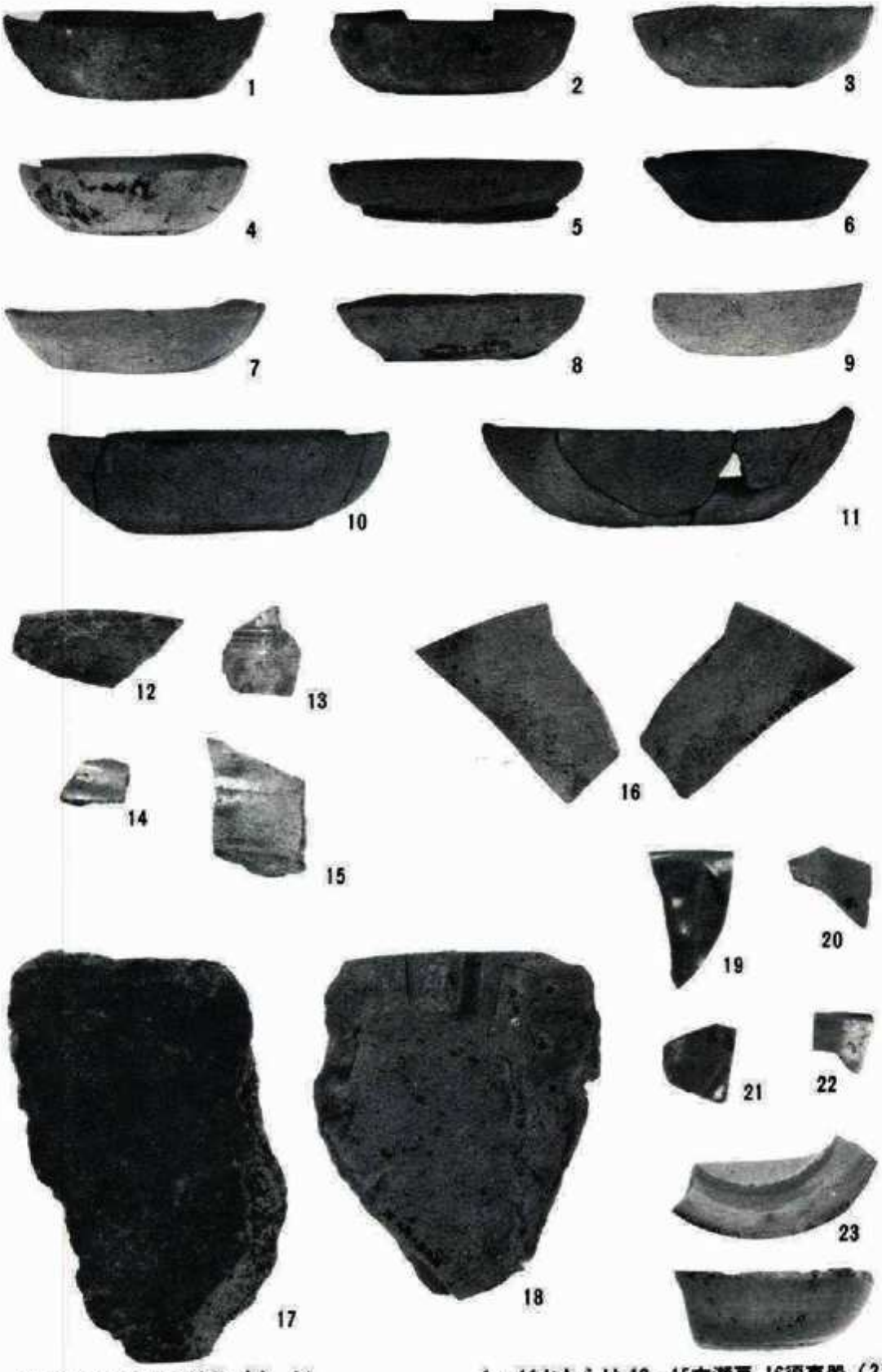
1～11かわらけ　　14擂鉢
12，13，15常滑系捏鉢 16，17白磁

雷ノ下一丁目内出土遺物（I）½



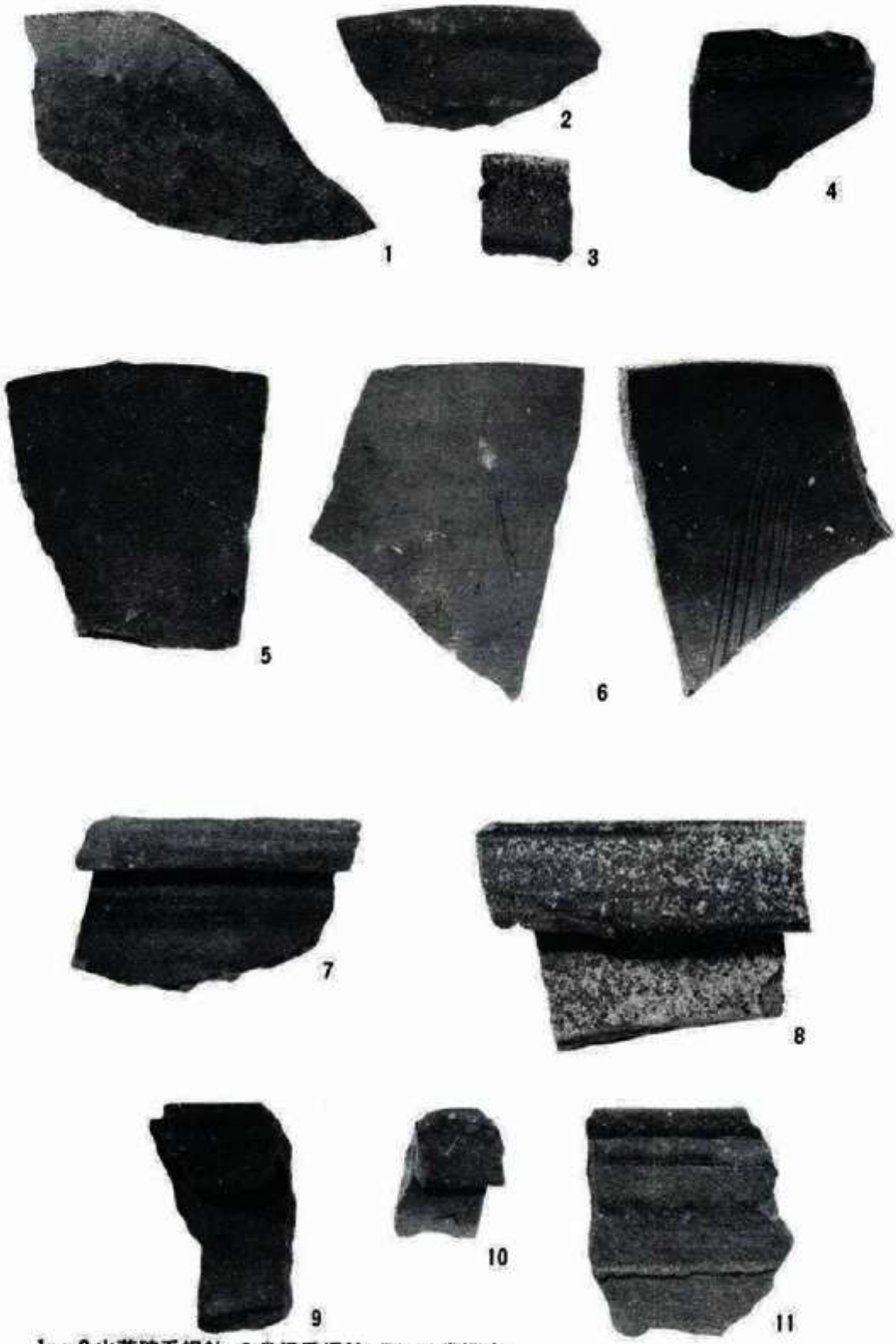
1～6常滑甕
7～12古瀬戸

雷ノ下一丁目内出土遺物 (II)　½



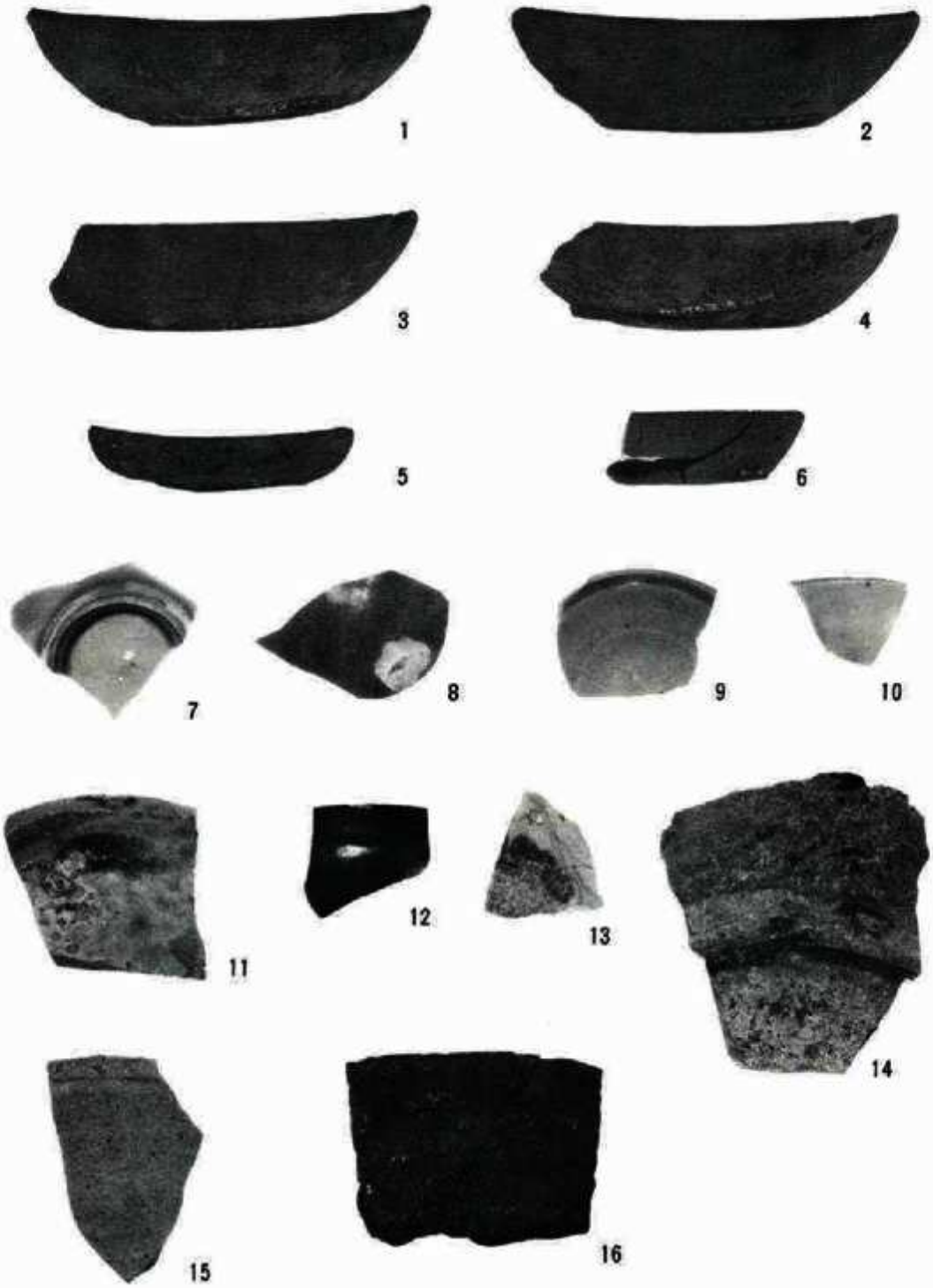
小町二丁目内出土遺物（I） ½

1～11かわらけ 12～15古瀬戸 16須恵器（?）
17，18火鉢 19～22青磁 23青白磁



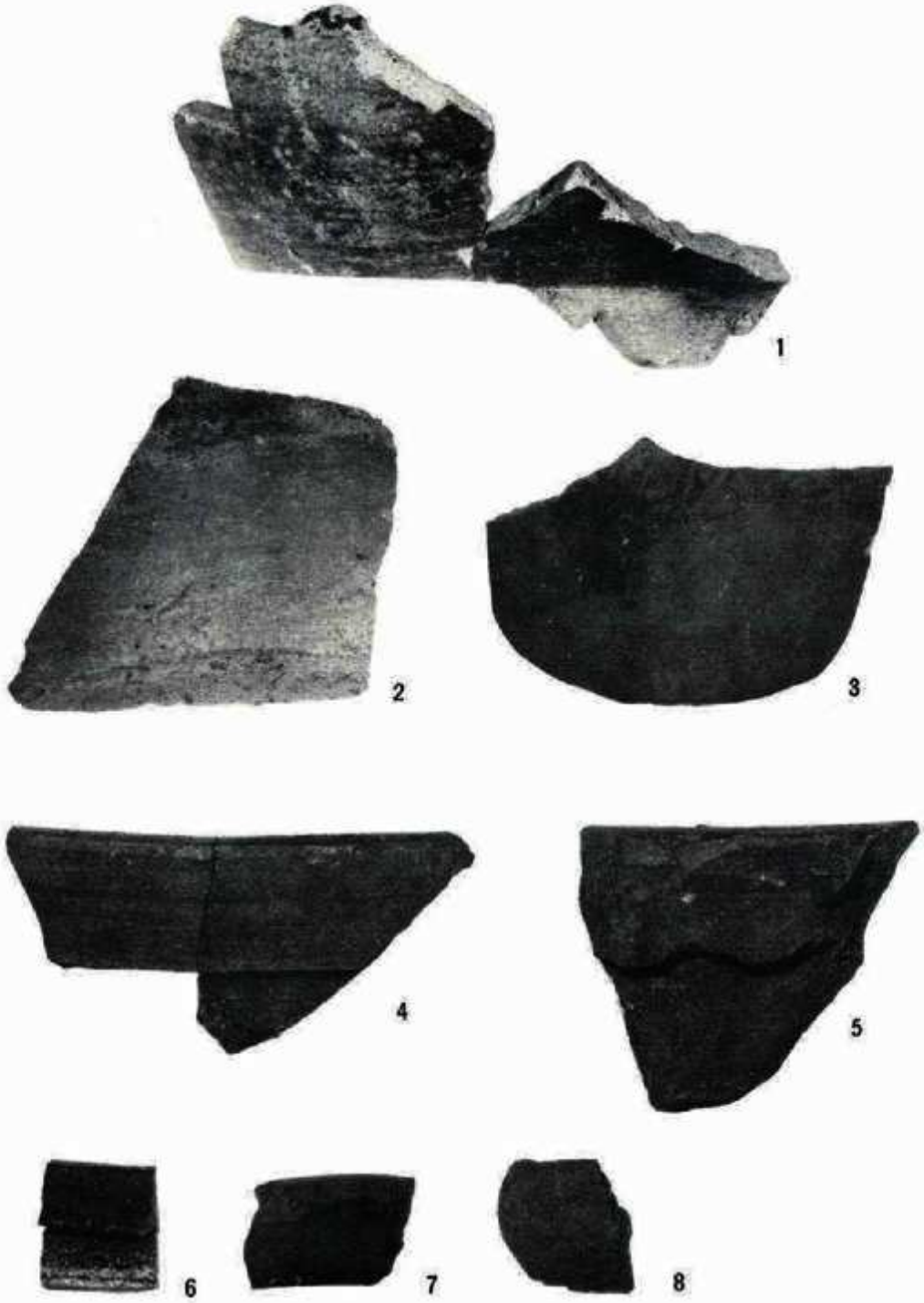
1～3 山茶碗系捏鉢　5 常滑系捏鉢　7～11常滑甕
4 魚住系捏鉢　6 備前系摺鉢

小町二丁目内出土遺物 (II)　½



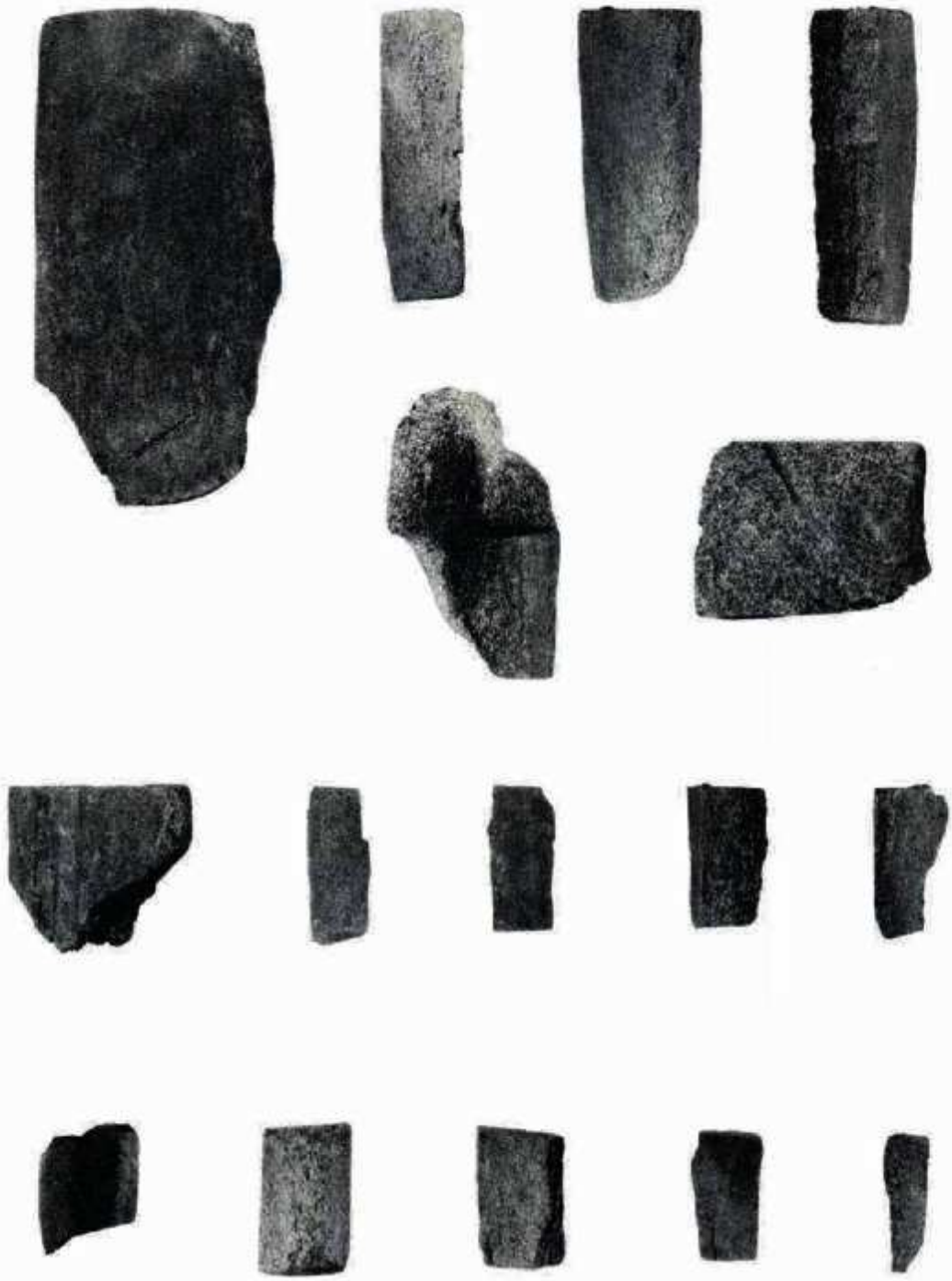
1～6かわらけ　9，10白磁　13美濃系擂鉢　16常滑系捏鉢
7，8青磁　11，12古瀬戸　14，15山茶碗系捏鉢

御成町内出土遺物（I）　½



1～3 火鉢　4～7 常滑甕　8 常滑壺

御成町内出土遺物 (II)　½



切断・加工された獣骨

御成町内出土遺物（III）　½

昭和50年度の概観

前年度の東勝寺跡に引き続き、本市の公共事業と関連した事例として市立第二中学校体育館建設に伴う発掘調査が、試掘、本調査の二段階を経て行われた。この経果、調査で判明した遺構を避けて体育館は建設されたのである。これは東勝寺例とは異なり建設事業と遺跡保存措置とを同一場所に於て並立させ得た例とも言える。この方式は52年～53年度の調査を経て54年度に施工された、極楽寺旧境内の市立稲村ヶ崎小学校々舎建設の際にも活用され、また民間事業も含めた各種の開発事業との協議調整の一環である「設計変更」方式の先駆けになったものといえよう。

10月に実施された郵便局舎改築工事に伴う緊急調査は、鎌倉市が施工する以外の公共事業に市教委が独自に関った例としては最初のものであった。同時に当該地が国指定史跡若宮大路沿いに位置し、鎌倉中枢部にふさわしい遺跡内容であったことから、これを契機に若宮大路周辺の発掘調査が重視されるようになったのである。

多宝律寺跡の第６次調査は国指定史跡指定資料を得る為に実施されたもので、開発事業計画に伴う緊急発掘調査とは異る学術調査として実施されたものである。

21．長谷寺境内

昭和50年9月8日

長谷三丁目658番1

鎌倉市教育委員会

浄土宗海光山慈照院長谷寺の旧阿弥陀堂裏で、防災工事の際にやぐら様の遺構が発見され緊急調査が実施された。(註1) 寺容は現在一新されたが、調査当時阿弥陀堂は観音堂正面右（西）側にあり、背後の山腹を一部削平して建立されたものと思われる。

発見された遺構は工事の為に主体部の大半を欠失し、床面部は奥壁側から手前に僅か30cm程残存するだけであった。奥壁部は幅185cm、高さ116cmで、僅かにノミ痕が認められる。天井部の構築はない。北側壁上面は削平面となり、同面上から掘り下げられた深さ70cm、奥行28cmの龕状穴が穿たれていた。残存部分が僅少なため全容の把握は到底不可能であるが、天井部を当初から築造した形跡が全く見られない点などから、昭和47年度の稿で紹介した名越坂古墓と類似した墓域と考えられる。

残存床面上からは納骨穴などの施設は検出されず、中央部に僅かな盛り上りが認められる。床面上出土遺物は、まず南西隅付近に銅製仏像一軀が検出された。またその北側に土葬骨が発見された。人骨は頭骨や足骨などが工事によって除去され胴部のみを残すが、攪乱の為、葬位は不明である。肋骨及び指骨周辺から六道銭に用いられたと思われる古銭が検出された。古銭は「皇宋通宝」「天禧通宝」「元豳通宝」の3枚で、天禧通宝の裏面には木質部が付着する。

銅製仏像は観音菩薩立像と思われ、像高7.1cm。像は台座上に立ち、膝を折り曲げ上半身をやや前傾させる。頭髪を高く結上げ、面部はやや大柄だが肉付も良くふくよかな感が漂よう。両手を前で合せ蓮座台様の持物を乗せる。下半部の衣文部は立体的に表現され、台座には複弁蓮華葉が線刻される。小像ながらも写実性に富んだ丁寧な調技が施され、14世紀中頃、南北朝期の作と推察される。(註2) 像の背面には木質部が付着し、台座底面は左側部分に錆が著しい。木版に貼付された阿弥陀三尊懸仏の、脇侍観音菩薩像と考えられる。三尊の各台座下には鉄製の支台が取り付けられていたのであろう。出土況状から推して、奥壁南側に掲げられたものと思われる。

註1．調査に際しては長谷寺住持竹石耕美氏、皆川祥子氏に御助力頂いた。

註2．鎌倉国宝館学芸員山田泰弘氏の御教示による。

やぐら様遺構

銅製観音菩薩立像　1/1

22．小町一丁目305番口、308番所在遺跡

昭和50年10月21日～12月７日

小町一丁目305番口、308番

鎌倉市教育委員会

Ⅰ　はじめに

鎌倉市小町一丁目に所在する「鎌倉郵便局舎」の建替新築工事が昭和50年７月より始められた。当該地は鎌倉市街中央部にあり、又、国指定史跡若宮大路に面しているところから、鎌倉市教育委員会は、中世埋蔵文化財包蔵地と推定し、着工前より関係各位に対し、文化財の取扱いについて特に留意されるよう依頼していた。

着工後の地下掘削工事に伴う現場立会調査の結果、多数の中世遺物の出土と建築遺構に関係あると思われる木炭層が確認され、県教委も交えた協議の結果、一定期間の立会及び試掘作業の実施を決定した。

10月21日より11月18日迄の間の延14日間の調査の結果（11月12日～11月18日は試掘期間）、二ヶ所の試掘ピットより、柱穴、木炭面、更に建築用材に使用したと思われる木性遺物の堆積層などが確認され、出土土器からも鎌倉時代中期より末期に至る時期、ここに中世建築物が存在したことが明らかになった。

然しながら、敷地内周辺部は旧局舎の基礎工事の為遺構の破壊が著しく、中央部の旧中庭部分にのみ遺構面が残存する状態であることも明らかになった。

この為、予備調査規模の発掘調査を更に継続し、遺跡の様相について最大限の記録保存の実施を決定した。

ここに報告するのは、その調査のあらましと、結果についての概略的な考察である。

Ⅱ　調査について

調査は、11月20日から12月７日までの18日間行なわれた。

まず、局舎敷地内の前試掘個所を中心に発掘区を拡張し、東側を第１テストピット、西側を第２テストピットと呼称した。更に、両テストピット間の地層状態を調査する為、東西トレンチを設定した。

第１テストピット

敷地東側に、約４ｍ×4.5ｍで設定された。地表下150cm程で遺構面となり、東側から４ｍの範囲は黒色又は暗褐色の土丹混り面で構成される。その西側は約１ｍ幅で北東→南西方向に黒色土

丹混り海砂面が走る。柱状の境界線をはさんで、砂面西側からトレンチにかけては分厚い木炭層が堆積する。砂面以外には、建物に使用されたと思われる植物性遺物が直接堆積し、砂面下の黒色海砂の多く含まれる面にも同様に堆積する。

残念なことに湧水が著しい為、調査も思うようにはかどらない状態が続いたが、テストピット北東壁に近い所に120cm×60cmの長円形状の小ピットが発見された。深さ約40cmで土丹石の底面に至るが、覆土からは多数の青磁片、常滑、かわらけなどと共に、漆器（皿）の完形に近い木製遺物が出土している。又、小ピット東辺には、杉板状の木材が立っており、性格は不明だが一定の目的を持った遺構である。

第１テストピットからの出土遺物は多量で、多くの完形かわらけ、常滑、古瀬戸などの陶器類と共に、中国南宋時代に焼成された青磁、白磁などの破片もきわめて多い。更に、おろし皿などの生活用具が多いのも大きな特徴である。

第２テストピット

敷地西側に約６ｍ×５ｍの範囲で不整形に設定された発掘区で、多くの遺構が重複し合った複雑な様相を程している。

まず、地表下１ｍ程で土丹を含んだ第一砂面が検出された。（これを第一生活面と呼称する。）

この面には擂鉢状のピットが７ヶ所発見されている。各ピットは約20～30cm程の深さで、最も深いものは60cmもある。各々覆土には、焼土層・灰層・粘質土層などが交互に堆積していた。この種のピットは発掘区以外にも数ヶ所発見されており、敷地中央部から若宮大路側にかけて分布していたものと想像される。

第一生活面上の遺構は人為的に堆積された砂層上にあり、その砂層を除去すると、下層に竪穴状遺構の床面が検出された。つまり、擂鉢状ピット群の存在した時期よりも一段階古い第二生活面（土丹混りの暗褐色土層）上に掘り込まれた遺構内に砂を入れ、第一生活面としたものである。

第二生活面に形成された竪穴状遺構は重複して二ヶ所にあり、東側の第一竪穴状遺構の方が西側のものより新らしい。

第一遺構は、掘り込み斜面上にコーナーも含めて柱穴が穿たれ、第二遺構は床面上に柱穴が並ぶ。両遺構とも床面は50～60cm程の深さで、基盤の砂層に掘り込まれている。又、南側の限界線は不明である。

第２テストピットからの出土遺物は極めて多量であるが、特に完形かわらけが大小様々の種類にわたって出土した。

東西トレンチ

トレンチは１ｍ幅で25ｍの長さに亘る。西側の第２テストピットに近い部分では、攪乱が著し

く、成果は乏しかったが、東側では地層が良く残存していた。それは、二枚の砂層と三枚の木炭層により構成され、特に第1テストピットに続く下層の木炭層からは、青磁などの中国製遺物が多量に出土した。又、その上面には植物性遺物が集中的に検出された。

Ⅲ　遺跡の性格について

今回の調査によって、従来空白に近い状態であった鎌倉の中世都市遺跡研究の上で、多くの貴重な成果が得られた。

まず、発見された遺構の多くが砂による整地層、或いは平野部の基盤を成す砂質土層を整形した上に造成されていることである。鎌倉の中世遺物は山間部に於ては、山稜を切開き泥岩の岩盤を整地した上に形成されるのに対して、市街に於ては、砂層をベースにして形成される例があることが具体的に明らかになった。

次に、第1テストピットより発見された長円形の小ピットは、性格は不明ながら、周辺に生活用具遺物の出土が多い点などから、最も実生活に関連のある遺構の一部と思われる。

第2テストピット中の第一生活面上に表われた摺鉢状ピット群は、形状こそ異なるが、浄明寺釈迦堂遺跡、扇ヶ谷十六井戸やぐらなどで発見された特異なピット群と共通性を持つもので、その方面からの研究が更に必要である。

第二生活面に表れた二つの竪穴状遺構は、極めて興味ある発見である。「竪穴」は従来、縄文・弥生時代の一般的住居跡の形状の総称であると共に、古墳、奈良、平安時代の一般庶民・農民、或いはそれ以外の被支配者階級の住居形態にも共通した形状であった。近年、各地の中世遺跡からもそれに近い例の発見が報告されているが、鎌倉では最初の発見である。これが中世鎌倉の市街の一般例か、或いは当遺跡内の限定された事象（例えば、屋敷内の家人小屋など）なのかは、今後の調査を待たねばならないにしろ、貴重な布石となる発見であった。

遺跡全体での出土遺物の量は、ミカン箱大のダンボール箱で十数個分ある。短期間で全てを整理することは不可能だが、特徴的な点の一つは、素焼の「かわらけ」が当遺跡特有の型式を備えていることである。即ち、口縁部に凹線が走り、胴上半部に沈線の入る形態が一つの遺跡から集中的に出土したことは、今後の研究に良好な資料を供するものである。更に、中国製の青磁なども相当量になるが、これもこの遺跡に居住した人物の階級性を示唆するものであろう。

総じて、部分的な調査ではあったが、『郵便局舎敷地に、鎌倉時代中期から末期にかけて、一定の建物が建ち並び、少なくとも三回の火災に遭い、その度に建替えが行なわれた』との概括的な推察の中で、更に今後研究を重ね、内容を深めていくことが必要である。

調査協力者

斎木秀雄　玉林美男　下平容子　斎木明美　下平和則　池田大輔

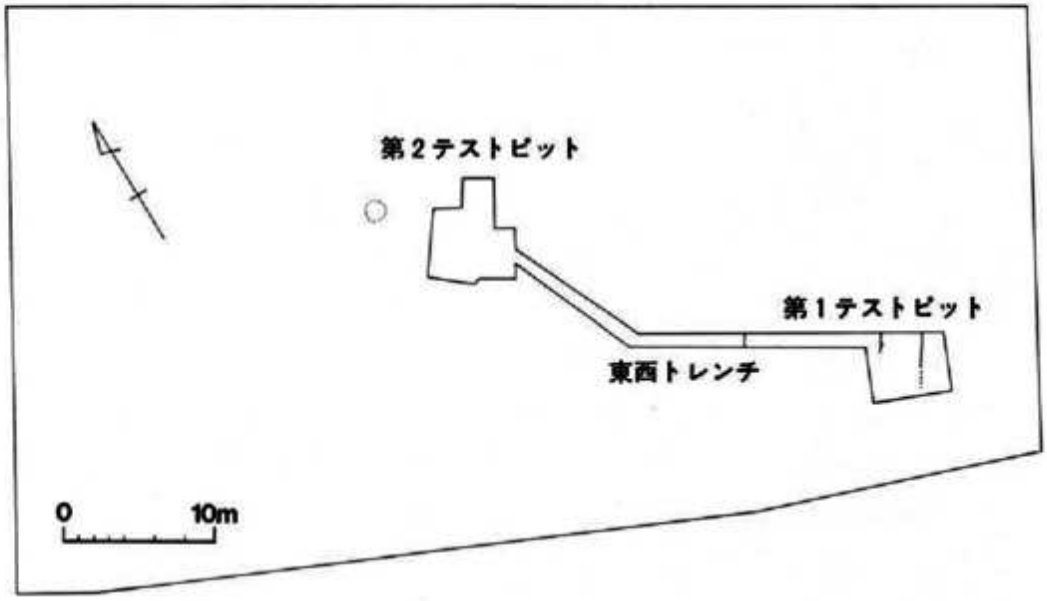


図1　発掘区

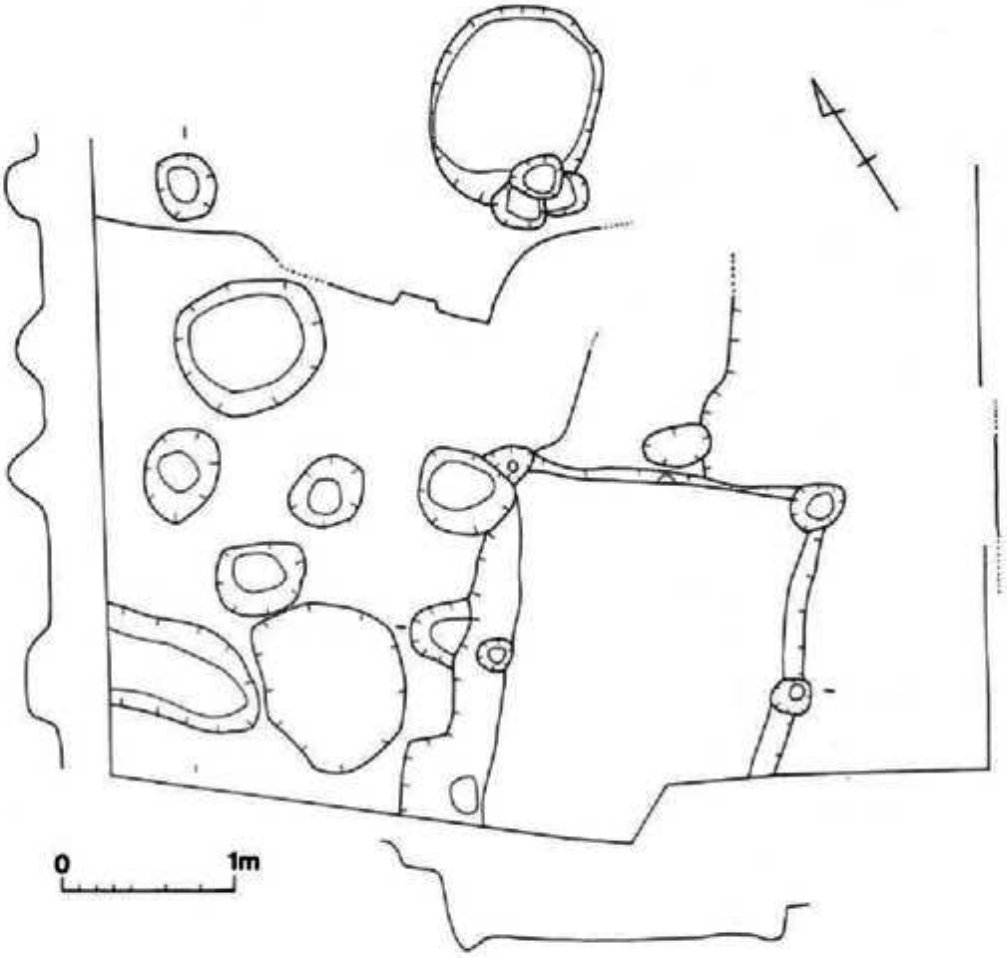
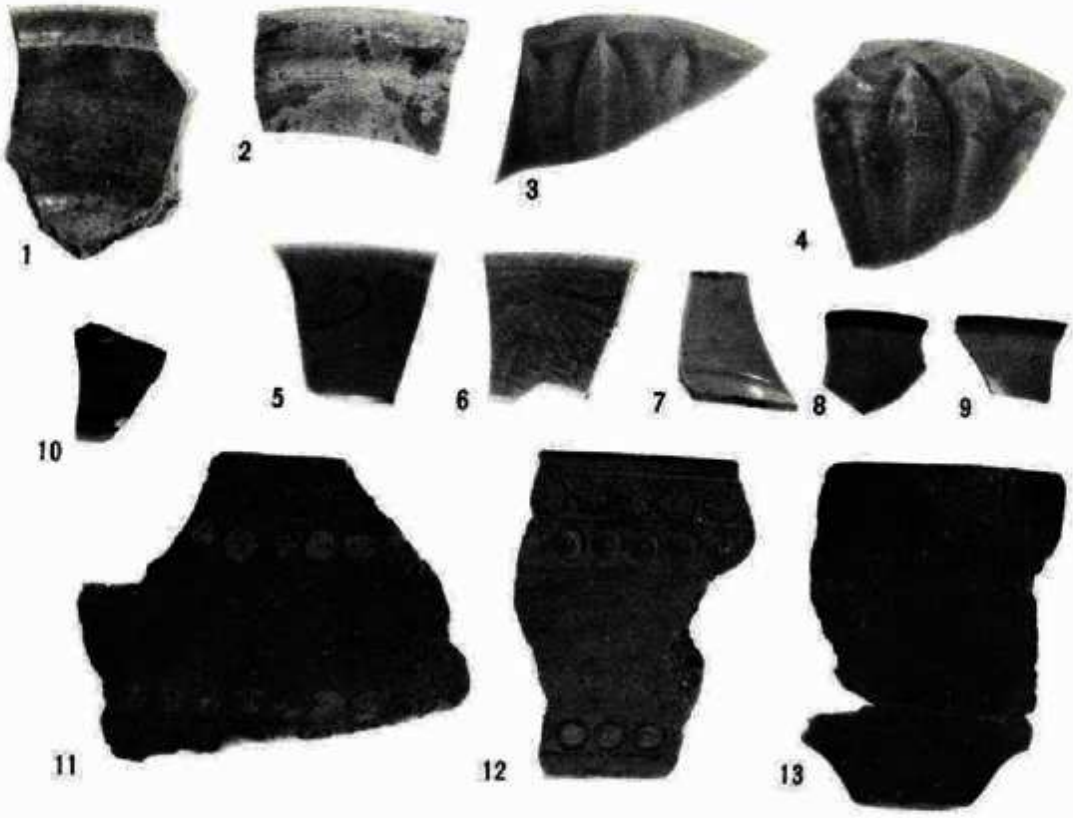


図2　第2テストピット遺構平面図

第2テストピット遺物



1，2瀬戸系鉢 3～6青磁 7～9白磁 10緑釉陶器 11～13手焙 ½

23．報恩寺跡

昭和50年12月３日～10日（試掘）

昭和51年１月28日～２月10日（本調査）

西御門一丁目91番３他

鎌倉市教育委員会（試掘）

発掘調査団（本調査）

市立第二中学校の体育館建設計画に伴う緊急事前調査である。調査はまず試掘調査が、建設予定地内に２×２ｍのテストピットを６ヶ所設けて行われた。その結果、予定地の北東隅付近に凝灰岩切石列が検出され本調査への移行となったものである。

本調査は、鎌倉市の委託事業として大三輪龍彦氏を団長とする調査団によって実施された。調査対象地は中学校グランド北側部分の約700㎡の区域で、谷戸最奥部から数えて５段目の平場に相当する。現況地形から見ればグランド部分は６段目に数えられるが、昭和24年の学校建設の際にグランド造成の為北側部分を削平し南側の低段地を埋めたてたと聞く。現在、管理棟校舎とグランドとの間の段差はその造成工事に因るものであり、本来的な地形を示すものではないので、調査対象地を管理棟校舎と同じく第５段平場に所在するものと認定したのである。

調査はまず石列遺構の全容を把握する為に幅3.5ｍ、長さ14ｍのトレンチを東西に設定した。なお、調査区の区割は試掘時の軸線に従って東西方向をアルファベット記号、南北方向に算用数字を各々２ｍ毎に設定して担合せる方式を執った。

石列遺構

石列遺構は２種類の形態の異る石列が上下に重複し合った形で検出された。上段石列の被覆土は極めて薄く地表下僅か４～５㎝である。これはグランド造成の際に表層の大部分が造成工事によって除去されたことに因るものと思われる。上段石列は、凝灰岩切石の長軸を東西方向に向けて略々３列に並行させた構造で約6.5ｍに亘って確認された。配石状態はやや蛇行気味である。石列北縁部には長軸を南北に向けた凝灰岩切石を、突出させる形で据えてある。切石列両端部は崩落し砂岩礫が堆積するが、東端部の崩落礫中には常滑甕、かわらけ、常滑系摺鉢、砥石などが出土した。上段石列が蛇行形状を呈するのは現地表面に近く、また下段石列上に直近して据えられた為に、二次的な原因によって歪みを生じた結果と思われる。

下段石列は上段石列の直下、地表下約15㎝程にあり、東西方向に9.6ｍ走行し、東端部で鍵形に南に3.6ｍ直折する。石列正面は鍵形の内（南）に揃えられ、東西列西端から４ｍ迄の切石は短辺を正面側に、その地点から東側、及び南北列の切石は長辺を正面側に各々据えている。長辺が

正面を向く範囲では、略々1.2～1.5m間隔で短辺を正面に向ける切石を配し、北側に上段石列同授突出部分を設けている。全体として石列上面は西→東、北→南方向に緩やかに傾斜する。石列は土丹塊を用いた版築地形面上に構築されるが、内側版築面は外側に比べ約15～20cm程低レベルとなる。

東西石列西端部で内側版築面を更に南方向に拡張精査したところ、石列から南方約2mの地点で東西に並ぶ土丹列が検出された。版築面は土丹列を境に南側が約20cm落ち込み段差状を呈す。石列西端からこの土丹列の西端部を結ぶ線から西側は、土丹版築面が途切れ乱雑な高まりとなり、切石列を伴う遺構の西側限界線と考えられる。

石列内側には建築遺構の所在を示唆する兆候は検出されなかった。石列と土丹列との間に切石が南北方向に2～3列並行して検出されたが、上面レベルも一定せず礎材的遺構とは考えられない。またその南東側に径60cm、深さ35cm程のピットが検出されたが、柱穴か否か不明である。

上段石列と下段石列との関係については、上下の切石間に間層が認められる等の点から同一遺構ではなく、新旧重複関係と考えられる。但し、出土遺物や層位からみて、その時間差は僅かなものであろう。石列の規模に於ては残存部分でみる限り上段石列の方が優るが、基本的な構造には共通性が認められる。何れも石垣或いは築地垣の基礎部と推定される。

井戸跡

石列内側の遺構確認の為に、第3、4試掘テストピット間に設定したトレンチを更に東に拡張し精査した。その結果、東西石列から約4m南側の地点で、土丹混りの粘性褐色土の版築面を掘り込んだ井戸が検出された。井戸は南北径3.75m、東西径3.6mの大型のもので、深さは時間的制約の為約1.5m掘り下げた段階で青灰色粘土層の堆積を確認したに止めざるを得なかった。井土覆土上層からは安山岩製五輪塔空風輪が出土した。

古道跡

東西石列西端南側の土丹列の西方約2mの地点に、南北走行の土丹列が検出された。この土丹列は調査した範囲に於て南北8mに亘って走行し、西側を正面にして段積されている。北側土丹列は3段積構築で、南に下る程粗雑な構築状態であった。土丹列東側の石列遺構の基盤面は途中から版築地形の体を為さない土丹混り粘質褐色土面となって傾斜しながら西下するが、恰もその傾斜面を土留めする形で土丹列は構築されている。そして土丹列西側は低段地となり、一部溝状を呈しながら南方に傾斜する。低段地の西側対岸は未調査の為不明。だが、0－9グリッドで地表下40cmに中世所産と思われる土丹面が検出されている。低段地の上面は、可なり固い暗褐色土層面である。しかし、同面上及び土丹列周辺からは近世遺物やガラス片等も出土し、しかも中学校建設前にはこの辺りに農道が存したと聞く。土丹列や低段地の状態から考えても近年の道路遺

構であることは略々間違いないと思われる。

ただ、現在の管理棟校舎の建つ平場との約２ｍの比高を鑑みた場合、この道路東側は可なりの高台であったと推察される。また、道路から西側のグランドも同じ様に削平されていると仮定すると、幅員は不明だが道路はいわば両側を高台に挟まれた切通しの様な形ではなかったかと想像される。仮にその様な地形であったとすれば、中世以来の旧地形の名残りを考慮しなければならないであろう。

遺物

今回の調査での出土遺物は比較的僅少であった。主なものの紹介に留めたい。

常滑瘤底（ＰＬ－７）、０－９グリッド土丹面上出土。底部は所謂砂底で、器壁外面は箆による掻上げ調整痕が認められる。器壁内下底部に黒漆が付着する。肚土に長石が混入し焼成やや良好。

渥美糸摺鉢（ＰＬ－15）、底部に糸切痕が認められる。器壁内及び内底部は滑らかで、条痕は８本単位である。胎土灰白色。色調薄茶褐色。焼成良好。上段石列東端部出土。

古銭　０－９グリッド土丹面上出土。「開元通宝」３枚、「天禧通宝」「天祐通宝」各１枚、不明銭１枚。井戸跡内青灰色枯土層上面出土。「洪武通宝」１枚。

考察

報恩寺史については既にいくつかの研究論文が発表され、概括的寺史については把握されている。(註1) ここでは先学の業績を踏まえた上で、今回の調査により検出された遺構の性格を史料との関連の中で求めてみたい。なお、49年度に調査された石列遺構についても併せて考察する。

報恩寺は応安四年（1371）に創建された禅宗寺院で、開山は義堂周信（1325～1388）、開基は上杉能憲（1333～1378）である。山号南陽山。正式寺名は報恩護国寺とされる(「十月十五日、余応上杉兵部(能憲)卿公請、創一刹於鎌倉城北、名曰報恩護国、山称南陽、闢基演唱訖、余先試把钁、開土三下、入箕中而後、与檀那運搬一次」空華日用工夫略集－以下、日工集と略す－)。鎌倉の城北、既ち鶴岡八幡宮僧坊（二十五坊跡）と山一つ隔てた、西御門の一谷戸が適所として選ばれた。発掘調査によって検出された遺構や遺物は全て南北朝後半期以降のものに限られ、鎌倉期の寺院等の所在を示す遺構は現在のところ皆無である。前身遺跡のない同所が処女地として選ばれたのであろうか。義堂自身が早速鍬をもって開墾に入る、という記述に興味を引かれる。また、「於鎌倉城北」とか（「築相城西麓。名山曰南陽。」空華集）に見られる「城」の意味についても今後別の機会に検討してみたい。

さて７日後の21日には方丈の立柱上棟が行われる（「報恩方丈立柱上棟…」日工集）。当時も建設現場は盗人に狙われやすかったらしい（「十一月十五日…昨夜報恩寺有偸材之人…）日工集)。境内地も着々と整備されて行く（「応安五年二月十日…余往報恩寺視土木、或人勸曰、遍于諸方園中、取珍木異石、為泉水之備、不日必成栄観、余却之曰、樹石等物、人々自植、以充珍玩、而

取之、謂之豪奪、余誓不欲取入所畜、但以埜樹村花、隨得隨移則足矣、…」日工集)。関東御所肝入りの新寺建立に際しても庭園に奇をてらうことなく、自然の為すがままの簡弁な境地を望むが恐らく報恩寺各建物の造作にもその思想は貫かれたことであろう。

(「応安五年六月十五日、余遷居報恩新寺、普請搬土築墻、謝諸道友曰、昔年馬祖道勝光、山鬼奔馳夜築墻、堪笑報恩無寸補、土功辛苦万人忙、…」日工集)、(「剏宇於相府之北。称山曰南陽。既方丈先成。種竹於南軒者数莖。扁曰擊竹而居焉。」空華集)義堂は新造の報恩寺方丈に移り住む。突貫工事を拒みとりあえず方丈を拠点にする訳だが、土を運び垣を築くとの表現から短絡的に連想されるのは体育館予定地内で発見された、土丹版築地形面上の鍵形石列遺構である。正面が鍵形の内側に向く石列の構造は、石垣、或いは築地垣等の「墻」的施設をおいて他には考えられない。さて方丈に居を構えた義堂は仮禅堂を設け僧俗に規範を示し、本格的な活動を開始する(「応安五年七月一日、余既居報恩、黄昏自鳴坐禅磬、且告衆曰、古人塚間樹下、惟以坐禅為務、不必待屋宇周備也、本寺方丈既成、自今始宜打版、四時坐禅、永以為規矩、先師専以坐禅為本也、遂率一衆假火閣而為禅堂、…」日工集)。先人が塚の間や木の下で坐禅に務めたことに学び、何も施設が備わるまで待つ必要はない、既にこの寺には方丈があるのだから8時間に亘る位の坐禅はできる筈である、と説く。仮禅堂とされた火閣とは直訳すれば炬燵であり、方丈内の居間のような一隅を禅堂に当てたのであろう。従ってこの時点ではまだ方丈の他に建物施設は無いようである。なお禅堂については5年後の永和三年(1377)正月六日条の日工集に「姑出禅堂、得句曰、新年仏法、諸方在、独我山中一点無、…」とあり、或いはこの頃までの間に禅堂が本設されたとも思われるが確証はない。

さて仮禅堂から後の報恩寺造営について引き続き日工集から引用する。「応安五年十月十六日、檀那兵部家臣紀吾来、和会報恩寺材料泊庫司基処、余曰、庫司固合建立、然古人不以食為先、故余不欲先立焉」

同年「十一月十五日、新開荒於報恩方丈後山、名曰雲臥庵、蓋備荒裘也」

同年「十二月十三日、雲臥庵立礎、是日、小師尼寿珍、書捨田券、打掃干当庵」

「応安六年十月一日、報恩新寺未有僧堂、且假就于方丈西北寮、而為坐禅単位、故不開炉、道人三五人、但冷坐而已、余作偈代上堂云、諸方有炭各開炉、我此山房炉也無、冷笑南陽寒不奈、擁衾風葉暖禅跌、…」

同年「十月六日、…造小亭於雲臥之上面、名曰半雲、」

材料はあっても庫裡建立を延ばし、寒さの中でもあえて僧堂も建てない義堂が何故隠居所である雲臥庵や半雲亭を先行して建てたのか、理由はよく判らない。が、ともかく方丈の後山の荒地を開いて雲臥庵を建て、更にその上面に半雲亭が建設されたのである。「後山」そして「上面」という表現は、「背後の山」或いは「後の一段高い所」と素直に解釈して差支えないと思われる。また僧堂の仮施設となった方丈西北寮については、「火閣」とは異り方丈外の西北側にそのような既存

の建物があったと解釈すべきであろう。庫裡や僧堂についての記述は、収集した資料の範囲内に於てはその後触れられていない。しかし両所を欠いたままで報恩寺がその後も営まれたとは考え難く、まして庫裡は材料も準備したことでもあるので、何時の頃かにふさわしい個所に建立されたものと想像される。ただし義堂のことだから西北寮をそのまま僧堂とし、禅堂も兼用させたか、という疑念は残るが。

なお応安六年（1373）白旗神社が復興される（「維応安六年歳次癸丑冬十一月十五日。南陽山報恩護国禅寺。白旗大明神霊祠成。…」空華集。祭白旗神文）。(註2)

応安七年、仏殿開基（「十一日、新寺普請、開仏殿基、」日工集）。そして仏殿の立柱（棟上）は2年後の永和二年にとり行われる（「十一月十三日、報恩寺仏殿立柱、…」日工集）。仏殿の建立について三山進氏は、その落慶時期を永徳四年（1384）頃と推定されている。氏の論究は梁牌銘文、本尊地蔵菩薩像その他多くの資料を駆使した緻密な内容であるが、詳細は省略させて頂きここではともかく「仏殿は建てられた」という御考察を拝借して先へ進めたい。(註3)

永和元年（1375）報恩寺に高麗鐘を購入しているが、鐘楼の存否は不明（「相陽南陽山報恩護国禅寺鐘銘……爰有粥高麗国銅鐘者。…」、「報恩化鐘偈……西門有寺称南陽。未有鳴鐘警夜長。但得諸人斎著力。一聲不待五更霜」空華集）。

永和四年（1378）4月17日に大檀那上杉能憲が死去し、その葬儀が報恩寺方丈客殿で行われる。能憲に代って報恩寺を後見する上杉憲方は、同年6月25日兄の遺命に従い能憲の旧第を報恩寺に寄進し塔庵とした（「廿五日、房州(憲方)承先兵部敬堂遺命、以旧第帰報恩為塔庵、」日工集）。この塔庵は10月17日には完成するが、憲方は自身の寿塔も併せ祀ることを望んだ（「十七日、報恩寺敬堂塔庵既成矣、房州道合居士遺使慶敬堂塔庵之成、且欲裕寿塔一基、以表陪祀之誼、如何、余曰、古今其例非一、近則円覚仏日庵、為平氏(北条氏)四世香火、生嗣亦其例多、宜遵命云々、」日工集）。

三山進氏の考察によれば、この頃浴室も造られている（「…蓋当寺浴室跋陀婆羅菩薩之像…」鹿山略志、報恩寺条）。(註4)

以上、寺史の詳細は別として報恩寺に関る資料から建物の築造に関する部分を垣間見てきた。資料収集が不十分で見落しも多くあると思うが、改めて発掘調査で得られた知見及び現況地形の中で報恩寺伽藍配置について考えてみたい。

まずその存在が略々確実視される建物は次の通りである。「仏殿、方丈、雲臥庵、半雲亭、能憲塔庵、浴室、方丈西北寮（仮僧堂）、白旗社」

次に建立された可能性の強弱は別として、考え得る建物を挙げてみる。「庫裡、禅堂、僧堂、憲方寿塔」

さて前述の通り報恩寺跡の谷戸は最奥部から5段に亘る階段状の平場によって構成される。この内第1、2平場間及び第2、3平場間は各々5m以上の比高差がつく。（第1平場は地形測量図

にどういう訳か表現されていなかったので破線で記入した。）発掘調査が実施されたのは第4、5平場である。第4平場上で検出の建物基壇と思われる石列遺構の東西辺は15m70cmを計り、その中間点は谷戸南北中軸線上に略々合致する。遺構を仮に方形状と仮定して図示した。次に第5平場で検出された鍵形の石列遺構は、谷戸中軸線よりも東側に位置する。石列が南及び西方向に延長していた兆候は調査に於ては見出せなかった。

さて禅宗寺院である報恩寺は境内中軸線上に主要伽藍を配置する様式を当然採用した筈である。まず方丈を建て、その「後山」に雲臥庵を、更に同庵の「上面」に半雲亭を各々建てるとの記録は、この3棟の建物が直線上に並んで配置されたと解釈し得る。前述のように「後山」、「上面」という表現を「背後の山」、「上段」と理解しそれに見合う地形を谷戸内に求めれば、5mの比高差を有する第1、2平場が浮び上ってくる。即ち谷戸最奥部に位置する小平場を半雲亭、その「下面」の第2平場は雲臥庵と各々推定される。そして方丈は第3平場内所在と推定されよう。

更に方丈跡推定地の前面の第4平場に所在する一辺約16mの基壇上の建物は仏殿をおいて他には該当しない様である。像高84.1cmの地蔵菩薩坐像を本尊として安置するにふさわしい規模といえる。また第5平場の石垣、ないしは築地の基礎施設と考えられる石列から南方向は井戸の他には、試掘調査結果をみても明確な遺構はなく、またグランド南側が造成時に可なり埋め立てられた経過から推して、報恩寺々域の南側限界を同石列付近と考えたい。古道跡部分が前述のように旧来の地形を踏襲したものであれば、報恩寺参道跡をこの辺りに該当させることも可能である。第5平場上の石列遺構も東西対称に展開していた可能性もあり、調査し得なかったことが悔まれる。

方丈跡推定地の第3平場は比較的広大で、方丈の規模も或いは仏殿より大きいと思われる。建立当初から方丈一棟である程度事足りたのも、建物面積が平場に比例したとすれば納得が行く。

この他の方丈西北寮、浴室、白旗社、或いは庫裡、禅堂、僧堂、そして当然あったであろう東司などの各建物は、具体的に推定し得ないが、半雲亭から仏殿を結ぶ中軸線の東西各々のふさわしい個所に建てられたと思われる。

能憲の旧第を移築した塔庵、そして憲方が望んだ寿塔は何処に所在したのであろうか。旧第移築時（1378）には既に仏殿立柱（1376）も終り、仏殿は未完成だったにしろ各建物の基本的配置はもう完了していたと思われる。とすればどこか。想像に過ぎないが、谷戸西側山腹上の平場がその位置と考えられる。確証は全くないが、平場背後のやぐらの存在を「霊地」としての選定理由に挙げたい。

以上、想像に想像を重ねたが文献に表れる報恩寺建物と遺構との関連について考察を試みた。「罹災数回、終至廃亡、今存旧趾而已」（鹿山略志）となった報恩寺については今後も様々な機会を活かし、調査を進める必要があろう。

註１．「報恩寺の研究」（鎌倉市立第二中学校社会研究部　昭和47年３月）

「《異相なる僧像》をめぐって一跋陀婆羅尊者彫像小考一　三山進」（跡見学園女子大学美学　美術史学科報第四号　昭和51年２月）

「鎌倉報恩廃寺本尊像考　三山進」（鎌倉第27号　昭和51年11月）

註２．「鎌倉市史総説編」（吉川弘文館　昭和34年10月）

註３．前掲「鎌倉第27号」

註４．「木造　跋陀婆羅尊者立像　三山進」（鎌倉の文化財第11集　鎌倉市教育委員会　昭和56年11月）

前掲「跡見学園女子大学美学　美術史学科報第四号」

なお本文中に引用した各文献は下記に拠った。

「空華日用工夫略集」辻善之助編著　大洋社　昭和14年４月25日

「空華集」五山文学全集第二巻　上村観光　五山文学全集刊行会　昭和11年９月

「鹿山略志」（瑞泉寺本）

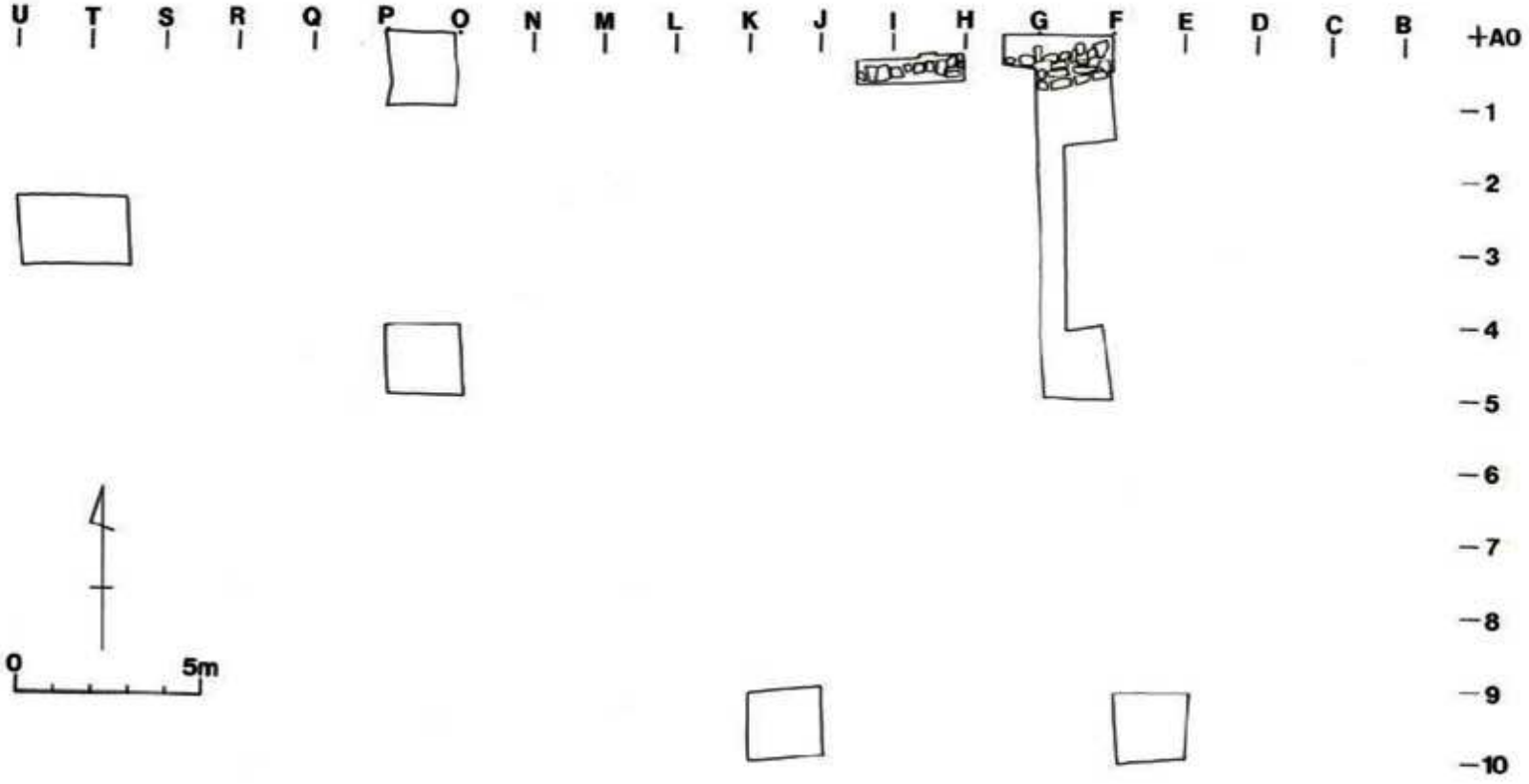


図1　試掘テストピット及びグリッド配置図

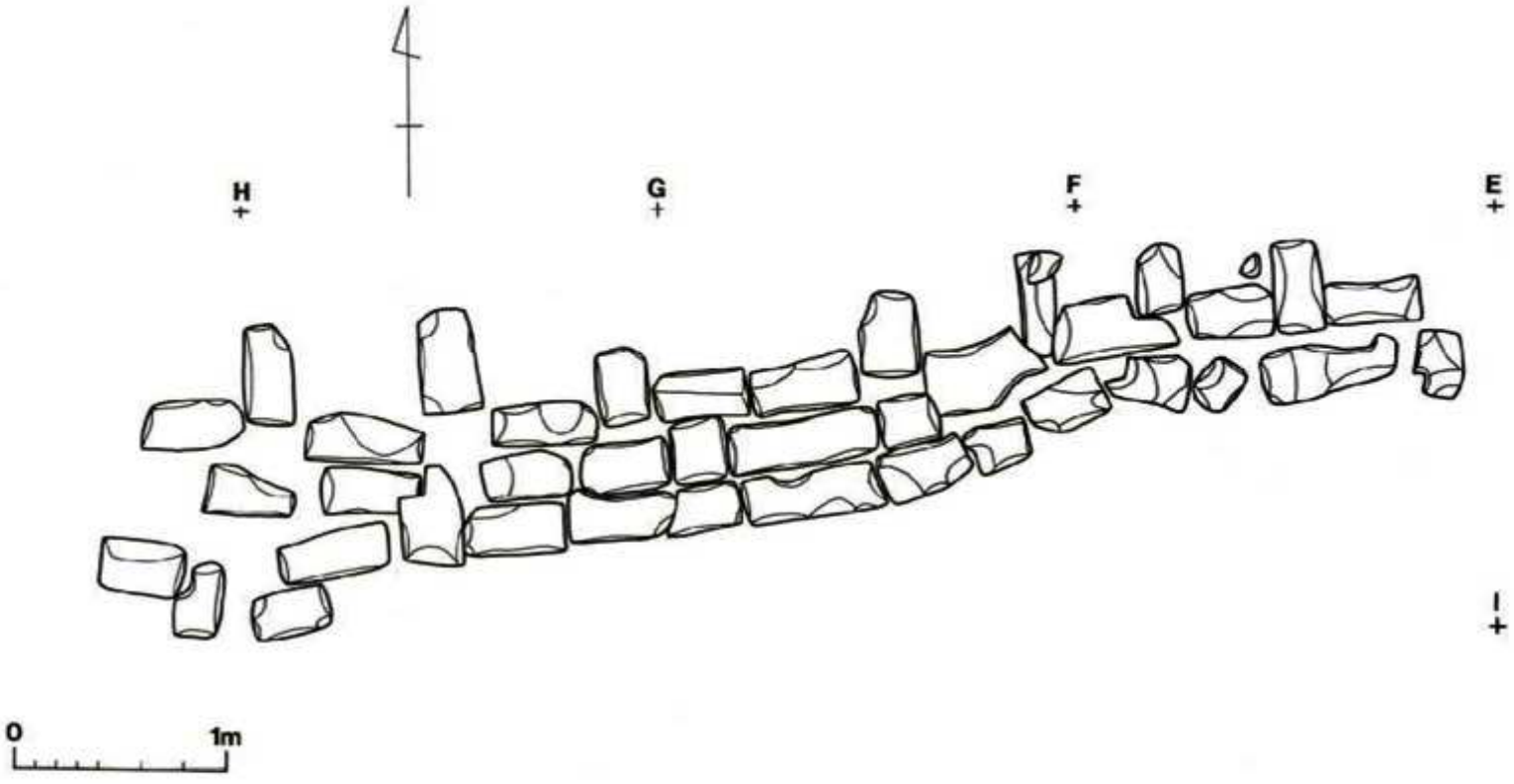


図2　上段石列遺構平面図

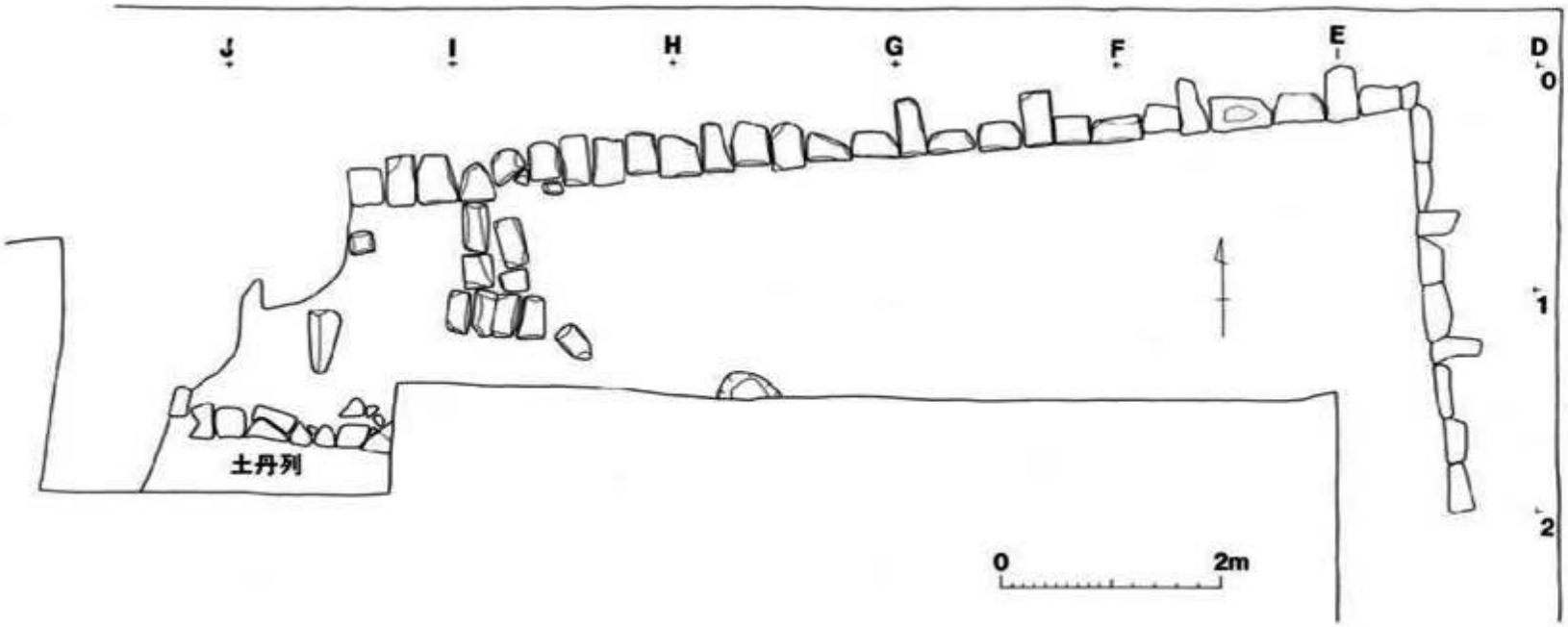


図3　下段石列遺構平面図

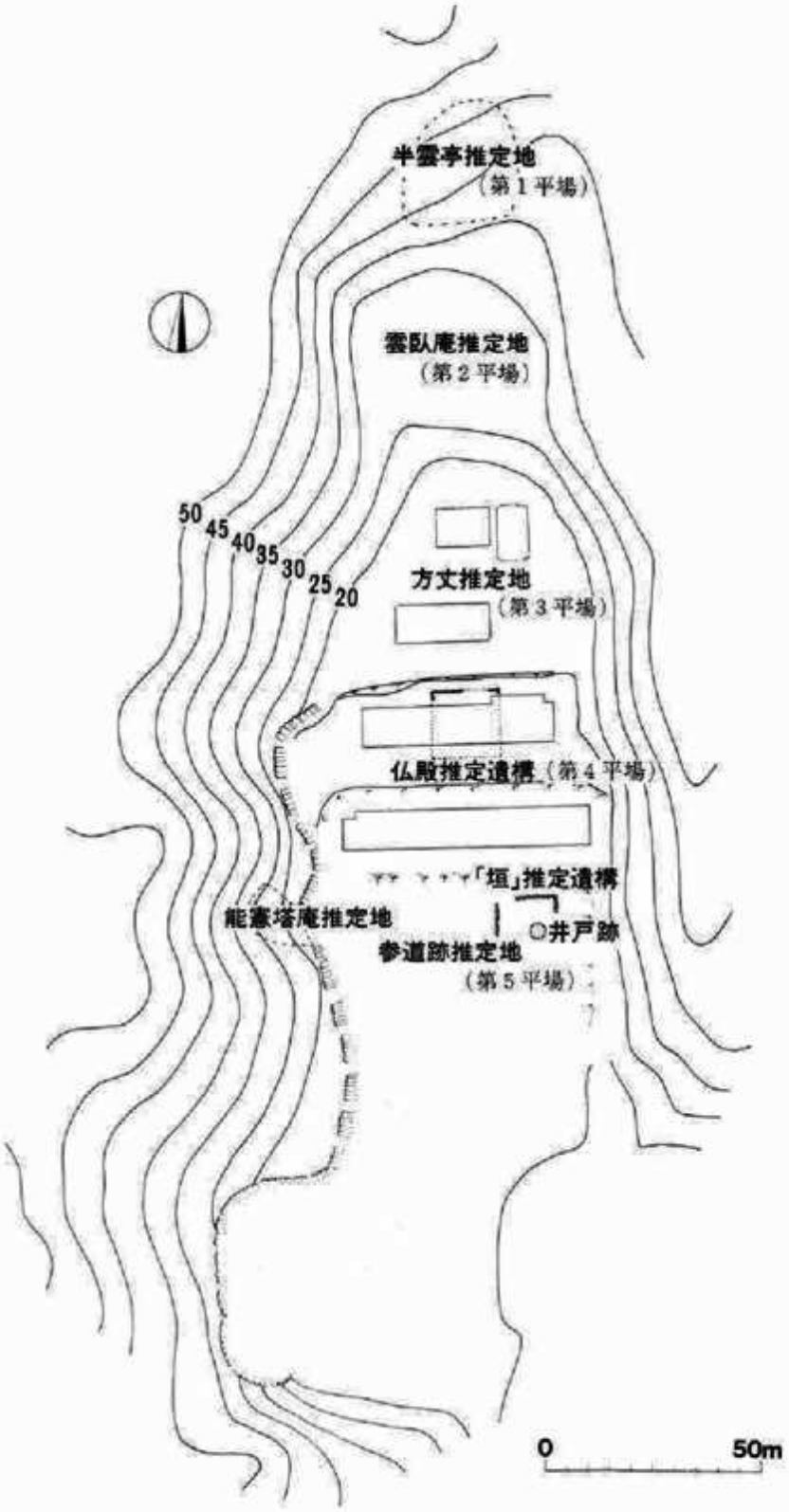


図4　報恩寺主要遺構所在推定図

試掘調査全景

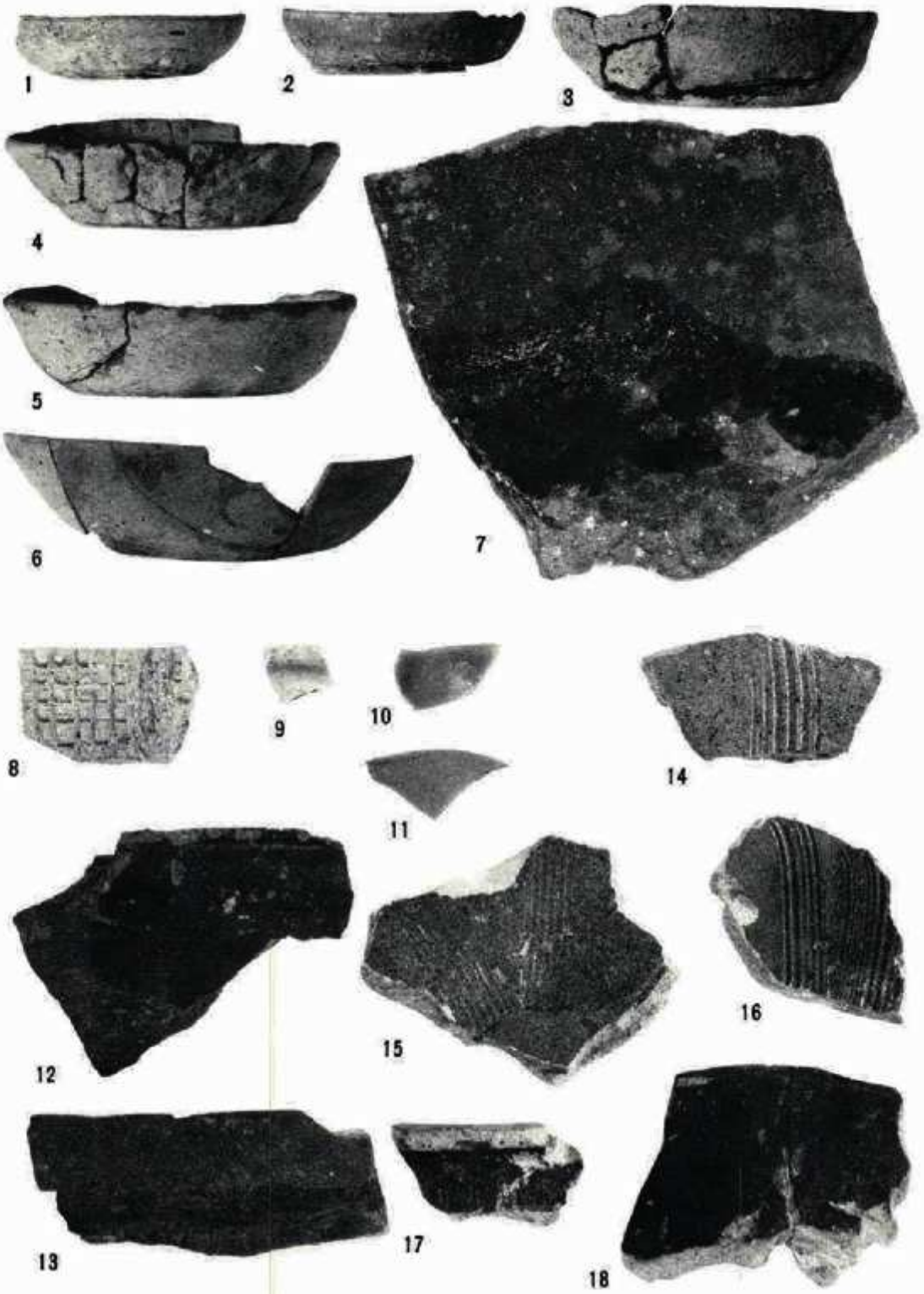
上，下段石列遺構重複状況

下段石列遺構全景

下段石列遺構石組状況

井戸跡

古道跡



PL 1～6 かわらけ　8 瀬戸系おろし皿　10，11 青磁　14～16 摺鉢
7 常滑甕底　9 白磁　12，13 常滑甕口縁　17，18 手焙　½

24．多宝律寺遺跡

昭和51年３月９日～24日

扇ヶ谷二丁目268番３

発掘調査団

「多宝律寺遺跡発掘調査報告書」鎌倉市教育委員会　昭和51年３月　参照」

昭和51年度の概観

51年度は多宝律寺跡と東勝寺跡で発掘調査が実施された。何れも国庫補助事業による学術調査で、国指定史跡指定の為の資料を整備させるために行われたものである。多宝律寺に於ては、立塔基壇遺構等が検出され従前の6次に亘る調査結果と併せて中世律宗寺院の具体的様相を明らかにすることができた。東勝寺跡に於ては、前回の調査に引き続き削平岩盤面上に大規模な建築遺構が検出され、また周辺山稜の地形調査により堅固な山城遺構の所在が判明した。多宝律寺、東勝寺共に鎌倉を代表し得る寺院遺跡といえよう。

また、長勝寺及び報国寺境内で寺院建物建設に伴う大規模な緊急事前調査が実施された。長勝寺では大量の舶載陶磁器と共に土間状遺構群が検出され、庶民生活に関わる遺構と推定された。報国寺では鎌倉末期から、近年に至る迄の期間に逐次構築された5条の石垣遺構が検出され、伝統的に踏襲された境内整備の在り方の一端が確認された。なおこの2件の事例は、試掘調査を経た後に本調査に移行し、また民間事業に於ける発掘調査事業者負担の最初のケースでもあった。

25　長勝寺遺跡

昭和51年８月９日～11月10日

材木座二丁目2162番２

発掘調査団

「長勝寺遺跡ー中世鎌倉の民衆生活を探るー」長勝寺遺跡発掘調査団編　昭和53年10月　参照

26　報国寺境内

昭和51年11月28日～52年１月15日

浄明寺字宅間533番

発掘調査団

報国寺坐禅堂建設に伴う緊急事前調査である。調査団長大三輪龍彦氏。調査対象地は報国寺本堂北東側の旧庫裡跡で、面積約300m²。

臨済宗功臣山報国寺は開山を天岸慧広と伝えるが、開基については足利家時或いは上杉重兼とする両説があり、開創時期も建武元年（1334）、若しくは更に後年との両論がある。寺地は宅間ヶ谷に位置する。

発掘調査の詳細については、近年中に調査団による正式報告が為される予定なので、本稿では概要紹介に留めたい。調査は工事の進展計画との調整を計りつつ、調査区東側から逐次掘り下げる方法に拠った。その結果、南北に走行する石垣遺構が東側から順次５条検出され、報国寺史変遷の一端を窺い知ることができたのである。

最東部の第一石垣は凝灰岩切石を横積みにし、南端部付近では階段状を呈する。第二石垣は第一石垣北側部分西側に検出された凝灰岩切石横積式で、殆ど破壊され一部を残すだけであった。第三石垣は第二石垣の西約２ｍにあり、凝灰岩切石を地幅状に並べその上に２段横積した形である。南端部は、後述する階段状遺構と接合する。

発掘区北西側には凸状に岩盤が突出した部分があるが、その岩盤の突端部から岩盤下に沿って通路の如き道路状遺構が検出された。道路状遺構は対岸の発掘区南壁側にも認められ、この二本の道路状遺構に両端を切断された形で第四、第五石垣が検出された。第四石垣は凝灰岩塊を野積にしたかの如き乱雑な築造方法であり、東西（外面）は加熱の為か赤化していた。第四石垣の西側約２ｍのところに第５石垣が検出された。同石垣は凝灰岩切石を約８～９段に積み上げたもの

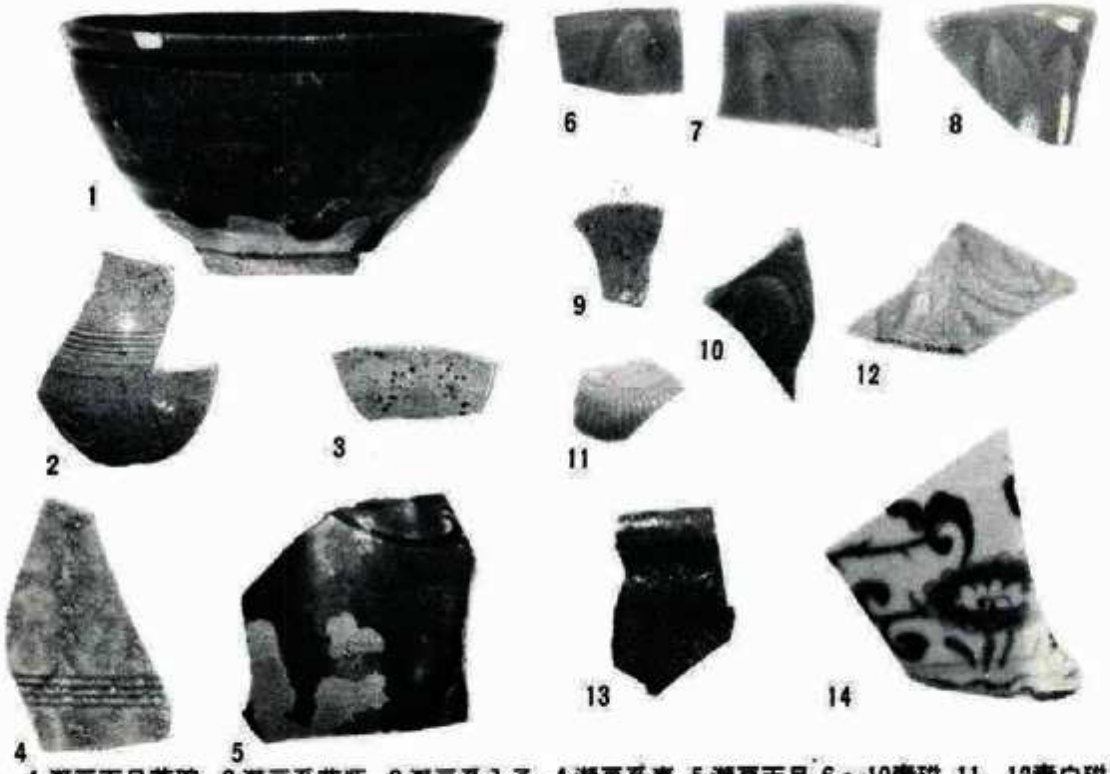
で、築造方法は横積式であるが一部小口積も見受けられる。石垣外面は略々全面に亘って赤化し、下段石には木炭等が密着していた。また石垣構築面も半ば焼土と化した状態であった。

第五石垣の石材中や構築面からは、かわらけ、常滑焼等の破片と共に黄釉陶器、緑釉陶器片なども発見されている。各石垣の推定年代は、第五石垣が鎌倉末～室町初期、第四石垣が室町中期～戦国期、第三石垣、及び道路状遺構を江戸中期、そして第二石垣を明治～大正期、第一石垣は近年昭和初期頃と各々考えられた。

以上のように報国寺境内のこの地に於て伝統的に石垣構築による境内造作方法がとられていたことが判明したのである。石垣築造方法や出土遺物の紹介、更に寺史との関り合い等については正式報告を待ちたい。

第4→5石垣

第5石垣全景



1瀬戸天目茶碗　2瀬戸系花瓶　3瀬戸系入子　4瀬戸系壺　5瀬戸天目　6～10青磁　11，12青白磁　13緑釉陶器　14染付（明末～元初）½

27　東勝寺跡

昭和51年12月6日～26日

小町三丁目497番地

発掘調査団

「東勝寺遺跡発掘調査報告書」鎌倉市教育委員会　昭和52年3月　参照

28　常盤字仲ノ坂947番所在遺跡

昭和52年1月20日

常盤字仲ノ坂947番

鎌倉市教育委員会

国指定史跡北条氏常盤亭跡の、市道を挟んだ南側山裾部で行われたビル建設計画に伴う試掘調査である。

工事予定地の南側山稜部は嘗って腰巻曲輪等の山城遺構の所在が知られていたが、(註1)現在では住宅地に一変している。

約300㎡の工事計画範囲内に、2×2mのテストピットを6ヶ所設定し掘り下げたところ、各ピット共に地表下60cm程で大型の土丹を用いた埋土層に相当する。西側ピットでは同層直下に岩盤面が検出された。岩盤面には削平地形された形跡はなく、西側山裾部から延びる自然地形の一端と考えられる。中央部の各テストピットでは、土丹層の下に明褐色土層が堆積し（地表下約80cm)、その厚さは1m以上に達する。層中無遺物。同層上面に人為的な遺構は見出せず、僅かに数片のかわらけ破片が採集されただけであった。

結果として当調査に於て具体的な遺構等は検出されなかったが、これに似た「空白地域」は翌52年度の北条氏常盤亭内の試掘調査でも部分的に存在した。市街地のような濃密な遺構分布状況とは異り、空白、或いは間隙部分として踏襲された区域の存在が予想される。

註1　「塩田義政とその邸跡について－鎌倉武士邸跡の考察－　阿部正道」神奈川県博物館協会々報第26号　昭和46年10月

テストピット明褐色土層上面

29　小町一丁目65番10～12所在遺跡

昭和52年１月25日～３月15日

小町一丁目65番10～12

鎌倉市教育委員会

52年度に調査された二ノ鳥居西遺跡に西隣する個所の、ビル建設工事に際して実施された緊急調査である。調査開始時には既に工事に着手していた為、遺構面の確認と主要遺物の採集作業に止まらざるを得なかった。調査された遺構面は上下２枚に亘る版築面で、ビル建設予定地の北西隅付近に東西に並んで検出された。東側から１号面、２号面と呼称して記述する。

１号面は粘質黒色土層中に細い土丹塊を混入した版築面で、確認範囲は東西３ｍ、南北２ｍであった。東側と南側に更に広がるものと思われる。面上には柱穴状のピット１穴と、165×40cmの浅い凹み状の長円形ピットがあり、木杭或いは板材が面上に打ち込まれた状態で検出された。長円形ピットの南側には、薬状の植物質遺物が厚く堆積していた。面上からはかわらけ、常滑焼、青磁などの破片が採集されている。

２号面は１号面よりも15～20cm程低地に検出され、粘質黒色土に海砂を混入して突き固めた版

築面で、版築の硬度は1号面よりも良好であった。面上には建築物の部材と思われる角柱型の木材が横たわり、その間に木杭が点在する。調査範囲が限られていた為、杭の配列の全容は不明であるが、略々東西、南北方向に交叉しつつ並ぶようである。ただし間隔は一定しない。また確実に同面上から掘り下げられた柱穴状ピットが4穴検出され、南北に並ぶピットの芯々間距離は140㎝である。更に北側ピットから建築区域西壁際の礎板を伴うピット迄も同じく140㎝であった。2号面からの出土遺物は、写真に示した青磁碗、陶製銚子、下駄その他漆器類など多種多様に亘った。

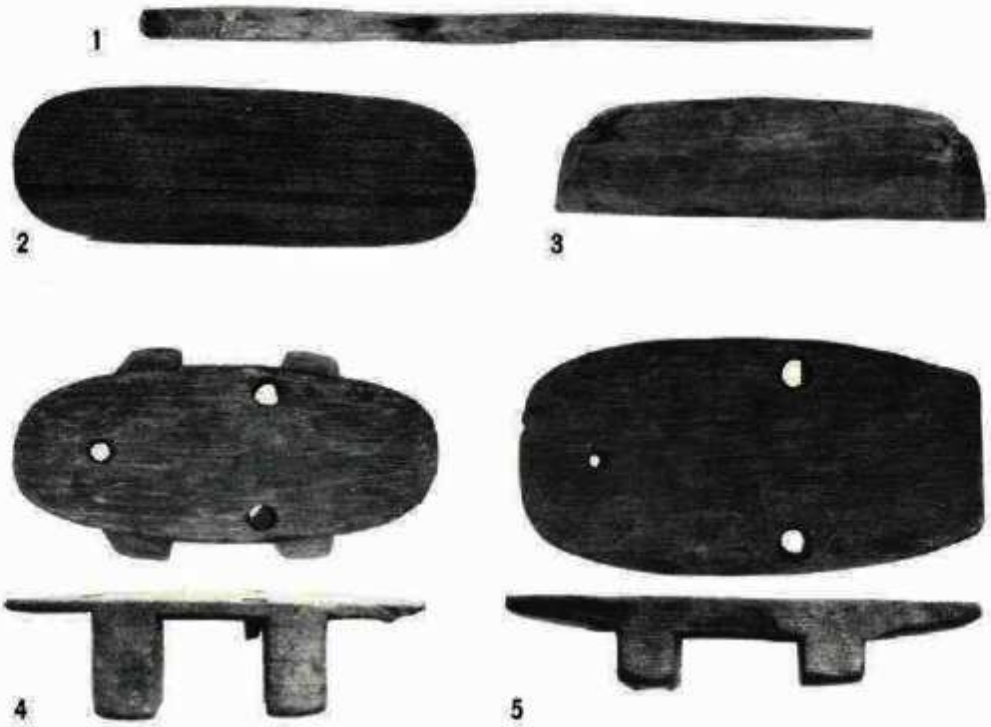
当緊急調査は工事実施中のことであり極めて不十分なものであったが、隣接する二ノ鳥居西遺跡の発掘調査報告書が近く刊行される予定であり参照されたい。

調査協力者

斎木秀雄、谷川章雄、下平和則、池田大輔、山城永津子

2号面上遺物出土状況

1～8 青磁
9 舶載銚子
10組合せ下駄



1 箸状木製品 2，3 曲物底 4，5 下駄 ½

30 多宝律寺跡

昭和52年3月11日～25日

扇ヶ谷二丁目268番3

発掘調査団

「多宝律寺遺跡第7次発掘調査報告書」鎌倉市教育委員会 昭和52年3月 参照

昭和52年度の概観

52年度は調査件数が前年度に比べ３倍以上と、急激に増加した。これは、開発事業計画との協議調整システムが確立されてくるに従い、試掘調査の先行実施方式が定着化したことに先ず第１の原因がある。52年度は試掘だけで14件を数えた。次に、民間事業計画に伴う緊急事前調査の増加が第２の理由である。この中には、試掘の結果を踏まえて本調査に移行したものが３件、四囲の状況から直接本調査を実施したケースが２件ある。

以上の傾向に反し、工事中に遺構、遺物が発見されて緊急調査が行われたのは、由比が浜の人骨出土例１件だけであった。

このように52年度は、昭和46年度に文化財保護係が教育委員会内に設置されて以降、試行錯誤を繰り返しつつ模索されてきた文化財保護と開発事業との協議調整関係がようやく軌道に乗り始め、いわば第１段階から第２段階に移行した年度として位置づけられる。

だがそれは、必然的に増加する調査件数に対する、調査体制の整備、事業者負担、資料の整理公開等々の新たな対応課題の解決を求められ出した年度でもあった。

31　浄妙寺境内

昭和52年５月14日～15日

浄明寺字向小路78番

発掘調査団

臨済宗稲荷山浄妙寺の庫裡増築計画（史跡現状変更行為）に伴う、事前発掘調査である。調査対象地は本堂東側、旧庫裡に東接する個所で、２×５ｍトレンチを設定して行われた。調査の性格上、発掘深度は基礎掘削計画を大幅に超えず地表下約50cmに止めた。調査の結果、黒色土中に土丹小塊を混入させた版築面を検出したものの、柱穴等の建築遺構の所在を示唆する兆候は無く、また出土遺物も中世かわらけ破片と共にガラス片等の近代遺物も採集された。版築面には、可なりの火力を受けた如く赤褐色に変色した部分が認められる。寺伝等により関東大震災当時の名残りと推定され、従って庫裡増築によっても現状史跡に対する否定的な影響はないものと判断された。

なお、版築面から下層についてはボーリング探査を実施したが特段の遺構面を把握することはできなかった。

調査担当者

斎木秀雄

調査員

長谷川健雄、斎木明美、下平和則

トレンチ全景

32　宇津宮辻子幕府跡

昭和52年5月16日

小町二丁目354番2

鎌倉市教育委員会

国指定史跡若宮大路沿いのビル改築計画に伴なう試掘調査である。調査対象地は若宮大路に面した、雪ノ下教会北側の旧東京瓦斯事務所周辺で2×4のテストピットを3ヶ所設けて実施された。調査の結果、若宮大路側のテストピットでは、地表下約1m、部分的には約1.5m計り掘り下げたが、青灰色粘土層の部厚い堆積が続き最下層部で土丹小塊層に相当する。青灰色粘土層中からは明治、大正期から昭和初期に掛けての陶磁器、ガラス製品、鉄製品等が出土した。下層の土丹小塊層に至ってようやくかわらけ、常滑焼等の破片の出土を見るが、何れも断面が磨耗している。同層から下は、夥しい出水のため調査の続行は不可能であったが、ボーリング探査によっても明確な遺構面には相当しなかった。東側に設定した2ヶ所のテストピットでも表土層下に青灰色粘土層が堆積する。同層中には木杭と板材とを用いた土留施設状の遺構が検出されたが、出土遺物から推して何れも近代の所業と判断される。青灰色粘土層は若宮大路側のテストピットに比べ更に深く堆積し、地表下約180cmを計る。下層には黄褐色砂層が堆積し巻貝等の自然遺物が採集されるが、かわらけ等の中世遺物は極めて僅少であった。黄褐色砂層は、この付近では鎌倉郵便局他の調査でも中世地山層下に位置し、同層に至れば人為的遺構は無いものと現在判断されている。史跡若宮大路沿いのこの個所に何ら顕著な中世遺構を検出し得ないのも一見奇妙な事実であると当時は考えられた。けれども全体的な地形を観察すると、本調査地の東側は約1～1.5m程のの比高をもって一段高くなり、更に二ノ鳥居周辺の郵便局舎付近から本調査地北側に掛けての一帯に同様の傾向をみることができる。これに近似した地形的特徴は若宮大路西側にも部分的に認められ、低段地で一部行われた試掘結果でも中世遺構を検出し得なかった。(註1)

以上の若宮大路二ノ鳥居周辺に現出する中世遺構の「空白地域」については、高段地の削平に因るものか、或いは若宮大路の旧幅員に起因するか、種々考察されるが暫らく後考に待ちたい。

調査協力者

長谷川健雄、下平和則

註1　No.34　二ノ鳥居西遺跡　参照

トレンチ試掘風景

1～4近世近代遺物 5常滑 6，7かわらけ ½

33　藤内定員邸跡

昭和52年6月15日

小町一丁目309番4

鎌倉市教育委員会

藤内定員邸跡と伝承される地域は、若宮大路に面した鎌倉警察署から中央公民館に掛けての範囲に及ぶ。その一部、国鉄鎌倉駅東口正面道路に向い合った個所にビル建設が計画されたため試掘調査が実施された。調査は既存建物の間隙を選び2×1mのトレンチを設定し行われた。地表下約80cmで暗褐色土層中に土丹を混在させた版築面が検出され、かわらけ、常滑焼、青磁等の破片が採集された。版築面は東から西に掛けて傾斜し、その斜面上に厚さ2cm程の板材がL字状に立っていた。この試掘調査によって中世遺構の存在が確認され、昭和54年3月本調査が実施される運びとなったのである。

本調査の詳細については近く調査団による報告書が刊行される予定である。

調査協力者

斎木秀雄、下平和則

試掘トレンチ内版築面

34　二ノ鳥居西遺跡

昭和52年７月13日～14日（試掘）

昭和52年９月22日～10月31日（本調査）

小町一丁目66番３他

鎌倉市教育委員会（試掘）

発掘調査団（本調査）

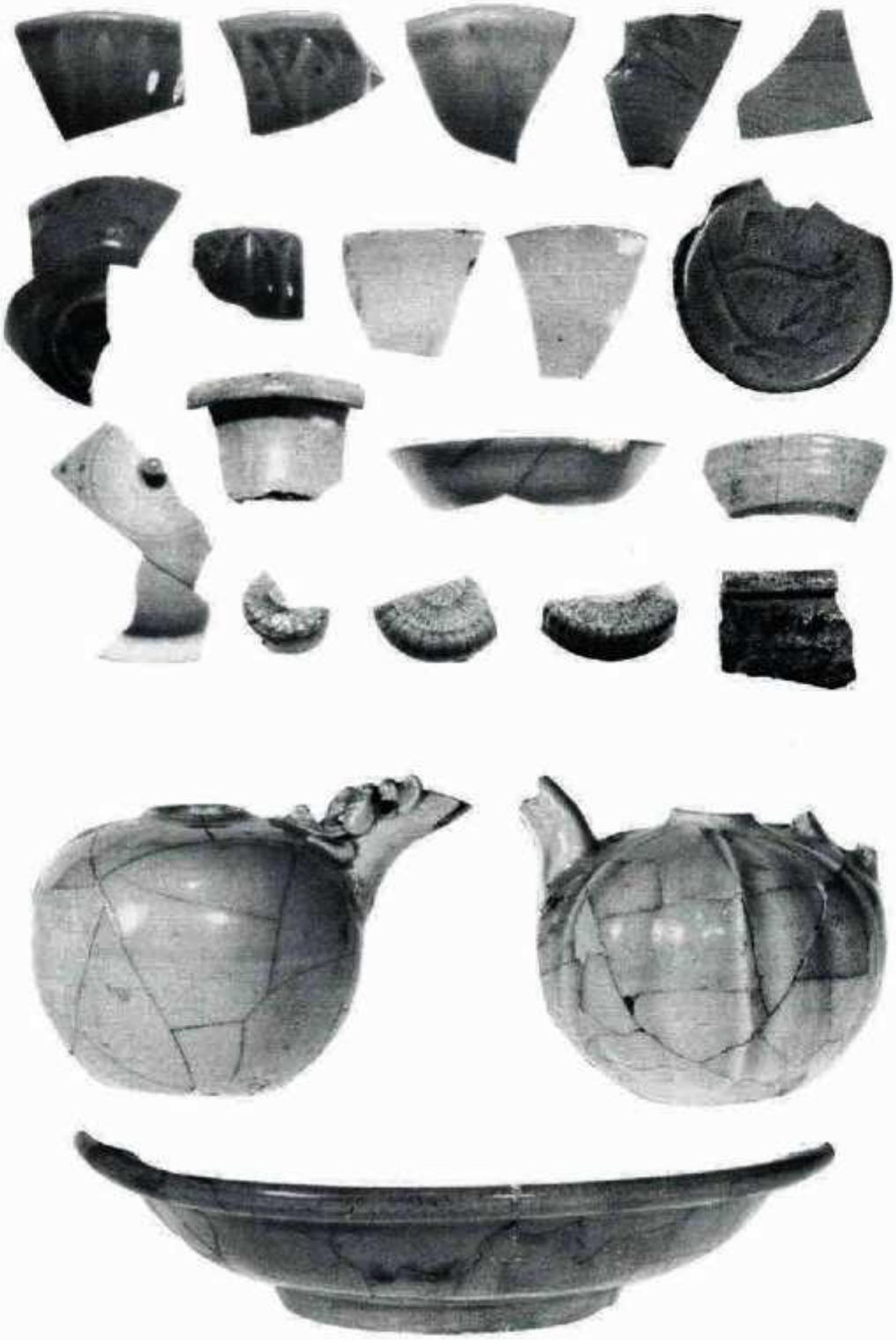
当遺跡は若宮大路二ノ鳥居西側の旧鎌倉消防署跡地に所在する。同地にビル建設が計画されたため、まず試掘調査が実施された。調査は建築予定地中軸線に沿って２×38mトレンチを東西に設定して行われた。トレンチを地表下約60cm程掘り下げた段階で中世地山層に相当する黄褐色砂層が東側部分に表出した。同層の確認範囲は歩道敷際から西に約24mに及ぶ。その地点から西側は黄褐色砂層が急傾斜状態で落ち込み、そこに黒色土層が堆積する。同層上には大量の中世遺物が散布し、更に一部テストピットを設け探査した結果可なり濃厚な遺物包含密度が確認された。この結果、建設予定地内の発掘区を敷地西側の15×11.5m範囲と定め、本調査実施へと推移したのである。同調査は鎌倉の市街地遺跡に対する最初の本格的発掘調査であった。その詳細は近く発掘調査団から報告書が刊行される予定なので参照されたい。

調査協力者（試掘）

斎木秀雄、下平和則、池田大輔

溝状遺構全景（本調査）

かわらけ溜り



船載陶磁器類　　½

35　北条氏常盤亭跡

昭和52年８月12日（試掘）

昭和52年11月20日～53年１月11日（本調査）

常盤字御所之内772番１

鎌倉市教育委員会（試掘）

発掘調査団（本調査）

常盤亭跡は大仏坂切通北方の山稜内に位置する要衝である。新編相模国風土記稿、新編鎌倉志等に北条政村邸跡として記され、近くは神奈川県教育委員会によって地形測量調査が行われた。(註1) 偶々同遺跡の一支谷、御所之内と呼称される個所で宅地造成工事が計画され、それに対応して市教委による試掘調査、更に三上次男博士を団長とする発掘調査団による本調査が実施された。御所之内支谷は南に開口し、三段に亘る階段状を呈するが、工事が計画されたのは最下段の約1180㎡程の平担地である。試掘調査は同平担地に２×２ｍ程のテストピットを６ヶ所設けて行われた。その結果、平担地を南北に二分して、北側には全く遺構が検出されなかったが、南側で土丹を用いた版築面が発見され、直ちに本調査の必要性が指摘されたのである。

本調査結果の詳細については、近く調査団から報告書が刊行される予定だが、本調査の概要報告が提出されているのでそれを次に引用する。なお当調査実施後、御所之内周辺一帯が昭和53年12月19日付で国指定史跡に指定された。

本調査実施概要（発掘調査団）

１　調査区の設定

調査区は、排土の量、隣接住居への影響、試掘調査の結果等を考慮し、中央部に南北14ｍ、東西15ｍの範囲に設定した。発掘区は３ｍ四方に地区割し東西方向に西からＡ～Ｈ、南北方向に北から１～５の名称をつけ、グリッド名は両者を組合わせて使用した。トレンチは、遺構の検出状況に応じて任意に設定した。尚、東西方向の両端は遺構の検出で拡張を行った為、中途半端な数値となった。

２　遺構・遺物の検出概況

調査は、地表下１ｍまでの土を機械により除去することから開始し、地表面から1.6ｍの深さまで行った。

この間には、人為的な版築面を含む土層が幾層も重なり、この地点が鎌倉時代を通じて生活の

場となっていたことが明らかになった。人為的な版築面は３枚確認した(上方より１・２・３各版築築面とした)。各土層は、谷の出口に向かって多少傾斜するのみで、ほぼ南北・東西方向に水平を保っており、谷の出口付近に石垣などの構築物が想定される。

遺構は各版築面より、礎石、溝などが確認された。東西両端の山裾部では、削平岩盤面上に溝・柱穴・井戸等が確認された。

建物は、礎石を伴うもの、伴わないものなどが見られた。前者は版築面上に、後者は削平岩盤面上に確認された。しかし、谷全体面積の約３分の１という狭い調査範囲であった為、建築遺構等の全体規模を明らかにすることはできなかった。

石組遺構は２基検出した。これらの石組遺構は第一版築面を掘り込んで構築されており、最も新しい遺構である。

遺物は、土器・石製品をはじめ、多種多様のものが見られた。各土層は整然と堆積しており、各版築面の遺物を層位的に把握することができた。

土器、陶磁器類では、土師質土器（かわらけ）が最も多く、次いで常滑、手あぶり、こね鉢が多く、中国製磁器は少量であった。

土器類以外では、鉄釘・硯片・銅銭を除くと出土量は少なかったが、滑石製印判・金銅製水滴・骨製サイコロなど、特色ある遺物が多く見られた。しかし、瓦は１片も検出されなかった。

〔検出遺構〕

１　建物

各版築面より建築遺構が確認されたが、調査面積が限られた範囲であった為、全体規模を明確にしたものはなかった。

Ⅰ　第１版築面

調査区東端山裾部で検出した建物である。柱穴はなく、長径35～40cmで上面の平らな礎石（安山岩）が２個残っていた。各礎石の高低差は殆どなく、柱間はおよそ2.1ｍ（７尺）である。この建物は、東側の山裾に埋没していると考えられる。

Ⅱ　第２版築面

調査区東端山裾部で検出した建物である。上面の平らな礎石が２個残っていた。各礎石の高低差は殆どなく、柱間はおよそ1.6ｍ（約５尺）である。

この他、礎石、鎌倉石などが検出されたが建物としてまとめることはできなかった。

Ⅲ　第３版築面

調査区中央より南部分で検出した建物である。長径35～50cmの上面の平らな礎石を使用している。各礎石は、長径50～70cmの掘り込みに据えられており、版築面より５～10cm低くなっている。東西５間、南北３間を確認した。更に南の調査区外へ延びている。礎石は３石不足するが２石分

については掘り込みが検出されなかった。

更に、柱穴、溝を検出したが、建築遺構全体として把握できなかった為、関係は不明である。これらの遺構とは、削平岩盤上の溝が時期を同じくする。この他、土丹塊を長径70cm、短径60cm、深さ10cmの皿状に加工した特異遺物も発見された。

2　削平岩盤上の遺構

東西の削平岩盤上からは、柱穴、溝、井戸などが確認されたが、調査区域外へ延びるものや、上部の遺構に埋められたものが多く、全体の形の検出できたものはなかった。溝は、第3版築面に埋められている。

調査協力者（試掘）

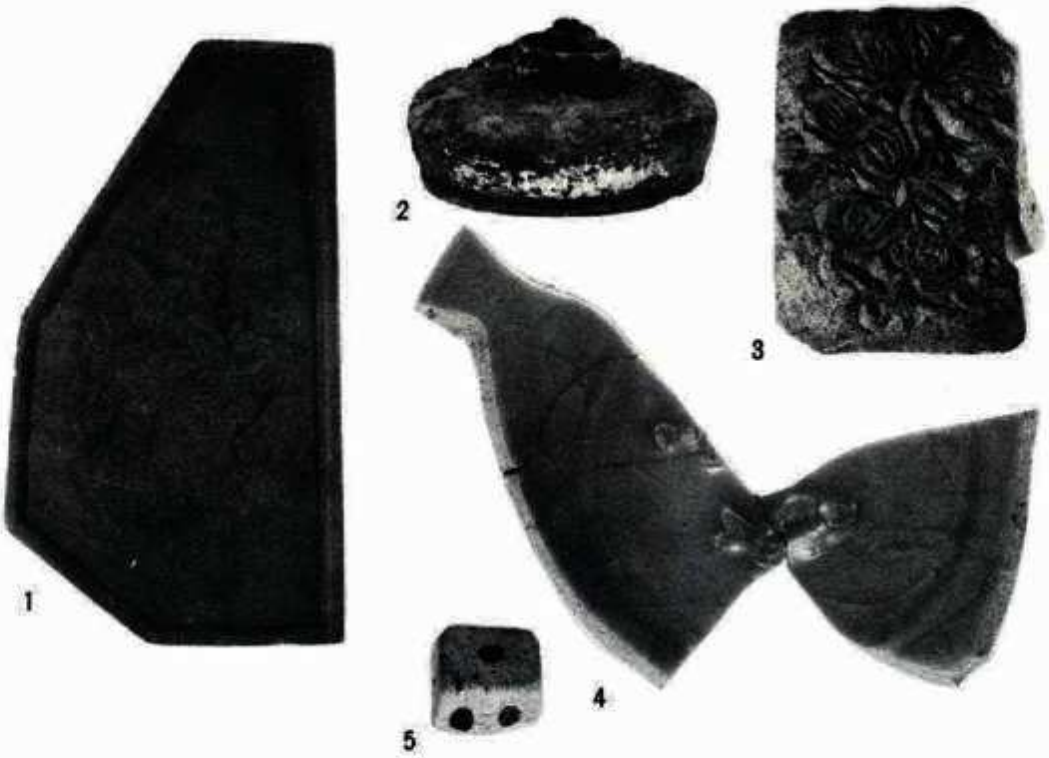
斎木秀雄、下平和則、池田大輔、斎木明美

註1　「北条政村の常盤別業について　奥田直栄」　神奈川県文化財調査報告書第34集　昭和47年3月

試掘トレンチ内遺物出土状況

建築遺構全景

岩盤上大溝



1硯 2金銅製水滴 3スタンプ様滑石製品 4青磁皿 5数子（1/1） ½

36 本覚寺境内

昭和52年8月9日～10日（試掘）

昭和52年11月5日～30日（本調査）

小町一丁目302番

鎌倉市教育委員会（試掘）

発掘調査団（本調査）

日蓮宗妙厳山本覚寺の夷堂建設計画に伴う事前調査である。調査対象地は本覚寺仁王門北側、小町大路に東面した境内北東隅付近で嘉永三年（1850）の本覚寺境内図（註1）には畑として記された個所である。試掘調査は建設予定地に1.5×15m トレンチを予定建物の軸線に合せて十文字形に設定して行われた。トレンチを約60cm程掘り下げると瓦、常滑焼、古瀬戸焼、かわらけ、青磁等を包含する土丹塊混りの暗褐色土層に相当する。同層上面は、部分的に版築を施された形跡が認められるが全体的にはやや脆弱である。また南北トレンチ南端付近で大型土丹塊や凝灰岩切石破片

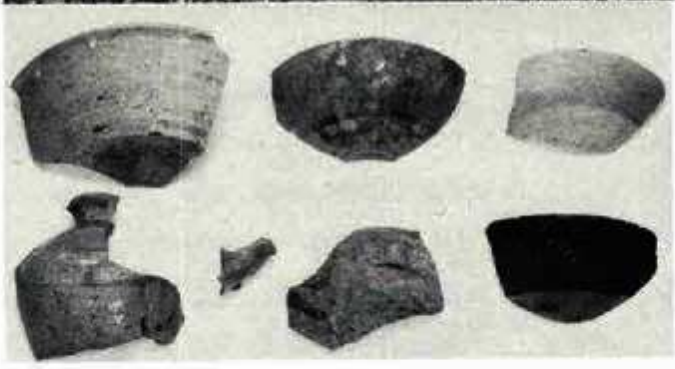
等が集積した個所が検出された。ここを精査した結果、小町大路と略々併行して東西に走行する凝灰岩切石を用いた石垣状遺構が確認された。これは本調査の結果判明した石垣遺構(写真参照)の一部であった。本調査の詳細については、刊行予定の調査報告書を参照されたい。

調査協力者（試掘）

大三輪龍彦、斎木秀雄、下平和則、池田大輔、斎木明美

註1　「鎌倉の古絵図（2）－鎌倉国宝館図録第16集 －」鎌倉市教育委員会鎌倉国宝館　昭和44年3月

石垣遺構



瀬戸産遺物

37　瑞泉寺境内

昭和52年８月

二階堂字紅葉ヶ谷710番

発掘調査団

臨済宗錦屏山瑞泉寺の本堂改築及び庫裡増築計画に伴う試掘調査である。調査対象地は旧本堂前の方丈中庭及び、庫裡南側通路部分。本堂前では２×５ｍトレンチを設定し、基礎掘削予定深度に合せて地表下約60cmまで掘り下げた。その結果、土丹小塊を用いた版築面上に礎石様の凝灰岩切石４個を検出したが伴出遺物に近代所産品が多く含まれ、また寺伝等からもこれは大正十一年の関東大震災によって倒壊した旧庫裡基礎施設の一部と判断される。同版築面下層はボーリング探査等によっても、少くとも地表下1.6ｍまでは特段の遺構には相当し得なかった。本堂背後の国指定名勝瑞泉寺庭園は岩盤を人為的に削平、造作して池を中心とした庭園を形成するが、本堂を挟んだ位置に設定したトレンチ内には全く岩盤面は検出されなかった。周辺のボーリング探査を実施したところ、庭園から西に広がる岩盤面は本堂中程で途切れ急激に落ち込む形状が窺われた。その後、昭和57年に行った本堂改築工事に際した立会調査によっても岩盤段差の所在が確認され、庭園から西方向に階段上の旧地形を呈する事実が判明したのである。

庫裡南側のトレンチに於ても、矢張り関東大震災時の木炭面が検出されたものの下層に中世遺構面は確認し得なかった。

調査担当者

斎木秀雄

調査員

下平和則、池田大輔、斎木明美

38　材木座中世集団墓地遺跡

昭和52年10月

由比ガ浜四丁目1181番他

鎌倉市教育委員会

材木座中世集団墓地遺跡は滑川河口から西に向って大きく広がる。本稿は同遺跡の西半部のテ

ニスコート造成地内で行われた防火水槽埋設工事による、人骨出土例の紹介である。

人骨出土の報が市教委に寄せられた時点では既に掘削工事は半ば以上進行していたため、十分な調査は行えず人骨出土層位の確認と採集に止まらずを得なかった。調査地周辺は嘗ての砂丘を削平した所であり、人骨出土地点上を白色砂層が約120cm覆い被さる。出土層は白色砂層中に存する40～50cm程の木炭混り黒色砂層で、同層中からは人骨の他にかわらけ、常滑焼等の破片が若干量伴出した。出土人骨の殆どは成人頭骨で四肢骨等は極めて少ない。採集し得た頭骨は下顎骨も含めて約12～3体を数える。調査に供する時間的余裕が僅少な中で出土層位を検討したところ、人骨を包含する黒色砂層は白色砂層中に掘り込まれた幅約1mの溝状の落ち込みの覆土で、その調査区内で計る長さは約5m程であった。遺構の全容は不明だが、溝状の掘り込み中に頭骨を中心とした遺骸を埋納したものと考えられ、正常な形態の埋葬墓とは云えない。伴出遺物のかわらけは小破片のみであるが、部厚い器壁を示すものが多い。なお出土人骨は現在、聖マリアンナ医科大学に寄託し森本岩太郎教授の鑑定を待つところである。

人骨出土状況

39　若宮幕府跡

昭和52年10月24日～25日

雪ノ下一丁目432番2

鎌倉市教育委員会

伝若宮幕府跡の小町大路に面した地点でビル建設が計画され、試掘調査が実施された。予定地内の既存建物を避けた位置に1.5×4ｍトレンチを設定する。地表下約60cmまでは大型土丹を用いた埋土層で、その下に旧表土層及び土丹小塊層が50cm程堆積する。埋土層からは、昭和初期の徳利破片やガラス製品等が出土し、下層からは近世灯明皿、染付皿の破片などが採集された。土丹小塊層の下は湿地状の黒色土が堆積しかわらけなどが包含されるが、出水のため遺構面の把握は困難であった。黒色土層を掘り進め地表下160cmに達した段階でトレンチ東端側で板状木材が検出された。木材は幅15cm、厚さ1.5cmで、小町大路に略々併行して南北に据えられている。検出範囲での長さは約40cmで、ボーリング探査に依れば更に両側に延びている。木材には幅4.5cm、長さ15cmの柄穴らしき穴が穿れていた。木材の据えられた面は、黒色土中に土丹小塊を混入した状態でやや軟弱ではあるが版築地形面と考えられる。木材の形状は鶴岡八幡宮武徳殿建設予定地内で発見された、木柵基礎遺構[註1]と酷似し小町大路沿いの木柵の存在を示唆するものかも知れない。現小町大路際から木材までは約2ｍの間隔があった。トレンチ内では木材から西に版築面は続くものの、顕著な遺構は検出し得なかった。出土遺物から推して版築面は13世紀末から14世紀中半に比定し得ると思われる。

なお、本調査についてはビル建設計画が中止されたため実施されなかった。

調査協力者

長谷川健雄

註1　「鶴岡八幡宮発掘の記録」鶴岡八幡宮発掘調査団　昭和55年10月

木材出土状況

40　極楽寺旧境内

昭和52年11月27日～12月28日

極楽寺三丁目1022番2

発掘調査団（試掘）

「極楽寺旧境内遺跡発掘報告書」鎌倉市教育委員会　昭和55年3月

41　小町二丁目281番所在遺跡

昭和52年12月25日～27日

小町二丁目281番

鎌倉市教育委員会

ビル建設計画に伴う試掘調査である。調査地は若宮大路段葛西側、前掲宇津宮辻子幕府跡調査地と略々向い合った個所で、ここも同所と同様に若宮大路側の低段地内に所在する。試掘のためのテストピットは、約18mの建設予定地東西軸線に沿って3ヶ所設定した。これを東から第1、2、3テストピットと呼称する。

第1テストピットは若宮大路歩道敷際に2.1×1.0m範囲に設置した。(以下前段数字を東西線とする。)層位は極めて単純で表土層直下に暗褐色土層が約1m程堆積し、その下層は中世地山層下の黄褐色砂層となる。トレンチ東側の若宮大路側で黄褐色砂層が、西側に比し約20cm程高まるが遺構的特徴を示すものではない。暗褐色土層中からは明治～大正期に属する瓦が出土する。

第2テストピットは建設予定地の中央部に設けたもので2.9×1.2m範囲である。表土直下の暗褐色土層は40cm程堆積し、下は黄褐色砂質層。なおテストピット南壁側に土管組井戸が検出された。井戸は暗褐色土層中から掘り込まれ、上面には瓦が堆積する。関東大震災頃迄使用していたものと聞く。

第3テストピットは建設予定地の西側にみられる高段地に近接した個所に設けた。予定地と高段地との比高は約1.2m程ある。テストピット内は表土直下の暗褐色土層が約70cm堆積し、その下は他と同様に黄褐色砂層となる。出土遺物は近代瓦などであった。

以上の様に当調査地に於ては中世遺構を何ら検出し得ずに終ったが、前掲の宇津宮辻子幕府跡、或いは二ノ鳥居西遺跡東側部分と同様に若宮大路に面した低段地部分に遺構の存在しないのは大変興味深い事実である。この点について若宮大路の幅員変遷に原因を求める考察もあり(註1)、更にいくつかの調査結果を通じて現在検討が深められつつある(註2)。今後の調査結究の進展を期待したい。

調査協力者

宮田　真

註1　「鎌倉の町・都市の雑居生活　大三輪龍彦」　地方文化の日本史第3巻－鎌倉武士西へ－　文一総合出版　昭和53年6月

註2　「中世鎌倉の街遺構－若宮大路周辺の発掘調査から－　斎木秀雄」郷土神奈川第9号　神奈川県立文化資料館　昭和54年3月

42　光明寺境内

昭和52年12月26日～27日

材木座六丁目854番

発掘調査団

公衆便所建築計画に伴う試掘調査である。調査地は浄土宗天照山蓮華院光明寺総門の東脇。調査は二本のトレンチを建築予定地北西及び南東側に併行設定して行われた。南東側トレンチは4.3×0.6m範囲で、基礎掘削予定深度に合せて地表下90cmまで掘り下げた。表土層下には海砂を挟んで2枚の土丹小塊混黒褐色土層が堆積するが、遺構面は検出されず明治～大正期の陶器類が出土した。またトレンチ北東側半分にゴミ穴状の攪乱孔があり近代の水甕が据えられていた。北西側トレンチは4.2×0.5m範囲で前掲トレンチ同様北東側に深いゴミ穴攪乱が見られた。南西側も同じ状況である。

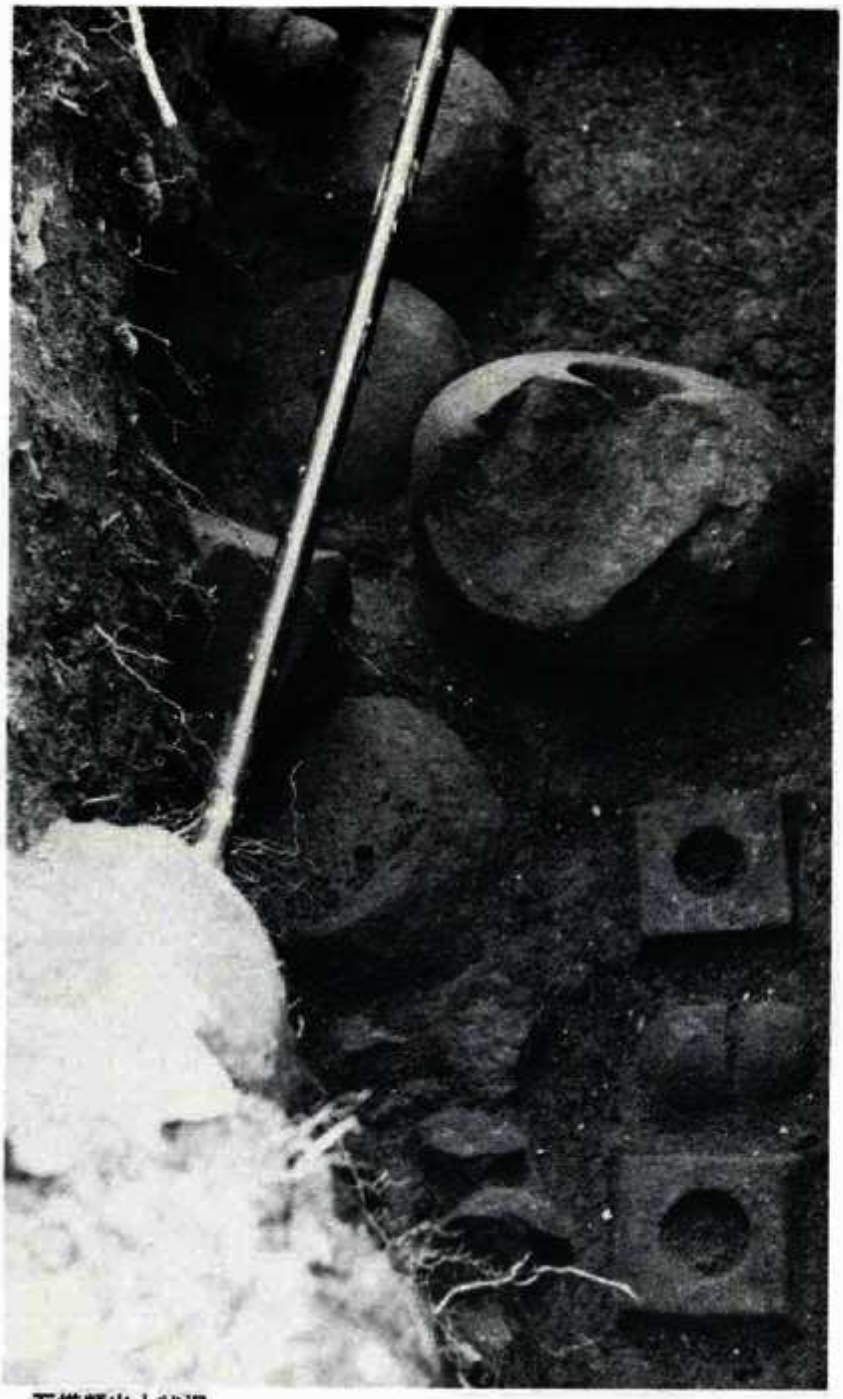
試掘調査の終了後、直ちに本体建築工事が始まり、その終了間際の昭和53年3月20日、排水管設置工事に際して多数の石塔類が出土したとの報が寄せられた。場所は便所本体南東際である。直ちに確認調査を実施したところ、試掘トレンチで検出された土丹小塊混黒褐色土層と同質層を溝状に掘り込んだ中に詰め込まれた安山岩製五輪塔、宝篋印塔の各部が検出された。検出深度は地表下約80cm。埋置された石塔類の間隙には土丹や安山岩破片を詰め上面を均している。採集された石塔類は五輪塔空風輪13個、火輪15個、水輪6個、宝篋印塔屋蓋4個、基台1個を数えた。また安山岩製花瓶が1基、石塔類に混在して発見された。花瓶は高さ25.2cm、口径18.5cmで延宝五年（1677）の記年銘が刻される。関東大震災前は、総門付近に土手があり内側（南東側）は墓地であったと聞く。検出された石塔群は震災後の復旧整地作業の名残りであろうか。なお石塔は全て境内無縁墓地内に安置された。

調査担当者

斎木秀雄

調査員

宮田　真、笠原穂高、下平和則



石塔類出土状況

43　伝安達泰盛邸跡

昭和53年１月９日～３月25日

長谷一丁目227番

発掘調査団

安達泰盛（1231～85）は鎌倉時代後期の武将で、執権北条政村、時宗、貞時の時代に政局の重鎮として大いに権勢を振るった。また弘安四年（1281）の蒙古襲来時には御恩奉行として執務し、蒙古襲来絵巻には彼の絵姿ならびに、館の情景が描れている。弘安八年（1285）余りの威勢に反発した御内人平頼綱の陰謀により、泰盛は一族郎党と共に討たれ滅亡してしまう（霜月騒動）。安達氏の館は泰盛の祖、頼朝と共に挙兵した安達盛長以来甘縄の地にありと伝えられ、その場所は長谷甘縄神明社下段一帯と目されていた。

昭和52年末に、それ迄個人の屋敷地内であった遺跡推定地中央部の広大な敷地に対して、宅地造成計画案が提出され協議の結果緊急事前発掘調査の実施が決定された。調査は大三輪龍彦氏を団長とする発掘調査団によって約２ヶ月半に亘り行われた。その詳報は調査団から刊行予定の報告書に委ねるが、当調査の結果、板塀或いは堀の土留施設と思われる木造遺構などが検出された。また褐釉壺を始めとする青磁、白磁など多くの舶載陶磁器や、漆器類等多種に亘る遺物が出土した。木造遺構については、工事施行計画を一部変更して土中保存の措置がとられている。

中央トレンチ全景

板垣状遺構

褐釉壺

⅓

褐釉壺　⅓

44　藤内定員邸跡

昭和53年１月15日～２月15日

小町一丁目319番２

発掘調査団

前掲の同遺跡内調査地（№33）から約40ｍ北側の個所にビル建設が予定されたために、実施された緊急事前発掘調査である。調査は斎木秀雄氏を団長とする発掘調査団によって行われた。

その詳報は近く刊行予定の調査報告書に委ねるが、いくつかの注目すべき諸点について紹介したい。

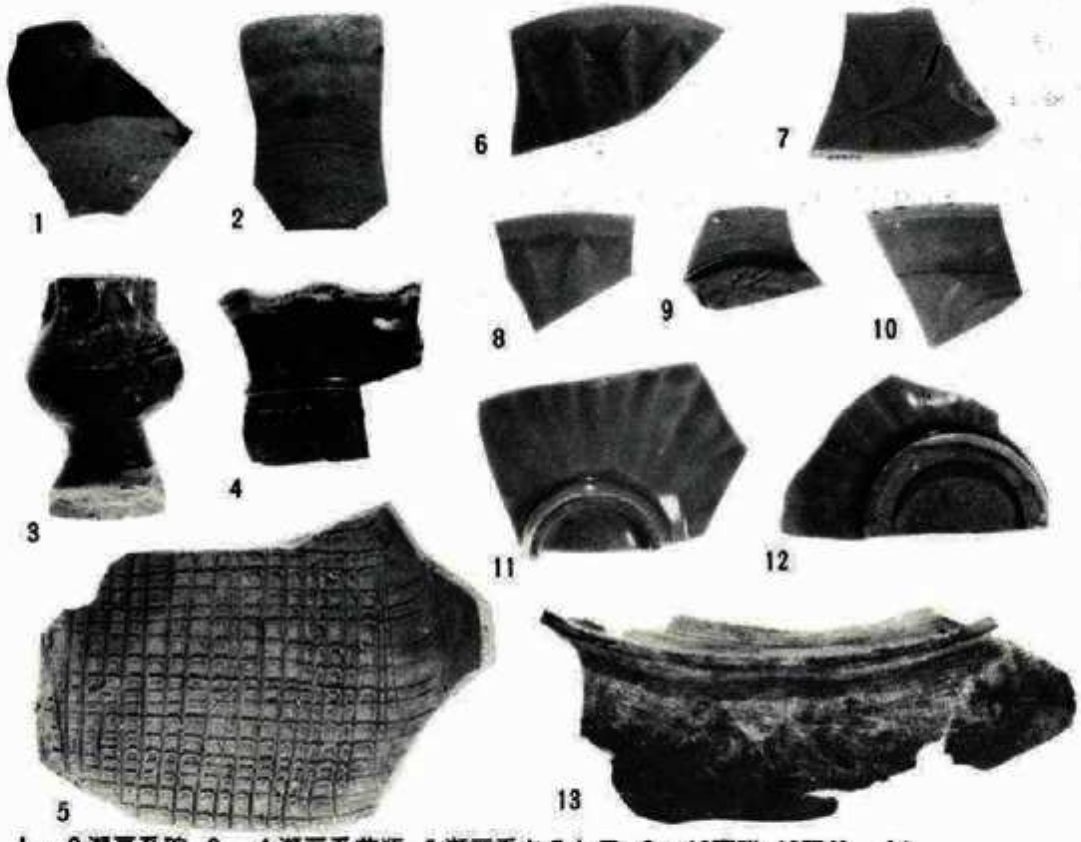
まず15世紀中半から16世紀に掛けての時期に属すると思われる埋葬人骨の発見である。実は本調査に続いてその後実施された周辺の発掘調査でも埋葬人骨は数多く発見されているが、当時はよもや若宮大路沿いの場所が墓地として使用されたとは考えてもいなかったので、全く予想外の事実発見として受け止められたのである。人骨は発掘区中央部の土丹敷遺構面上と、西側の若宮大路に近接した個所から各々発見された。土丹敷上の人骨は頭骨のみで、四肢骨他は土丹敷作業によって消滅されたと考えられる。西側の人骨は長円形墓壙内に仰臥屈葬位で埋葬された成人骨で、上半身部から獣骨を管状或いは板状に整形した副葬品が発見された。

次に主要な中世遺構としては発掘区を東西に走行する溝状遺構があげられる。遺構は幅約２ｍ、深さ約１ｍで、中世地山層の暗褐色粘質土層を掘り込んで約20ｍに亘り構築されていた。またその方向は、若宮大路に対して直交せずに、南30度程斜行して交っている。溝状遺構の年代は13世紀中半頃と考えられ、鎌倉時代の「区割」を示唆する重要な資料であろう。また同遺構に沿って南側に通路状の土丹版築面が検出された。

主な出土遺物は、多量の舶載陶磁器類の他、鉄釉及び瀬戸の仏花瓶や、伊勢系土鍋等が挙げられる。

埋葬人骨

発掘区全景



1，2瀬戸系碗 3，4瀬戸系花瓶 5瀬戸系おろし皿 6～12青磁 13羽釜 ½

45　安国論寺境内

昭和53年１月26日～２月４日

大町四丁目1947番

鎌倉市教育委員会

日蓮宗妙法山安国論寺の本堂増築計画に伴う試掘調査である。調査場所は本堂裏（東）側の空地で、本堂東西中軸線延長上に４×1.5ｍトレンチを設定して行われた。

地表下約60cmまでは木炭、瓦などが厚く堆積する。旧本堂は関東大震災時に倒壊したとのことで、その際の整地層と判断される。この下には土丹層が堆積するが人為的な地形版築層とは認められない。同層中にはかわらけ、常滑焼などの破片が包含されるが、流れ込みによる混入物と判断される。地表下160cm程掘り下げた段階で、トレンチ北東側に西方に傾斜する岩盤面が検出されたが、人為的な削平の痕跡はなく自然地形に依るものと考えられる。なおトレンチ東端から東方の山裾部迄は約７～８ｍ離れている。

岩盤裾部付近の黒色粘質土層上面を精査したところ、地表下約２ｍの地点で馬骨頭部及び前脚と思われる骨を検出した。骨は岩盤裾に沿って出土したが特に土壙などの埋葬施設は認められず、投棄されたものであろう。この下層は粘質黄褐色の地山層となる。馬骨上を覆う黒色土層は自然堆積層と思われ、小量のかわらけ、木炭等が包含されている。出土遺物は戦国期頃に比定されるが、試掘調査全般の経過からみても、当該場所付近には何らかの遺構の存在を示す兆候は皆無であった。

岩盤面露呈状況

馬骨出土状況

46　円覚寺境内(明香池)

昭和53年２月20日～３月11日

山ノ内字瑞鹿山438番

発掘調査団

1　調査経過

この調査は、円覚寺より委託を受けた大三輪龍彦氏が、妙香池改修工事と平行して確認調査を実施したものである。調査は池の南・北・西面の石垣の撤去作業後に、南北両面に沿って二本のトレンチを設定して行なった。

各トレンチは、方位に基づき、仮に南・北側トレンチと命名した。南側トレンチは幅２ｍで設定したが、立木等の都合から幅２～２.5ｍとなり、東側・中央部・西側の三ヶ所に分断される形になった。東側では、修理前の石垣の後方に於いては特に石列等、汀線と考えられるものは検出されなかった。しかし、東端・東面の石垣付近では三本の松の立杭が検出された。杭は各々南へ傾斜しており、その間隔は 1.2ｍ、1.9 ｍであった。西端には修理前の石列の南方 0.7ｍに幅0.８ｍの石塊の集中している部分があった。この石塊の集中している部分からは、蓮弁文青磁洗・古瀬戸おろし皿が出土し、中世後期以降の製品は出土しなかった。トレンチ東側では修理対象の石垣の裏ごめの土は黒褐色の粘質土であり、中央部・西側とは様相を異にしていた。トレンチ中央部、及び西側では修理対象の石垣の裏側に接して砂岩切石列が検出された。

この切石列の南側に、約 0.4ｍ離れてやや不規則な配列の砂岩石列が存在し、両石列間には不規則であるが、二列の松の杭列が存在した。この杭列部分からは江戸期の備前焼すり鉢が出土した。更に、この後方には砂岩切石の崩れに岩塊列が二列存在した。これらの埋土は東側とは異なり、厚さ３～20cmの竪い版築層が10数枚堆積していた。トレンチ中央部では、これら三列の石列の後方に石列の有無を確認する為、修理対象の石列から４ｍ奥まで発掘したが、特に変化は認められず、版築層が存在するのみであった。

北側トレンチでは、修理対象の石垣に沿って幅２ｍのトレンチを池の中に設定した。石垣を除去したところ、下端の石の下から厚さ６cm程の松板が検出された。この松板は池の西面及び北面の西側約３分の１程の所まで存在した。この部分の石垣の裏側及び下には黒褐色の粘質土が存在し、石垣の裏側にはすき間なく松杭が打込まれていた。その黒褐色粘質土の下には青灰色砂質の版築層が存在し、その中からは江戸期の常滑や土器が出土した。この版築層を除去したところ、修理対象の石垣と交わるような形で南西にふれた状態で切石列が存在した。この切石は他の石とは異り、灰白色の凝灰岩であった。又、岩盤と接する部分の石垣は、修理対象の石垣とは石の大

きさ、積み方が異なっていた。又、その前面には切石が崩れたような状態で積み重なっていた。

この為、前面の集石を除去した後、石垣の前面を修理前の池底より 1.2mの深さまで発掘したが、石垣の下端に至る事はできなかった。

2　遺物について

調査の際に出土した遺物はあまり多くない。その殆どが土器であり、特に江戸期のものが顕著であった。層位的には不明のもの、江戸期のものと共存したものが多いが、中国製の良質の白磁鉢片が数点検出され、柿天目茶碗や青磁香炉の破片も検出されている。又、褐釉炻器片（壺・甕）も数点検出され、鎌倉中の他の遺跡と比較して特異である。国産品では、古瀬戸印花文飴釉陶片（壺か？）・同無文大形蓋（広口壺の蓋か？）・灰釉瓶子底部・飴釉水注・天目茶碗・灰釉碗・緑釉小皿・おろし皿・「大日大□（月か？）」押捺の常滑片・手あぶり、剣頭文瓦等が出土したがいずれも点数は少ない。

全体として出土量が少ない割には良品が多く、中国製では元・明との貿易を推察させる資料が多い。国産品でも鎌倉時代のほか、室町・戦国時代の資料も検出され、鎌倉の中では特異な出土状況を示している。

3　まとめ

今回の調査によって、池の南面では修理対象の石垣の裏側に三列の汀線と考えられる集石が存在することが確かめられた。北面では修理対象の石垣の下に一列、岩盤露出部との間に一列の計二列が確認された。又、修理対象の北面西端・西面の石垣と南面の石垣とは構造が異っている。

この為、確認できただけでも五ないし六回の改修が行なわれており、そのうち二回は江戸期のものである。又、汀線と考えられる集石が直線的であることから、これらの改修時には池の形が方形であったと推測される。しかし、池の造成時の汀線まで調査範囲が及ばず、造成当初の妙香池の形状は依然として不明である。今後の検討を待ちたい。

調査団長

大三輪龍彦

調査員

長谷川健雄　下平和則

調査補助員

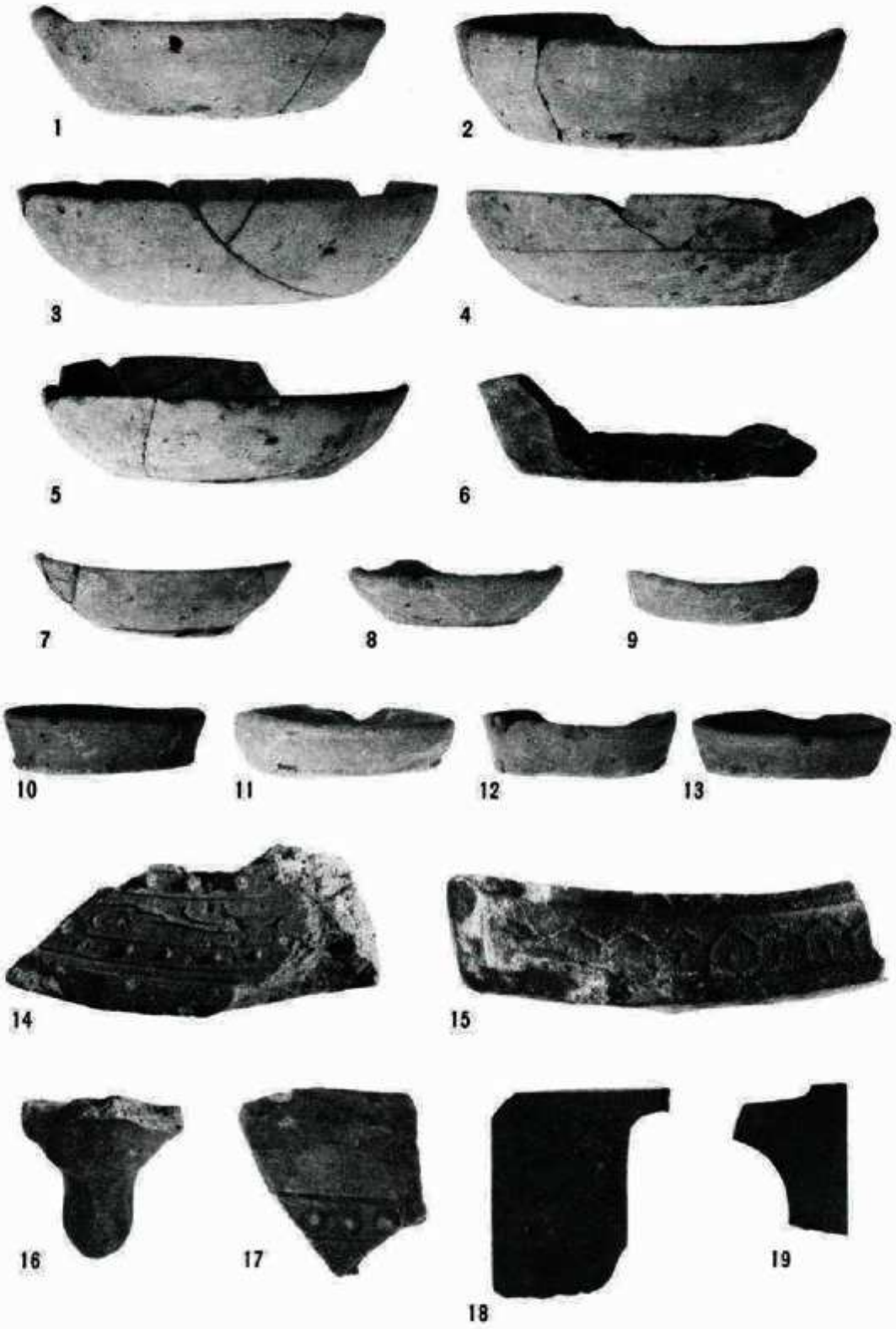
下平容子　山城永津子　杉山裕美

北側トレンチ全景

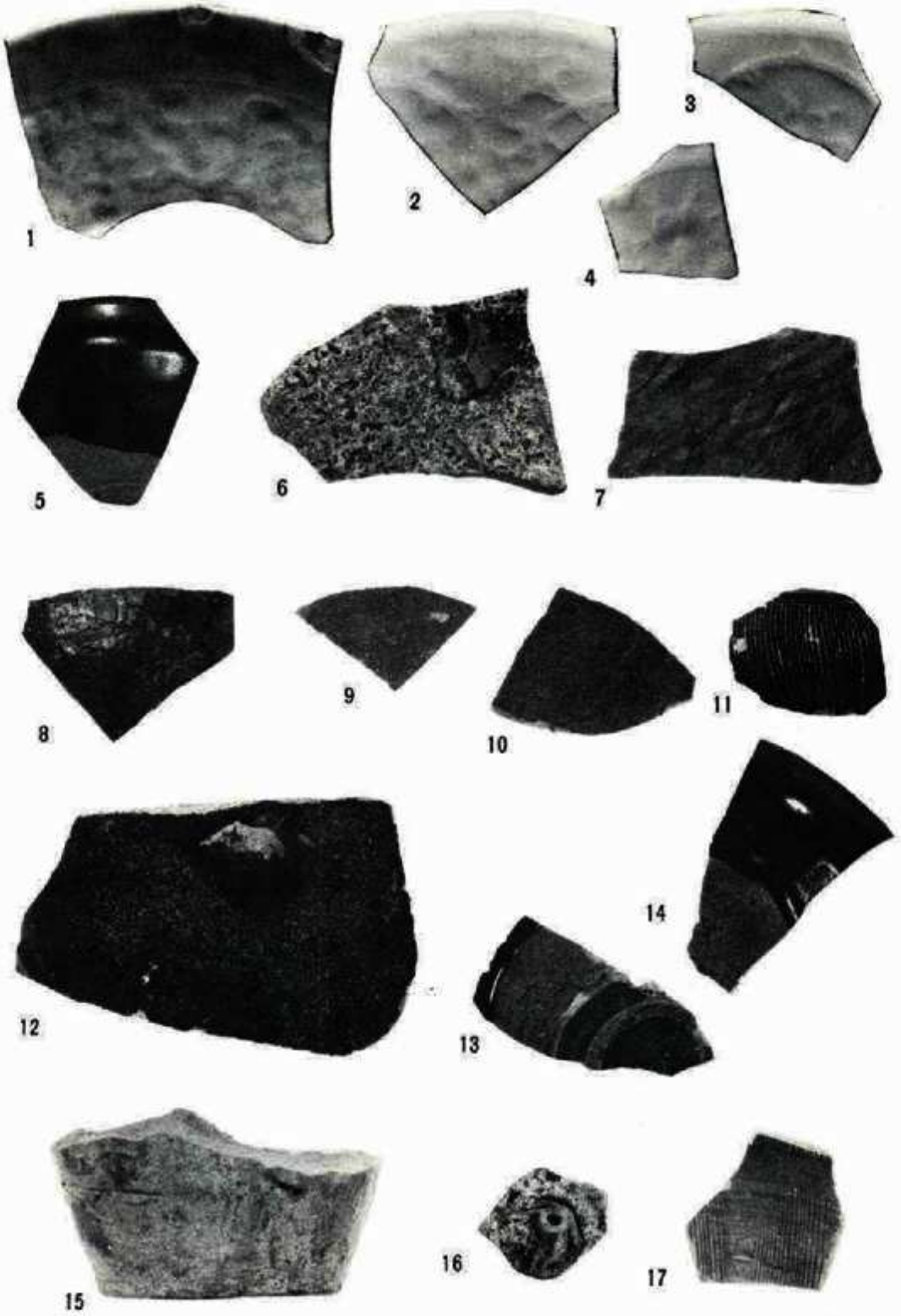
北側トレンチ根板及び杭出土状況

石垣及び杭出土状況

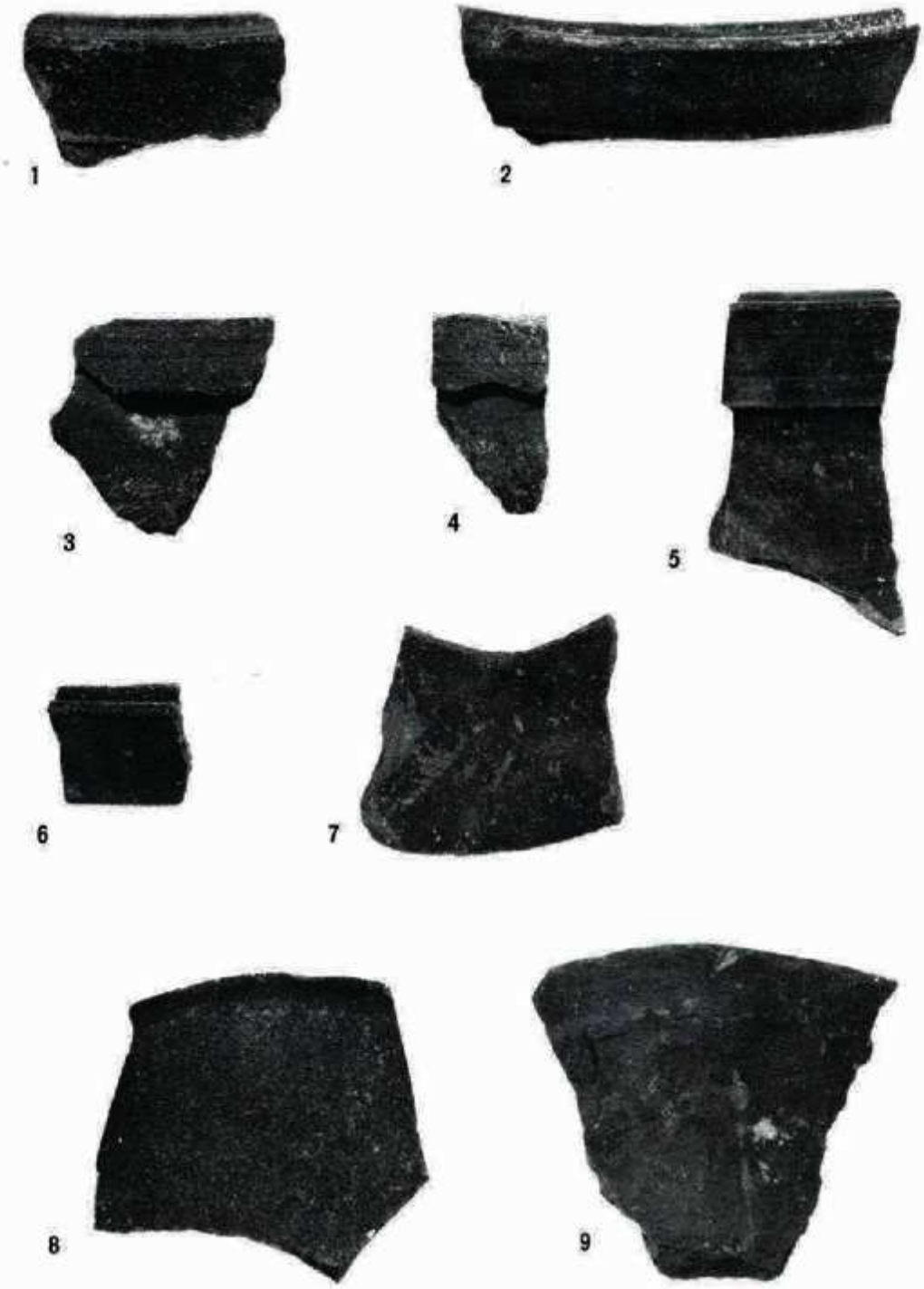
南側トレンチ石列



1～13かわらけ 14，15瓦 16瓦器（香炉脚）18，19硯　　½



1 青白磁皿　5 柿釉天目茶碗　11古瀬戸黒釉茶入　13，14古瀬戸天目茶碗　16古瀬戸灰釉水注
2～4 白磁鉢　6～10褐釉壺　12古瀬戸黒釉蓋　15古瀬戸灰釉瓶　17美濃褐釉擂鉢　½



1～7常滑甕　　½

8，9常滑系捏鉢

47　藤内定員邸跡

昭和53年３月３日～16日

小町一丁目309番２

発掘調査団

鎌倉市中央公民館建設計画に伴う試掘調査である。調査地は旧市庁舎跡。調査は鎌倉市が委託し、斎木秀雄氏を団長とする調査団によって実施された。当調査については、調査団から概要報告書が提出されているのでこれを引用する。なお、調査結果にもとづき、昭和54年度に本調査が行われ近く報告書の刊行が予定されている。

試掘調査概要（発掘調査団）

調査は昭和53年３月３日～３月16日までの11日間にわたって行った。テストピットは若宮大路と主軸を平行させ、現存する建物等を考慮し５個所設定した。テストピットの番号は調査開始順につけた。

第１テストピット　３×３ｍ

地表下約150cmで遺構面を確認した。この部分は、旧市庁舎の地下室らしきものが地表下100cmで確認された。検出された遺構は柱穴（直径45cmの不整円形）のみであった。柱穴の覆土から写経石と考えられる玉石、鉄釘、小型片口壺（完形）が検出された。この柱穴は室町時代の遺構であると考えられる。

室町時代の生活面は確認できなかった。

第２テストピット　４×４ｍ

地表下約100cmで室町時代、約160cmで鎌倉時代の二時期の生活面が確認された。

室町時代の面からは、二基の墓壙（各々に人骨が一体）が確認された。人骨は二体共に旧市庁舎、及びそれ以前の建物に一部を壊されていた。墓壙からは、鉄釘、かわらけ等が出土したが、銅銭は検出できなかった。

鎌倉時代の面からは、土　、柱穴、溝等が確認された。

第３テストピット　３×３ｍ

地表下約80cmで室町時代の石垣（土丹を使用）が確認された。石垣は若宮大路にほぼ直交する方向をもち、北側（大巧寺本堂側）に土丹を敷きつめた良好な生活面が確認された。生活面は時期

の異なる３枚が確認された。石垣の南側には幅100cm、深さ約80cmの溝が石垣に平行するように確認された。

鎌倉時代の生活面（地表下約170cm）では二基の土壙が確認された。土壙覆土からは多くの木器片が検出された。

第４テストピット　４×４ｍ

地表下約150cmで、鎌倉石二石を据えた生活面を確認した。この付近は攪乱が深くまで及んでおり、鎌倉石が持ち去られたとも考えられる。建物の一部であると考える。更に、この面の下20cmからやや固い面を確認した。この面からは土壙が確認された。

第５テストピット　３×３ｍ

地表下約150cmで鎌倉時代の生活面を確認した。この面から土壙、柱穴などが確認された。

室町時代の生活面は確認できなかった。

以上、各ピットの概要を述べた。

施設建設用地内全域にわたって室町時代・鎌倉時代の二時期の遺構が確認された。遺構は、旧市庁舎、及びそれ以前の建物に一部分破壊されてはいるが、比較的保存が良い。特に、建設用地北半分には室町時代の生活面が良好に残っていると考えられる。

推定される遺構としては、第２テストピット付近の墓地（室町時代）、第３テストピット付近の建物跡（室町時代）などがある。鎌倉時代の遺構は、部分的な調査のため明確にはできなかったが、柱穴、土壙、溝等が高い密度で確認された。

出土遺物は約500点以上であるが、中でも緑釉陶器片４点、小型片口壺の完形品等は学術的価値が高い。その他、青磁、青白磁、白磁、常滑、かわらけ、鉄釘、銅銭（宋銭）写経石（？）等が出土している。

（斎木秀雄）

調調査団長

斎木秀雄

調査員

河野真知郎　杉山春信　長谷川健雄　斎木明美　宇田川正宏　笠原穂高　高橋邦男

常滑系片口壺　　½

48　光明寺裏遺跡

昭和53年３月29日～４月１日

材木座六丁目846番１他

発掘調査団

「光明寺裏遺跡－鎌倉市材木座所在北区立鎌倉学園用地内の中世遺跡発掘調査報告書－」北区鎌倉学園内遺跡発掘調査団　昭和55年３月　参照

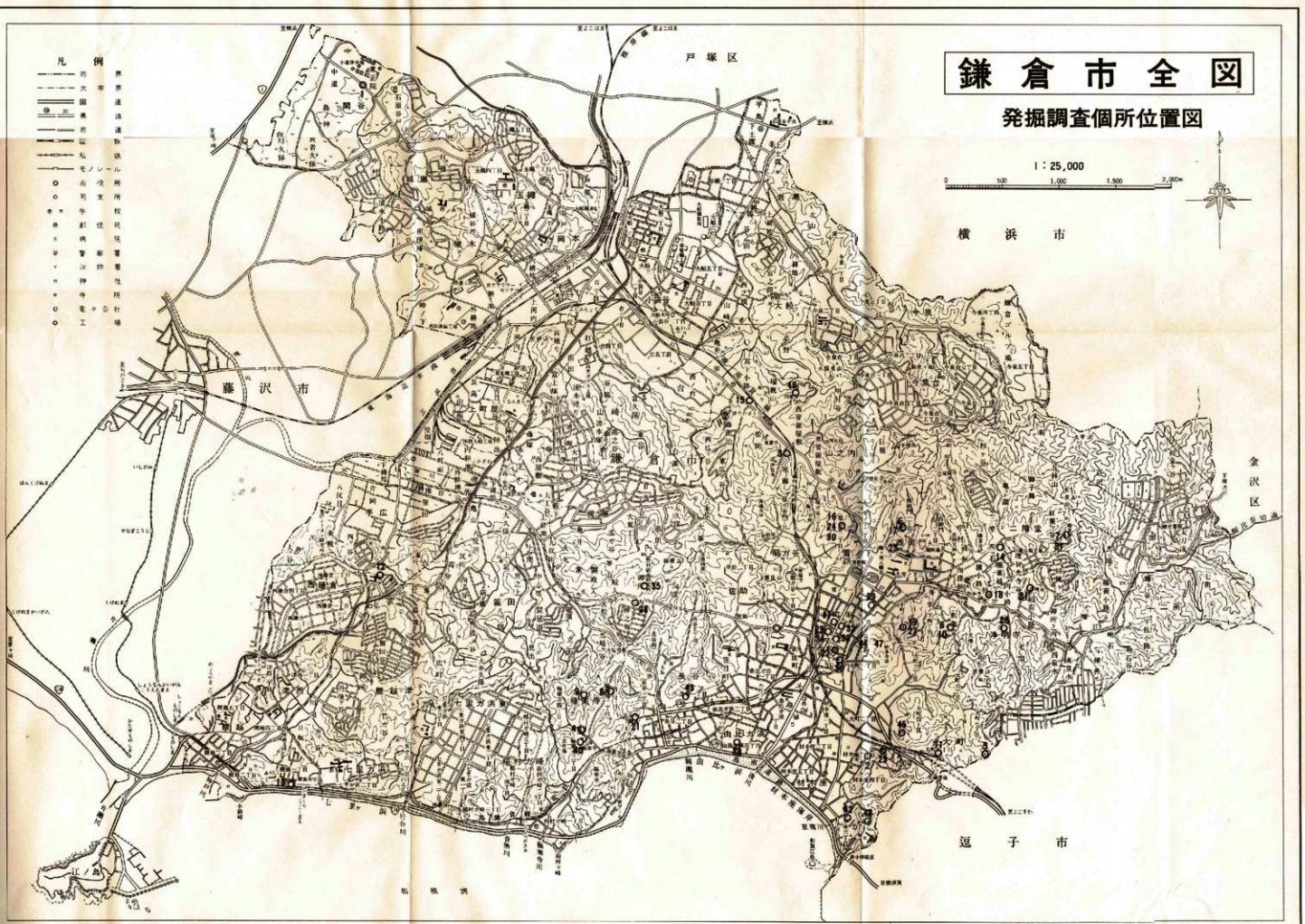
鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報　I

発行日　昭和58年３月１日

編集者　鎌倉市教育委員会社会教育部
文化財保護課
鎌倉市御成町１８番１０号

発行者　鎌倉市教育委員会

印刷者　中川印刷株式会社
横浜市中区山田町７町の１


鎌倉市全図
発掘調査個所位置図
1：25,000
0
500
1,000
1,500
2,000m
凡例
戸塚区
横浜市
藤沢市
鎌倉市
金沢区
逗子市
相模湾